
或る「悪人」の幸福

北川瑞山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る「悪人」の幸福

【Nコード】

N8279X

【作者名】

北川瑞山

【あらすじ】

和哉は善人だった。同時に悪人だった。「悪人」とは何か？それに気付いたとき、和哉は死の選択を迫られる。内気な青年の成長を描いた長編。

第一章

春に寄り添う人は数知れない。春はあらゆる幸福の象徴であった。その年の春、和哉は大学に進学した。東京の山手線沿いにある大学で、繁華街からほど近い。田舎から上京してきたばかりの和哉は、春という季節柄も手伝って、一等はしゃいだ気持ちであった。桜並木を通り抜けるたび、「俺は東京に来たんだ」「俺もついに大学生になったんだ」という喜びを反芻していた。

全くの新天地で一人暮らしを始めた和哉は今、孤独である。だがそれは何物にも代え難い孤独であった。人生の第二章というべき新たな幕が今、開かれた。その全ての原点に、自分は今立っている。全てがここから始まるが故の孤独であった。今までのカビ臭い思い出から解き放たれ、全てをやり直すことのできる自由。そんな瞬間を、和哉は心から待っていた。

和哉には、以前の自分を捨てたくなるような暗い過去がある訳ではない。無論、人生に辛いことは付きものであるから、些細なことをあげればきりが無い。まして和哉は世を渡っていく術に関して全く器用な方ではないから、なおのこと生き辛い人生ではあった。だが持ち前の真面目さで苦難を乗り切り、いつも大概はなんとかやってきたのである。そんな不器用でも実直な生き方が、今報われようとしている。和哉にはそう思われた。だからこそ今までとは違った生き方を、和哉は強く望んでいたのである。

和哉の実家は、石川県の輪島市にある。日本海に面した町で、和哉は少年時代の多くをここで過ごした。もっとも、幼少期においては輪島で過ごした記憶が和哉には殆どない。和哉の父親は銀行マンであり、転勤が二、三年に一度というペースであったため、一家はその度に日本中のあちこちに住まいを移さなければならなかった。それが和哉が中学に入ったあたりで、一家は父親の故郷である輪島に一軒家を構えた。それ以降も父親の転勤は続いたが、単身赴任と

いう形で、和哉を含めその家族を輪島に残し、父親のみが移動する形態をとった。よって和哉は中学、高校時代を輪島で過ごしたことになる。幼少期の度重なる移動のためか、和哉は愛郷心というものが薄い。土地に対する愛着よりもむしろ、その土地の風土や人柄、利便性といったものを重視した。加えて和哉は田舎が嫌いであった。皆が均質な価値観の中で暮らす、いわゆる「ムラ社会」に、何とも形容しがたい閉塞感を抱いていたのである。和哉が東京に出てきたのにはそういった背景があった。東京でなら互いの感性を分かち合えるような仲間に出会えるような気がしていたのである。

両親は、和哉が東京の大学に進学することに協力的であった。和哉の両親は「思ったことは何でもやってみろ」という奔放な教育方針の持ち主であったし、和哉の父親は今や大銀行の幹部という立場にあったため、経済的な負担に対する懸念がさほどなかったのである。加えて和哉は、高校を卒業してから大学に入学するまでの間に一年の浪人期間を経ている。高校での和哉の成績は優秀であったが、何せ田舎の高校であり、特別進学校という訳でもなかったから、ストレートで東京の大学に入るには少しばかり偏差値が足りなかったのである。そうまでしても、和哉の両親は息子の意向を快く受け入れ、惜しめない支援をした。和哉はそんな両親に深く感謝をしつつ、高校卒業後の一年後に、無事東京の大学に合格し、入学したのである。

大学に入学して早々、和哉にはやるべきことがあった。それは共通の趣味を持つ仲間を見つけることであった。和哉には音楽の趣味があった。それが和哉の場合、趣味という範疇を超えて唯一の生き甲斐になっていた。和哉は幼い頃からピアノやギターといった楽器に触れていたし、また日頃から様々な音楽を聴くことで、感性を磨いてきたつもりである。ただ、故郷にはそれを分かち合う仲間がいなかった。ピアノをやっている男などは、おおよそ少女趣味だとか言われて、集団から遠ざけられるようなところである。仲間同士でバンドを組んだり、価値観を共有するなどということは望むべくも

なかった。そうした故郷で叶わなかった夢を実現させることが、実は和哉が東京に來たことの第一の目的である。

（早く同志を見つけなければ…）

和哉は内心焦っていた。大学内の音楽系のサークルを覗いてみたりもした。ただどこも暇を持て余した学生が時間を潰すために集まった、馴れ合いの集団の様にしか思えなかった。それは和哉の求めているものと違った。自分はもっと真剣に音楽をやりたい。学生の馴れ合いでは困るのだ。それともう一つ、和哉は元々集団の中での人間関係というものが苦手であった。群れることが元来嫌いなたちであったし、それ以上に人間が集まるところには、必ずと言っていいほど先輩やキーマンに取り入ったり、派閥を作ったりというような面倒な人間関係が存在する。そういった中での権謀術数の類いを、和哉は生理的に受け付けないところがあった。頭ではわかっていても、どうもその波に乗る気にはなれないのである。元来芸術家などの孤高のプライドを持つ者はそんな人間が多いらしいが、ひょっとすると和哉もそんなタイプの人間だったのかもしれない。そんな訳で、和哉は仲間が欲しいと思いつながらも、サークルなどの集団に入ることを躊躇したのである。

そうこうしているうちに、入学した日から一ヶ月が過ぎてしまった。東京の生活にも慣れたし、アルバイトも決まった。退屈極まらない大学の授業にも、今のところ出席している。だが肝心の音楽仲間を見つける手段がない。

（何か良い手立てはないものか）

これでは故郷にいた時と何も変わらない。いや、故郷には友人が少なからずいたが、まだ東京にきてから友人の一人さえできていない。なんだか故郷にいた時よりも一人である時間が増えたようである。もっとも和哉は一人であることにあまり苦痛を感じない人間である。一人でいることはむしろ好きであるが、かといっていつまでも一人でいては東京に來た甲斐がない。

いつものようにざわついた大学の構内を一人で歩いていると、掲

示板のビラが目についた。見てみると、和哉が一度見学に行ったこともある、バンド系サークルのライブの告知であった。ライブは今度の日曜、大学内のホールを借りて開かれるらしい。ちょうどその日はアルバイトもなく、一日予定がなかった。

（まあ入部はしなくても、とりあえずどんなものか見に行ってみるか）

大して期待もしていなかったが、和哉は休日の予定を決めた。

第二章

日曜日、よく晴れていた。和哉の住んでいるアパートから大学まで自転車で十分ほどの距離であった。ライブは午前十時から始まる。和哉は身支度を整え、すぐさま家を出た。大学まで自転車を飛ばす。五月にしては少し暑いくらいの陽気である。が、青空とそよぐ風が心地よい。大学に着くと、すっかり葉桜に変わった桜並木を通り抜け、ベンチのある広場へ向かった。日曜のためか、大学の構内は平日と打って変わって伽藍として、広場の中央にあるベンチだけが白く光っていた。人気のない大学構内は静寂に包まれて、木漏れ日に鳥のさえずりが響いている。まだライブの始まる予定時刻よりも二十分も前である。和哉はベンチへ腰掛け、自動販売機で買った缶コーヒーを飲みながら、開場を待った。

ふと気づくと、和哉の隣に男が一人、座っていた。大学生らしいラフな出で立ちで、見た目は何とも大人しそうな感じのする男である。同じライブの開場待ちをしているのだろうか。この時間にここにいるなら、きっとそうに違いない。向こうも一人なら、声をかけてみようかと、和哉は考えた。が、日頃無口なこの男は、その一声がなかなか出てこない。その時、思いがけず隣の男から声をかけられた。

「君もライブを見に来たの？」

不意をつかれて、一瞬和哉は何と返答すれば良いか考えてしまった。

「うん。バンドやりたくて。ここのサークルに入ろうか、迷ってるところなんだ。」

無論サークルに入るつもりは、和哉には毛頭なかったが、そう体裁を繕った。

「そうか。じゃあ俺と同じだね。学部は？」

「経済学部だよ」

「いや、これは驚いた。学部も一緒じゃないか。東京の人？」

「いや、出身は石川県だ。君は？」

「俺はもうずっと東京さ。高円寺の方に住んでる。俺は河野雄一ってんだ。よろしくな」

「俺は平野和哉だ。よろしく」

二人はそれから、音楽のこと、地元の友人のこと、学部の授業のことなどを取り留めもなく話し込んだ。二人は今までの音楽遍歴が驚くほど似通っており、すぐさま意気投合した。ちなみに雄一のパートはベースだそうだ。雄一は一見大人しそうに見えたけれども、話し振りからしていかにも利発で、頭の回転が早く、そのくせ口調が穏やかで話をしやすいタイプであった。東京人とはこのようなものかと、和哉は思った。

かれこれ二人が話を始めてから一時間は経つ。とっくにライブの開始予定時刻は過ぎているが、依然としてライブは始まる様子がない。準備に時間がかかっているのであるうか。それにしても部員と見られる連中が外で吞気にタバコをふかしながら談笑しているが、どうなのだろうか。和哉は若干躊躇った。

ようやくライブが開始したのは、予定時刻を一時間半も過ぎてからのことであった。和哉と雄一は、やっとのことでホールに入ることができた。ライブの内容についてはあまり詳しく述べる必要もない。演奏自体はそこそこ聴けるレベルではあったものの、一曲演奏する毎に演奏するメンバーが入れ替わり、次のメンバーがスタンバイをする。おおよそ5分演奏して10分スタンバイといった具合である。スタンバイの間、観客はただ暗闇の中無音のまま待たなければならない。実に無駄な時間である。おまけにMCで話す内容は全体的に内輪ネタであり、観客にはさっぱり意味が分からない。和哉の思った通り、所詮は学生の馴れ合いである。和哉の嫌う「ムラ社会」の匂いが、場内にこれでもかと漂っていた。和哉は一刻も早くこの空間から脱出したかった。だが隣にいる雄一に気兼ねして、席を立つタイミングを計りかねた。二人がようやくホールを出たのは、昼食の時間になってからである。和哉と雄一はホールを出て、学生食

堂の方へ歩いていった。学生食堂では多くの学生がテーブルを囲んで、談笑したり、ボールペンを片手に何か真剣に話し込んでいたりする。こうした学生たちの姿は、和哉が「大学生」という存在に抱いていたイメージと最も近い。和哉と雄一はそれぞれの昼食を手に取り、他の学生がしているのと同じように対座した。ここまで二人とも無言であったが、昼食を口にしながら、最初に口を開いたのは和哉であった。

「いや、良いライブだったと思うよ。スタンバイの待ち時間が長かったのは気になったけど、演奏も上手かったし、部員も面白そうな人たちじゃないかな」

もちろん和哉にとっては心にもないことだったが、そう最初に言わなければ、何か気まずいことになりそうな気がしたのである。そういう空気を察したのか、雄一も儀礼的な口調で答える。

「うん、演奏は上手かったよね。スタンバイはまあ、しょうがないんじゃないのかな。あれだけの人数の部員がいたらさ」

しかし会話はここで止まってしまう。黙々と昼食を口に運びながら、和哉はどうやって事の核心に触ればよいか、考えあぐねていた。食事中、終始無言でも困るので、和哉はとりあえず当たり障りのない事を話した。

「この後、ライブの午後の部だけど、どうする？見ていく？」

「どうするかな。大体の雰囲気もつかめたし、最後まで見る必要はないかと思うんだけど。まあ平野君が見ていくなら、俺も付き合うよ」

と、雄一の返答は曖昧である。しかし、和哉はどうした事か、ここで一気に自分の気持ちを伝えなければ、という心情になった。雄一の返答の中に、彼が自分と同じ感情を抱いているのではないかという感触を微かに感じたからかどうか。

「正直に言うとな、俺はなかなかあそこのサークルで上手くやっていける気がしないんだ。方向性が違うんだと思う。俺は音楽をやりたいがために東京に出てきたようなもんだし、やるならとことん打

ち込んでみたいんだ。音楽にね。もちろん音楽をするには仲間が必要だよ。ただ仲間との馴れ合いの中で、自分の目指す方向性を見失いたくはないんだ」

と、和哉は言い終えた後、語気が強すぎはしなかったか、誤解のないように伝わったか、心配した。今日出会ったばかりの人に、ともすると「お前とは仲良くする気はない」と捉えられかねない発言であつたかもしれない。しかしそういった和哉の心配をよそに、雄一は大きく頷いて言った。

「分かるよ、その気持ち。やっぱりさ、大学のサークルでなんてやってたって、単なる仲良しクラブで終わりそうな気はするな。どうせ三年生になって引退すると就職活動が待っていて、そうこうしているうちに音楽やってた事なんてすっかり忘れてるんだ。先が知れてるよ。学生時代の良き思い出作りならそれでいいかも知れないけどな。そうじゃないんだよな」

和哉はそこで初めて確信した。雄一は自分と同じ思いを抱いている。ならばいっその事この人と一緒に音楽をやっていけはしないだろうかという新たな考えが、頭をよぎった。和哉は一つの提案をした。

「なあ、それだったら一緒にメンバーを探して、大学の外でバンドをやらないか。お互いそのほうがいいと思うんだ」

考えてみれば、今日知り合ったばかりの人に、気の早すぎる提案かとも思われた。確かに和哉にそれほど気の焦りがあったことには相違ない。しかしそれ以上に、この人とならやっていけそうだという確信めいたものが、和哉にはあった。それほどまでに雄一は音楽に対する考え方も、音楽の趣味も自分と近かったのである。雄一は少し考えるようなそぶりを見せつつ、こう言った。

「それなら、俺の高校時代の先輩が近々ライブやるんだけど、一緒に行く？その先輩結構顔広いから、もしかしたらメンバーを紹介してくれるかもよ」

もちろん、和哉にとっては願ってもない話である。そういった人間関係の数珠繋ぎが苦手な和哉にとっては相当に勇気のいることであ

ったが、ここで確かな一步を踏み出したかった。

「それはありがたい。是非行かせてもらいたい」

それから二人は連絡先を交換し、サークルの午後のライブには行かずに、そのまま食堂で無駄話をしつつ、夕方ごろに別れた。雄一の先輩のライブについて、詳細がメールで和哉に送られてきたのは、それから数日後のことである。場所は高円寺駅にほど近いライブハウスであり、六月第一週目の土曜日、午後五時開演とのことであった。

第三章

ライブ当日、和哉は地図を頼りにJR高円寺駅から、会場となるライブハウスへ向かった。駅からライブハウスまでは徒歩で五分もあれば着くような距離であったが、街並が雑然としている上、目立たないところにあるためなかなか見つけられなかった。どこにでもあるマンションのような建物の横に、地下に通じる階段が設けられており、そこを降りるとやっとライブハウスのエントランスと思しきネオンが確認できるのである。和哉は扉を開き、ネオンをくぐり抜けて中に入った。ドリンク代の五百円を払って中に入ったのはいいが、ライブハウスの中は全くの暗闇で、人も多いため、なかなか雄一の姿を見つけたことができなかった。暗い人混みの中に一人にいるのは不安なものである。暗闇に目が慣れてきたころ、和哉は壁にもたれてドリンクをすすっている雄一を見つけた。雄一はどことなく場慣れしているようで、余裕があるように見える。和哉は雄一に声をかけた。

「先輩はいつ出るの？」

「トリだから、七時にはなるだろうね。まあそれまで他のバンドの演奏を見るのも悪くないよ」

それから二時間半ほど、二人は入れ替わり立ち替わりのバンドの演奏を見ては、色々と批評した。あれはドラムが目立ちすぎているだの、ギターの音色が少し違っていているだのといったことである。

雄一の先輩がステージに姿を見せたのは、七時半頃のことである。雄一が和哉の耳元で囁いた。

「ほら、あのヴォーカルの人だよ。松本さんっていうんだけどね見るとステージ上には、背丈が180センチはあろうかという偉丈夫が立っていた。体つきががっちりしていて、一見強面である。

バンドは古めかしいハードロックを演奏していたが、楽器隊の演奏

が上手く、何よりヴォーカルの存在感、歌唱力で、会場をあっという間に熱気の渦に引きずり込んだ。バンドは五、六曲を演奏したはずだが、今までの出演バンドに比べるとごく短時間に感じられた。それほどに和哉も夢中で見ていた。

演奏が終わった後、会場の熱気冷めやらぬうちに、控室から出てくる松本を雄一が待ち構えていた。

「お疲れ様です。松本さん、今日のライブ最高でしたよ」

「ありがとう。悪いね、いつも来てもらって」

と、松本は顔の汗を拭きながら、屈託のない笑顔で答えた。松本は一見強面に見えたが、一旦ステージを降りると常に笑顔を絶やさぬ人で、実に穏やかな口調である。和哉は内心、ほっとしていた。雄一が松本に和哉を紹介する。

「実は今日、大学の友人と一緒に来ていまして、それがここにいる彼なんです。平野君といいます」

「平野和哉と言います。よろしくお願いします。ライブ拝見しましたが、感動しました」

和哉は真面目な面持ちで挨拶をした。

「ははは、ありがとう。今日は良く来てくれたね。俺松本っていいます。雄一と高校が一緒だったんだ。雄一より二つ上か」

和哉の緊張を和らげるように、松本は優しい口調で和哉に接してくれた。ちなみに雄一は現役で大学に入学しているので、雄一より二つ上という事は一浪の和哉より一つ上ということになる。歳が一つ違うだけで、こんなにも風格が違うものかと、和哉は自分の子供っぽさを恥じていた。

和哉はこれまで、目上の人間を慕った経験が殆どなかった。学校の教師は全く好きになれた試しがなかったし、運動部の先輩などはもってのほかである。ちょっと先に生まれたくらいの話で、「人生の先輩」面をする人間を、和哉は軽蔑すらしていた。和哉は大人しそうな外見と真面目な性格を持ちながら、それでいて反骨精神の人一倍強いところがあるらしい。和哉が人間関係を苦手とする原因は、

こういったところにあるのかもしれない。ともかく、そんな和哉でも松本を受け入れるのにそう時間はかからなかった。

雄一は松本と二言三言の会話をした後、さりげなく本題に入った。

雄一は松本に事の顛末を説明し、どうにかバンドのメンバーを集められないか、あるいは自分たちのパートのメンバーを募集しているバンドがないか、相談を持ちかけた。和哉にしてみれば、初対面の人にいきなりこんな相談をする事がひどく不躰なように思えたけれども、松本は嫌な顔一つせずに真剣に話を聞いてくれた。話を聞き終えた松本が、考え込むような素振りでこういった。

「まあ今すぐにどうこうできる訳じゃないけど、要するに大学の外でバンドをやりたいってことだろ？わかった。できるだけの事はしてみるよ。とりあえず少し時間をくれないか」

「すみません。こんなお願いができるのは松本さんだけなものですから」

雄一は頭を下げて非礼を詫びた。それにつられて和哉も頭を下げる。松本はよほど面倒見の良い性格なのだろう。これなら後輩が慕うはずである。

その後、松本は控え室に戻り、和哉と雄一はライブハウスを出て、近くの定食屋で共に夕食を取り、それぞれの帰路についた。

第四章

和哉はここ最近、大学の授業を欠席することが多くなってきた。授業自体がつまらないのもその一因だが、それ以前に和哉自身が経済学というものに全く興味を持たないのである。なぜ経済学部に入ったのか、和哉自身よくわからない。おそらく親の勧めや、「就職に強い」という謳い文句を信用してのことだろう。ほとんどあてずっぽうで決めたにすぎない。もっとも、入った学部が法学部だろうが文学部だろうが、和哉は興味を示さなかったであろう。要するに音楽ができればそれでよかったのである。かといって音大に入るほどの英才教育を受けてきたわけではないし、フリーターになって音楽をやっていくほどのバイタリティーも勇気もなかった。それで仕方なく、周りになびくようにして大学に進学したのである。そんな和哉が学問に興味を持てなかったのは、こういった経緯からすれば当然のことだろう。もっとも和哉だけが特別なわけではない。むしろ日本の大学に関していえば、和哉のように何の目的もなく入学してくる者が多数派ではないだろうか。本来、何らかの目標に近づくための専門性を身に付けに大学に行くのがあるべき姿だが、実際は猫も杓子もとりあえず大学に行って、目標は後から考えようというのが学生の大半を占めているスタンスである。何の目標も動機付けもないのに、勉強など続けていけるはずがない。日本の大学がレジャーランド化してしまうのには、一つにはこういう背景がある。恐らく和哉を含め、多くの学生が共通して感じていることは、「何のために大学に行くのだろうか?」ということである。その問いかけに答えられる人間が、少なくとも和哉の周りにいなかった。こうなると、もう大学の授業など出ていられなくなる。バンド活動などしている場合はなおさらである。

雄一から連絡が来たのは、和哉がライブに行ってから二週間ほど経ってからの話である。どうやら松本から連絡を受けたらしい。メン

バーを募集しているバンドが見つかったから、各自楽器を持って明日の午後五時に高田馬場にあるスタジオに来てくれ、ということだそう。早速オーディションでもやるのだろうか。まあいいさ。行ってみればわかる。今日は入念に準備をしておこう。と、和哉は自宅でギターの弦を張り替え、シールドの接続に問題がないかチェックをした。

翌日、和哉は雄一と大学の構内で待ち合わせ、高田馬場のスタジオへ向かった。道すがら、二人は今日会うバンドのメンバーはどんな人だろうと、空想を膨らませた。

「なあ、今日会う人たちってどんな人だと思う？」雄一が尋ねた。

「いや、全く想像つかないよ、お前こそ松本さんから何か情報聞いてないの？」

「聞いてないな。わがまま言える立場じゃないしさ。まあロックとかやってる人たちだっていうのは聞いたけど」

「ロックじゃ漠然とし過ぎだろ。どうする、初期のエックスみたいに髪の毛立ってる人たちだったら」

「いや、俺エックス好きなんだけど。それにしてもあんなカッコするの俺たちの柄じゃないわな」

「あり得ない話じゃないぞ。何せビジュアル系の全盛期は過ぎたとはいえ、未だに根強いファンは多いからな」

そんな訳で、二人の心配はいつの間にかビジュアル系バンドの話題に移し、そのままスタジオに着いた。スタジオの待合室には既にタバコを吸いながら二人を待つ松本の姿があった。スタジオの待合室はかなり混雑していて、色とりどりのヘアスタイルの若者でごった返し、妙に空気が淀んでいた。その部屋の隅に、松本はいた。この男は大柄なせいか、こういった状況の中でも一際目立つ。その松本がこっちに向かって笑いかける。

「よお、やっと来たね。もうバンドのメンバーはスタジオに入ってるよ」

「松本さん、ありがとうございます。こんなに早くご紹介いただけ

るなんて、思ってもいませんでした」

雄一は礼を言いながら深々とお辞儀をした。

「いやいや、まだ正式に加入が決まった訳じゃないから。今日メンバーとよく話してみて、お互いにやっていけそうだったら正式加入っていう流れじゃない？ そうなると良いけどね」

松本はそういうとタバコを灰皿にねじ伏せ、席から立ち上がった。

「じゃ、行こうか」

というなり歩き出した松本に続いて、雄一、和哉はその後を追った。

スタジオに入る前、若干人見知りの気がある和哉はひどく緊張した。初対面で人の印象が決まるというが、和哉はどうもこの初対面が苦手である。このため和哉は初対面の相手に相当に気を使う。そういう態度が幸いしてか、和哉は初対面でいきなり嫌われたり、警戒されたりした事はなかった。恐らく和哉の第一印象は「真面目で優しそうな人」という点で多くの人が一致するであろう。しかし和哉はその期待に応えて「いい人」を演じてしまう自分がこの上なく嫌いであった。善人は百のうち九十九が善でも、残りの一が悪と見なされれば、たちまちに他人の反感を買ってしまう、損な役回りである。まして和哉は善人でも何でもない。真面目な性格ではあるが、自分が損をしてまでその役に徹しきれるほど真面目ではない。人並みに心の陰の部分を持ち合わせている。そんな自分が「いい人」の型にはめられてしまうのが、和哉にはとても窮屈だったのだ。例えば、強面の人がふいに優しい顔を見せると、誰もが喜ぶ。そういう人を和哉は羨ましく思う。和哉はその逆だからである。しかし今の和哉にはそんな事を気にしている余裕はない。「いい人」を演じきる事が唯一自分を救うための手段に思えた。

「お疲れ様です」

松本がまずスタジオに入った。

「この間話してた、俺の後輩を二人連れてきたよ」

すぐごと雄一、和哉がスタジオに入る。見るとスタジオには三人のメンバーがいた。ベースを持ちながらマイクの前に立っている男

が一人、彼はベースボーカルだろうか。ドラムセットの椅子に座っているひよろつとした体型の男が一人、そしてギターを持って椅子に座り、何やら機材の調整をしている女が一人である。全員和哉や雄一と同じくらいの年齢だろう。皆普通の大学生といった感じの出で立ちであり、和哉や雄一の先ほどまでの心配は杞憂に終わった。

「初めまして、ベース希望の河野雄一です。よろしくお願いします」雄一が自己紹介をした。

「初めまして、ギターを希望しております、平野和哉です。よろしくお願いします」

和哉も続いた。

「やあ、こちらこそよろしくね」

と、最初に言ったのはベースボーカルの男である。体格こそ小柄だが、顔はなかなかの男前である。

「今日はセッションをしてみて、とりあえず様子を見るところから始めようかと思うんで、とりあえず機材の準備して」

セッションとは、決まり切ったフレーズを演奏しながら、各パートのメンバーが順番にアドリブを回していく、即興演奏である。

「は、はい！」

和哉と雄一は緊張した面持ちで返事をする、いそいそと各自の楽器を準備した。和哉は久しぶりに人前でギターを弾くので、うまく弾けるかどうか不安であった。とりあえずギター、エフェクター、アンプを全て接続し、音が出るようにセッティングできた。和哉は自分の呼吸が喘いでいる事に気付いた。雄一は既に準備が整っている様子だ。

「OK?じゃあドラムで適当にリズムを刻むから、それに合わせてセッションをしてみて」

と言うなり、ベースボーカルの男とギターの女は後ろに下がり、輪の中から抜けた。つまりは和哉、雄一、ドラムの男の三人でセッションをすることになる。

「いきまーす。1, 2, 3, 4」

ドラムの男が威勢のよいかけ声でカウントを始めた。続いてドラムが四拍子で軽快なリズムを刻む。

（上手いな）

生のドラミングをこれだけ間近で聞いたのは初めてだ。思えばこの場所は和哉にとって初めて目にするものだけである。板張りの床に黒い内壁の防音室、巨大な目玉の様なスピーカー、不必要な程の数折り重なるマイクスタンド……。今更ながら和哉はその場から逃げ出したい様な緊張感に襲われた。そして四小節目が終わった次の瞬間に、雄一のベース音が、ドラムのリズムに合わせて繰り返しのフレーズを奏でる。和哉は雄一のベースを初めて聴いたが、こちらもそつがない。

いよいよ和哉の番である。和哉はセッションというものを一度もやったことがない。今まで一人でギターを練習していたのだから、無理もない。とは言えコード進行やスケールくらいはマスターしているのも、何とかなるだろう。というのが和哉の予想であった。事実、何とかなっていた。和哉のギターは雄一のベース音に上手く乗り、それなりにソロフレーズも弾けた。和哉は言いしれぬ快感と興奮を覚えた。他人と音を合わせることが、こんなにも心地よいものだとは、想像だにしていなかった。和哉は暫し、胸の動悸を忘れた。演奏開始から二十分、三十分ほど経ったであろうか。ドラムの男が終わりの合図を出し、最後の一音で三人とも一斉に演奏を終わらせた。和哉はもっとやっていたかったが、時間があまりにも早く過ぎてしまっていた。

「よう、お疲れさん！」

ベースボーカルの男が拍手をしながら近づいてくる。松本も微笑を浮かべながら拍手を送っている。ギターの女は無表情に黙ったままである。

「なかなかいい出来だったんじゃない？ ねえ、松本さん」
ベースボーカルが松本を振り返る。

「ああ、まあ俺の後輩だからな。なかなか良かったよ」

その言葉に、雄一は照れ笑いをしている。

「ギターも様になってたんじゃない？どうだった、ギターから見てもベースボーカルがギターの女を振り返る。」

「うーん、指は割と動くみたいね。音作りをもうちょっとなんとかすべきだけど」

初めて口を開いたギターの女は、淡々と言った。和哉は、痛いところを突かれた、と思った。和哉は一人でギターを練習するとき、運指の練習はひたすらするものの、ギターをアンプに繋いで練習する事をあまりしなかったのである。そのため実際に機械を通してどんな音が出るか、という点に和哉は無頓着だった。

「ま、そこんところはお前が色々指導してやれば良いだろ。取りあえずプレイ自体に問題はなさそうだ」

ベースボーカルは和哉を何かとフォローしてくれた。

「そうだ、こっち側の紹介がまだだったな」

言うなりベースボーカルはメンバー紹介を始めた。

「ドラムが栗田、ギターが二宮、俺がボーカルで、北川です。よろしく」

和哉は、人の顔と名前を覚えるのは得意である。さらっとした紹介だったが、多分もう忘れないだろう。

「私はギターって言っても、技術屋だけどね」

二宮がクールに付け加える。技術屋とはどういう事か、和哉には分からなかったが、黙って相槌を打っていた。

「ま、そういう事で、これからどうするかは追って連絡するから。」

多分一週間もかからないと思うけど、それまで待ってて」

北川がそう言うと、松本が立ち上がった。

「じゃ、今日はここまでだな。二人とも、機材片付けて。もう行くぞ」

「はい！」

和哉と雄一は急いで機材を片付けた。スタジオを出る時、和哉はぺこぺこ頭を下げながら、

「今日はありがとうございました」

と挨拶をした。

「ではよろしく願いします」

雄一も続けた。それから三人はスタジオを後にした。

スタジオを出ると、松本が開口一番で言った。

「まあ、あの感じならうまくいくんじゃないのかね。どうなるか分からんけど、印象は良かったみたいじゃん」

「うまくいくと良いんですけどね。久しぶりに他人と音合わせたら、やる気出てきちゃいましたよ」

という雄一の言葉に、和哉も同感であった。音を合わせた時、音楽をやっていてよかったと、和哉は心の底から思ったのだ。だがあのバンドについて、腑に落ちない点も少なからずあった。和哉は松本に聞いてみた。

「松本さん、さっきのバンドなんですけど、ギターもベースも既にいましたよね。僕らが加入する必要ってあるんですか？」

「ああ、その事か。まずベースはベースボーカルだったろ。北川はボーカルに専念したいんだそうだ。だから専任のベーシストを探してたってわけ。それからギターだけど、二宮はあんまりステージに上がりたがらないんだ。ギターはそこそこ弾けるんだけど、引っ込み思案な奴でな。機械に詳しいから、技術面でメンバーをサポートしてるんだ。技術屋って言ったのはそういう事さ」

和哉は納得した。

（それで二宮さんは俺の音作りの事をいち早く指摘した訳だ）

和哉は自分の弱点を即座に見抜いた二宮の慧眼に感心していた。だが彼女がテクニカルサポート役であれば分からないでもない。きつと機材の扱いについては、和哉の知らないことまで色々知っているに違いない。

結局、松本とは高田馬場の駅前で別れた。一仕事終えて空腹だった和哉と雄一はいつもの定食屋で夕飯を済ませ、その後はそれぞれ帰宅の途についた。

第五章

6月下旬から7月上旬にかけて、和哉の大学では学期末試験が行われた。和哉は普段、授業には出ていなかったが、一夜漬けで何とかこれを取り切った。あまりいい点数は期待できないが、落第点を取る事もないだろう。大学の試験制度とは、和哉のようにあまり勉強をしていない学生に合わせて設計されているらしい。勉強をしていない学生に単位を与えて社会に輩出している訳だから、大学で習う学問など実社会では役に立たないと、大学側自身が認めているということである。和哉はこういった現象の恩恵に大いに与っているので、あまり大きな事は言えないが、とは言え「何のために大学へ行くのか」という疑問は更に濃厚になっていくばかりである。

試験終了後、大学は夏期休暇に入る。もともと普段授業に出ていない和哉にとって、あまり生活面での変化はない。雄一から和哉に連絡が入ったのは、大学が夏期休暇に入って間もなくである。あのバンドから松本経由で連絡を受けた雄一の話によると、二人のバンド加入が正式決定したらしい。和哉には何だか上手く行き過ぎているようにも思えたが、とはいえずっとこれで音楽をやっていくための土壌ができたという、喜びの気持ちの方が強かった。それともう一つ、雄一の話では、近日中にバンドのメンバーが二人の歓迎会を開いてくれるというのだ。恐らく親睦を深めるための会合だろう。和哉はそういった宴の席には不慣れであったし、第一未成年なので酒も飲めない。が、お互いの事を知り合うには絶好の機会だと、和哉にしては珍しく事を前向きに捉えた。

＊

歓迎会当日、和哉は新宿の駅前で雄一と待ち合わせ、歓迎会の会場となる居酒屋のある方角へと向かった。雄一の話では、今回は松

本は来ないらしい。前回顔つなぎをしたので、今回からは当事者同士でやってくれという事だろう。思えば縁とは不思議なものである。前回は赤の他人だった者同士が、一度会っただけで次からは知り合いとして共に酒を飲む。和哉はまだ彼らメンバーについてよく知らない。そういう人間が知り合い面をして会うのは馴れ馴れしくないか、つまり一体どんな顔をして彼らに会えば良いか見当がつかなかった。どうやらまた「いい人」を演じるしかなさそうだ。和哉にとって人間関係とは常にこういった迷いの連続である。この一点を以てしても、和哉がどれだけ人との接触を恐れていたかがわかるだろう。しかし、今はそうも言っていられない。お互いを理解し、信頼しなければ音楽はできない。これはチャンスなんだと、和哉は自分の心に言い聞かせる。一見平常心を保っている様に見える和哉の心には、こんな葛藤が渦巻いていた。

目的の居酒屋にはすぐに着いた。歌舞伎町にある普通の居酒屋である。店の周辺は毒々しいネオンが渦巻いていた。店員に先客がいるかどうかを確認したところ、どうやらまだ誰も来ていないようだ。「先が上がって待ってるか」

雄一はそう言うと、靴を脱いで上がって行ってしまった。和哉は表で待ってようか迷ったが、雄一に促されて薄暗い店内に入った。案内された席に座ると、二人は話し始めた。

「今日はやっぱり俺たちの歓迎会だから、飲まされるんかなあ」
雄一が苦笑いを浮かべながら言った。

「しかし、俺たちは未成年だぞ」
和哉は言う。

「馬鹿。そんな事を言ったら、大学の新入生歓迎会なんてどうなる？どこのサークルでも未成年の新入生が酒を飲んでるぜ」

「それは先輩に勧められて仕方なく飲んでるんだろ。俺たちはそういう馴れ合いの組織にいる訳じゃない」

「サークルもバンドも同じ人の集まりだ。そう違わないさ。お前だってバンドの人たちと円滑に付き合っていきたいだろ？」

「それはそうだが、酒を飲まないと円滑に付き合えない訳じゃないだろ」

「酒が入った方がお互いの心を開けるもんさ。緊張もほぐれて、打ち解けた雰囲気になる。お互いの信頼感も生まれる。音楽的にもその方がプラスだよ」

「まあ飲む気になったら飲むし、そうじゃなかったら断るさ。その場の空気次第だな」

和哉はあくまでも自分が飲みたい時にだけ飲む、といったスタンスである。しかし人間関係においてはそうとばかりも言っていられないのが現実である。その辺りの機微については雄一の方が一枚上手だったようだ。

「そう言って結局誰しもうが飲むんだよ」

と雄一は事も無げに言った。和哉は黙ってしまった。

二人が話しているうちに、誰かが店に入ってきたようだ。例のバンドの三人である。

「よう、お疲れさん！二人とも来てるね！」北川の声がする。

「久しぶりだな。元気にしてたか？」ドラムの栗田だ。後ろに二宮の姿もある。

和哉は立ち上がって頭を下げた。

「ええ、今日はわざわざこのような席を設けていただいて、ありがとうございます」

「いいのいいの、今日は無礼講だから、どんどん飲もうぜ」

北川は早くも酒が待ち遠しい様子だ。

「じゃ、飲み物だけ先に頼もうか。とりあえず一杯目は皆ビールで良い？」

北川が全員に聞いた。誰からも反論はない。というよりこの聞き方をされると反論ができないな、と和哉は思った。どうやら雄一の言った通りになりそうだ。かくして全員の手元にビールが行き渡った。「じゃ、堅苦しい挨拶は抜きにして、二人のバンド加入と、うちの前途を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

皆、一斉にビールを飲んだ。和哉は苦いので一気に飲み干そうとしたが、ジョッキの半分くらいまで来てギブアップした。

「つくあー！やっぱこれだな。夏場のこの瞬間はたまないね！」

北川はよほどビールが好きなのだろう。ビールの一口目を飲んだ後の、お決まりのような台詞を嬉しそうに叫んでいる。

「ちょっと、あんまり大きな声出さないでよ」

二宮が北川をたしなめるが、そういう彼女のジョッキも相当減っている。意外といける口なのかも知れない。

「ところで、二人はどんな音楽が好きなの？」

栗田がやっと音楽の話題に触れた。

「そうですね、色々聴きますけど、昔のブリティッシュロックが好きですね」

和哉が答えた。

「そうすると、ツェッペリンとか、パープルとか？」

「好きですね。ビートルズやストーンズも好きですよ」

和哉は久しぶりの音楽論議にわくわくする。

「お！渋いねー。じゃあ今度コピーでもやるか」

北川も話に乗ってくる。その後雄一も加わり、大いに音楽の話題で盛り上がった。二宮だけは始終静かであったが、酒だけは人一倍進んでいる。それでいて酔っている様子もない。かなり酒に強いらしい。一方和哉はというと、ビール一杯も飲みきらないうちに真っ赤になった。赤鬼の様な形相の和哉に、それ以上酒を勧める人は誰もいなかった。それどころか周りには和哉を心配して、

「おい、顔赤いけど、大丈夫か」

と声をかけたり、水を頼んだりしている始末である。和哉自身にしてみれば何ということではなかった。いつもより饒舌にはなっているが、体調においては何も変化はないのである。が、何せ顔が赤過ぎる。他のメンバーは雄一も含め、誰一人顔色が変わっていないのに。
(俺は酒に弱いみたいだな)

和哉は特に体調が悪いわけでもなかったが、その後酒は控えた。

宴会はその後三時間近くにわたって続き、大いに盛り上がった。

和哉も顔が赤くなりはしたが、むしろいつもより舌が回ったおかげで、メンバーと心ゆくまで語り合うことが出来た。和哉は

（来て良かった）

と思った。メンバー一人一人の音楽性、人となりがわかった。が、和哉は心の底から楽しむ、ということが不得手な人間である。楽しめた、と言えばそうに違いない。しかし心の奥では、常に冷静な自分がいて、やはり周りと距離を置いているのであった。

予約時間が過ぎ、店に追い出される形で、宴会はお開きになった。バンドの一行は勘定を済ませ、店の外に出た。二人の歓迎会ということで、和哉、雄一の分も他の三人が支払ってくれた。

「よう、二次会行くけど、どうする？」

北川が早くも二次会の店を見つけたようだ。

「行きます！俺行くっす！」

雄一は酔っているのだろう。顔にこそ出ていないが、道路の真ん中で飛び跳ねている。

「すみません、僕は、今日はこの辺で」

和哉は申し訳なさそうに言った。これ以上いると何かボロが出るかも知れない。楽しいうちに帰りたい。というのが和哉の本音であった。

「えー、平野帰っちゃうの？」

雄一は物足りなさそうに不平を言った。

「俺、酔っ払ったみたいで。申し訳ないですけど、今日は帰ります」

和哉の赤い顔を見て、誰も疑う者はいなかった。

「そっか、じゃ、お疲れさん」

和哉はメンバーの別れの言葉に頭を下げると、建物の隙間から垣間見える新宿駅の方向に一人歩いていった。

第六章

毎週金曜夕方四時から、バンドの練習である。場所は先日の高田馬場のスタジオだ。和哉は練習が待ち遠しかった。

その日がくる前に、和哉は雄一と会った。ピックや弦などの小道具を買いに、楽器屋に一緒に行ったのである。雄一の話によれば、あの宴会の日、和哉が帰った後に二次会、三次会と宴会は続いたが、最後の方の記憶は雄一にはないらしい。雄一は酔いつぶれてしまったそう。酔いが顔に出ない分、そうなるまで誰も止めなかったのだろう。酒には弱い方が案外上手な付き合いが出来るのかも知れない、と和哉は思った。

楽器屋で、和哉はピック、弦、シールドを買い、その後陳列してあるギターを眺めた。滑らかな光沢を纏ったギターは色彩の豊かさを木目に表し、和哉の物欲をそそった。

（そろそろ新しいギターが欲しいな）

今の和哉のギターは、和哉が高校生の頃から使っているものである。使い慣れているのはいいが、なけなしの小遣いで買ったものであるから、少し安っぽい。いつか金を貯めて買い換えよう。と、和哉は決めた。

楽器屋の帰り道、和哉は雄一と夕食を摂った。食事中の話と言え、大抵いつも音楽の話なのだが、今日は違っていた。

「バンドやってるとモテるのかな」

雄一は唐突にこんな事をつぶやいた。

「まさか、そんなことないよ。バンドやってモテてる奴はね、元々バンドなんかやってなくてもモテる奴なのさ」

和哉は笑いながらこう言ったが、内心心当たりがないでもない。いくら音楽が好きとは言え、その根底に「モテたい」という気持ちが、あるのは、どの男も同じである。和哉は容姿も人並みであるし、スポーツなどで活躍をした経験もない。モテる要素など殆ど見当たらず

ない。和哉本人もそれを自覚しているし、それをさして気にした事もなかった。自分は音楽しか取り柄のない人間だから、音楽で認められるようになるまでは日の目を見ないだろうという考えが、和哉の中では当たり前になっていた。裏を返せば、それは和哉が音楽に對してただならぬ期待を寄せていたという事になる。自分は音楽をやるようになれば、もっと人から認められるのではないか。そんなことは雄一だけでなく、和哉も考えてはいた。

「じゃあ平野はさ、なんで音楽やってるの？」

雄一は不満げに和哉に問う。

「俺は音楽しかできないからさ。人間生きているうちに、自分はこれをやった、っていう仕事をしたいだろ。俺にはそれが音楽しかあり得ないんだよ。そりゃモテたいとは思うよ。でもそれは副産物として付いてくれば良いだけの話で、目的じゃない」

「ふーん、俺はモテりゃ何でも良いけどな」

「正直な奴だな」

和哉は雄一の軽率さを笑った。

二人は夕食を終えて店を出た。繁華街。日も暮れた街の明かりの下で、多くの人が賑やかに交差している。仕事上がりのサラリーマン、学生と思しき集団、水商売風の女性。その中に、時々若いカッブルの姿も見受けられる。身を寄せ合い、何やらとても楽しそうに談笑している。世の中にそんなに楽しい話題があるだろうか。和哉はぼんやりとそれを眺めながら思う。

（恋愛など二の次だ）

和哉は薄暮を歩き出した。

（なぜなら、俺はまだやるべき事をやっていない）

第七章

練習の日が来た。和哉は練習開始予定時刻の四時よりも三十分ほど早くスタジオに行った。機材の調整やら、弦の張り替えやらをするためである。スタジオに着くと、既に防音室の扉が開いている。どうやら先に誰か来ているらしい。

（早いな。誰だろう）

和哉は防音室の中に入った。

「お疲れ様です」

「あ、お疲れー」

見ると機材をいじっている二宮がいた。エフェクターやら配線やら、ごちゃごちゃと入り乱れている中に、二宮は座っている。

「何をしてるんですか？」

和哉は聞いた。

「今度の曲の音作りをしてるの。平野君苦手でしょ」

「ははは。それはそうですね。すみませんわざわざ」

「これが私の仕事だから」

そう言うと二宮は自分のギターで音を鳴らした。その後何やら考え込んで、機械のつまみを回して調節している。和哉はその横でギターをケースから取り出し、弦を張り替えるために古い弦を外しだした。古い弦が切られた長髪の様にはらはらと落ちる。その途中、二宮から声をかけられた。

「弦張り替えるの？」

「はい、もう錆びてきちゃってるんで」

「それなら私がやるよ。かして」

「いやいや、これくらいなら自分で出来ますよ」

「いいから」

言うなり二宮は和哉からすっとギターを取り上げた。されるがまま、和哉は二宮にギターを預けた。後は呆然と見ている他なかった。と、

二宮は和哉とは比較にならないほどの手際の良さで古い弦を取り外した。時間という時間もかかっていない。

「新しい弦かして」

「あ、はい」

和哉は慌てて新しい弦を取り出し、二宮に渡した。するとどうだろう。二宮は新しい弦を全てギターの通し穴に差し込み、それらを早送りのようなスピードで全てギターに張り付けた。弦の余った部分をニッパーで切りそろえると、クロスを取り出して、スプレーをそれに吹き付け、弦を磨いている。

（神業だな）

和哉は圧倒されて声も出ない。二宮の白く細い、繊細に動く指先を和哉は見つめていた。蝶の様に儂い美しさ。溜め息が出そうである。「錆び止めを塗っておくと、弦が長持ちするから」

二宮はそう忠告した。が、和哉は生返事をするのみで、頭では別の事を考えていた。目線はギターではなく、二宮の方に向いている。

（ありだな）

男とは卑猥なものである。これほどの神業を見せつけられている時間でさえ、興味の対象はそこから外れ、女の方へと向かっているのである。というより二宮のしなやかな一連の動作が、和哉の興味をよりいっそう惹いたのかもしれない。黒くつややかな髪、はっきりとした目鼻立ちと白い肌、白のブラウスと黒のロングスカートという出で立ちは、清楚という言葉が相応しいだろう。控えめな雰囲気からか、最初は気がつかなかったが、よく見るとものすごく良い女である。和哉の故郷にはいなかったタイプの女性だ。和哉は何か言葉にできない胸の痛みを感じたが、ふと我に返って抵抗を試みた。

（いかん、これから練習だ。気持ちを入れ替えないと）

「はい、チューニングも出来たし、これでは अच्छ だよ」

二宮からギターを手渡されて、和哉は受け取った。その時、ふと微かな女の香りが和哉を誘った。

「ありがとうございます。何から何までやってもらって」

手渡されたギターを抱えると、ギターを通して下腹に二宮の体温が伝わってくる。あろう事か、和哉は勃起した。

(まずい)

ふくれあがる煩惱をかき消すように、和哉はがむしゃらにギターを弾いた。

「すぐく弾きやすいです。ありがとうございます」

苦しい笑顔を作って、和哉は言った。

「練習して、上手くなってちょうだいね。私も頑張るから」

こうした二宮の一言一言が、和哉の胸に突き刺さるようであった。

第八章

バンドのメンバーが全員揃った。栗田は集合時間の五分後に現れた。時間にルーズな人なのだろうか。

課題曲の音源は事前にネット上にアップロードされている。それを各自でダウンロードして聴き、練習し、バンドで集まった時に音を合わせるというスタイルを取っている。和哉もきちんと練習はしてきている。音合わせでもきつとそれなりに弾く事が出来るであろう。和哉の心配はそこにはない。しかし何故だろう。スタジオに来るまでとは打って変わって、練習に対するモチベーションが低下しているのである。練習が楽しみで仕方ない、そんな想いが今はどこにもなく、やる気がないとまでは言わないにしても、それほどやりたいとは思わない。スタジオに来てから今までの間に起こった出来事と言えば、二宮との一件しかない。それが心境の変化に何か関係しているのだろうか。確かにあの一件で和哉はかなり動揺した。しかし音楽には何ら関係がなさそうである。仮に和哉が二宮に惹かれたのだとしても、それがモチベーションになって、逆にやる気になりぎってもよさそうなものだ。練習へのモチベーションだけではない。バンドのメンバーが何かを話しているが、あまり頭に入っていない。立つ事すらも億劫な状態である。和哉は普段から無口な方だが、この時は一言もメンバーとの会話がなかった。

「平野、どうした。具合でも悪いのか？」

雄一が声をかけてくるが、和哉は我に返るでもなく、うつろな目で答えた。

「ああ、ちょっと体調崩したみたいだ」

事実、和哉は自分が体調を崩したのだろうと思っている。

「夏だからな。夏バテしないように、ちゃんと飯食えよ」

「ああ、大丈夫だ」

最初に音合わせをする曲は、アップテンポなロックナンバーだった。

た。曲全体としてギターの音が印象的な曲であり、ギターソロも入っている。つまり和哉の腕が試される曲である。

「じゃ、いつてみようか」

北川が場を仕切っている。

「いきまーす。1、2、3、4」

栗田のカウントはいつもながら軽快だ。というより軽率、という表現が近いかもしれない。無理にテンションを上げている印象である。曲が始まれば、和哉には手慣れたものである。指板を見ずとも全く間違え事なく弾く事が出来る。だが当の和哉は上の空である。

先日 of 宴会の時の会話を思い出す。北川、栗田、二宮の三人は、和哉や雄一とは別の大学に通う学生であり、皆和哉より一つ年上である。北川、栗田の二人は殆ど大学にも行かず、このバンドの活動以外では、他のバンドのヘルプをやって、後は殆ど飲み歩いているらしい。和哉同様、不真面目な学生である。一方、二宮は真面目に大学に通っており、成績も優秀だそう。文学部に所属しており、日本文学と海外文学の比較論を研究しているらしい。和哉にはその詳しい内容は理解できないが、二宮が相当な文学通である事はよくわかった。とにかく読書が好きで、一週間に十冊ほどの本を読むという事だった。和哉など本は全く読まず、読むものと言えば週刊誌のゴシップ記事くらいのものである。話が分かるはずもない。二宮の音楽好きは父からの影響で、父親が以前はプロで活躍していた事もあるギタリストなのだそう。それでギターの周辺機材には幼い頃から触れていたそうである。文学とロックという一見妙な取り合わせは、このようにして形成されたものだという。もっとも、二宮が技術者としてバンドに付いて回るようになったのは大学に入学してからで、高校生までの二宮は専ら、大人しい文学少女だったそう。性格は今も変わらず大人しい方で、人見知りが激しく、一度もステージには立った事がないという。そんな二宮が大学に入学した後、どのようにして北川、栗田という性格的に対極にある二人と出会ったのか、和哉には分からなかった。

ただ、無類の酒好きという点では三人とも一致しているから、何らかの拍子に出会ってから、酒を酌み交わしつつ親睦を深めた事だろう。

そんな事を和哉が考えているうちに、曲が終わった。和哉は回想から醒めた。

「まあ、初めて合わせたにしては良く出来てる方じゃないか」
北川がマイク越しに話し始めた。

「平野、お前はやっぱり音作りが良くなればなかないけるじゃないか」

和哉は自分がどんなプレイをしたか、殆ど覚えていない。が、少なくとも音が良くなったのは二宮の功績である。

「ありがとうございます」

和哉は素直に言ったが、自分がほめられているのかどうかはよくわからなかった。

「河野、お前も結構上手かったと思うんだけど、ちょっと音量がかすぎるな。ベースがそこまで目立つ曲じゃないはずだ」

「あ、すみません」

雄一が照れ笑いをして、アンプの音量を下げる。

そのような形で、練習は進み、あつという間に二時間が経過した。和哉は練習の間中、機械的に手だけは動いているものの、気の抜けた演奏を繰り返していた。最初のオーディションの時の感動と比べれば、全くの無味乾燥と言っている。もつとも、それでも和哉のプレイに関して誰も文句を言わなかった。そればかりか、

「平野、お前は真面目に練習してきているな。何も問題はない」と、北川に太鼓判を押される始末であった。

（練習とはこのようなものか）

和哉は落胆した。といっても表情は全く変わっていない。練習の最初から和哉は無表情だったからである。周りもそんな和哉の表情を体調不良のためだと察して、一向に気にしない。

「今日の練習はここまで。次からは今日やっていない曲も含めて、

課題曲の全てを合わせる予定だから、各自練習しておくように」

和哉は既に課題曲を全曲練習してある。次の練習でも問題はないだろう。しかし何だろう。この倦怠感。本当に体調を崩したのだろうか。

「おい、帰りに飯を食っていないか」

雄一が声をかけてくるが、和哉は気乗りしない。

「悪い、今日は体調が悪いから、家に帰るわ」

「そうか、じゃあお大事にな」

和哉はメンバーに挨拶をして、そそくさとスタジオを後にした。外はうだるような暑さである。和哉は得体の知れぬ煩悶を抱き、蜃気楼に歪む往来をとぼとぼと歩き出した。

第九章

猛暑である。午後六時過ぎとは言え、まだ外は明るく、額に汗をして歩く人々が行き交う。喫茶店やファーストフード店は涼をとる人で賑わっている。これから宴会でも始めるのだろうか。居酒屋の前に人だかりができ、騒がしく歩道をふさいでいる。

和哉はそうした町の夏らしさには目もくれず、ただひたすら歩く。途中で飯も食わず、買い物もしない。家に着いた頃には滝のように汗が流れ落ち、背負ったギターケースまで汗で湿っていた。荷物を下ろし、部屋のクーラーをつけて、和哉はベッドに横になった。

（憂鬱だ…）

このような気持ちに、和哉は今まで取り憑かれた事がなかった。遠くで犬の吠える声がする。それを聞きながらぼんやりと、和哉はベッドの上で仰向けになり、天井を見つめていた。

どれくらいそうしていたか。明かりのついていない部屋が薄暗くなってきた頃、和哉は起き上がって、テレビをつけた。一人暮らしの寂しさはテレビの騒音である程度紛れる。チャンネルを次々と変えていく。見たい番組はない。馬鹿馬鹿しくなってしまうとテレビを消した。次に和哉はパソコンを起動させた。

（ネットサーフィンでもするか）

ポータルサイトのニュース記事を、和哉は眺めた。が、特段目新しいニュースもなかった。音楽の話題にしても、大して興味を惹く事は書いていない。と言うより、目に入ってくる文字が情報ではなく、単なる記号にしか見えない。ただ文字面を撫でているだけで、意味が頭に入っていないのである。

そうしているうち、ついに和哉にはすべきことを失った。他に誰もいない部屋で一人、何をすれば良いのだろう。音楽を聴くか。いや、あまり気乗りはしない。ギターを弾くか。さっき弾いてきたばかりだ。食欲もない。寝るにはまだ早すぎる。どうしたら良いのだ

ろう。と、和哉は部屋の隅っこにうずくまった。部屋の窓から差し込む夕日が、和哉の足下を照らしている。柔らかく形を変える一点の薄明を見つめるうち、和哉はうとうとと眠りに落ちてしまった。

和哉が目を覚ました時には、部屋は既に真っ暗であった。外から差し込む街灯の光が、青白く壁を這っている。朦朧とした意識の中、和哉はゆっくりと立ち上がり、部屋の明かりをつけた。眩しい。立ちくらみがする。何か夢を見ていたような気がする。何の夢だったかは覚えていない。何か優しく、それでいて胸を締め付けられるような感触だけが残っている。和哉は不意にこんな一言を思い出した。

「練習して、上手くなってちょうだいね。私も頑張るから」

（二宮さん…）

和哉はゆっくりとギターに歩み寄り、ケースからそれを取り出すと、それを抱えて座り込んだ。和哉はギターをかき鳴らした。一人の部屋にマイナーコードが響き渡る。うつろな目で天井を見上げ、和哉は初めて思った。

（これが恋というものか）

バンドの練習の時から憂鬱だった原因がやっと分かった。和哉は初めて感じた恋の衝撃に、精神的に疲弊していたのだ。恋煩い、という言葉がどうやら当てはまりそうである。和哉はようやく、その気持ちを理解できたのである。

第十章

馬鹿な話だ。巷に溢れるチープなラブソングも、何だか本物に聞こえてくる。今まで小馬鹿にしていたつけが回ってきたのだ。恐ろしく人口密度の高い新宿駅南口。隙間なく空間を埋め尽くす人、人。この人の数だけ出会いがある。つまりとてつもなくありふれている。ありふれた、誰が驚くでもない、日常の一コマ。それがこんなにも苦しいなんて。喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら、和哉は一人考えていた。今の自分に何が出来るだろうか。ギターを練習する事。それはそうだ。他には？スポーツジムに行って体を鍛えて、ファッションにも気を使って、小説なんかも少しずつ読んで。考えれば考えるほど、今までそういったものに無頓着であった自分が恥ずかしく思えてくる。雄一に相談するか？いや、雄一には偉そうな事を言った手前、言い出せそうにない。どうやら一人で悩むしかなさそうだ。そういえば、和哉はさっきからずっと一人でいるが、一人でいることがこんなにも寂しいとは、思いもしなかった。元々一人でいることが何よりも好きな和哉には、この得体のしれない孤独感をどうしたらよいのか、おおよそ見当がつかなかった。雄一と飯を食うこともある。しかしそういうときですら、この孤独感は拭い切れない。孤独とは、誰かと一緒にいることだけで癒せるものではないらしい。むしろ問題の本質から目をそらす自分にどうしようもなく不安が募る。とにかく何をしても、誰と過ごしても、心ここにあらずの状態である。

（これは困ったな…）

和哉は心中、こんな弱音ばかり漏らすようになった。しかし弱気になっただけでもない。むしろ問題の本質から目をそらす自分にどうしようもない。とにかくやるだけのことをやってみよう）

和哉は今の自分には自信がない。絶えず音楽のことばかり考えてきた人間である。どうしたら女性に好かれるかなど考えたこともない。

そんな自分がいきなり勝負に出ても、傷つくだけであることは火を見るより明らかである。自分磨き、という言葉は軽率すぎて好きではないが、そういうものをしばらくはやってみるしかなさそうだ。主体的に何か行動を起こすことがあまりない和哉だが、動機さえあれば人間はいかようにも動くようになるものである。ここから和哉の多忙なキャンパスライフが始まる。

第十一章

（二宮さんは今どこで何をしているのだろうか）

それを考えると、和哉はいてもたってもいられなくなる。自分の知らない二宮が、今もどこかで暮らしている。その事実がたまらなく悔しいことのように思えた。独占欲というのはこういうことを指すのだろうか。自分は毎週金曜の、それもたった二時間の二宮しか知らない。その他の時間は空白である。自分の知らない世界はこの世に存在しないものか。そんな映画が昔あったような気がする。自分一人が世界の主人公なのである。しかしまさか、そんなに自己中心的な考えは持たない。一人一人が今日を生きている。平行線が絶えず延びて、どこかで交わったり、消えたりしながら、時を紡いでいるのだ。

（それならもっと交わりたいものだな）

和哉は考えた。交わる時間は金曜の二時間なら、せめてその時間を有効に使えるよう、他の時間をその準備に充てればいい。そのうちにきっかけさえ掴めれば、きっと交わる時間も増えていくに違いない。それが和哉のひねり出した大まかな戦略であった。

和哉はコツコツと努力して何かを積み上げるのが得意な人種である。そういう自分の真面目な性格を活かした方法が望ましいと、和哉は考えた。ギターは今まで通り練習するとして、他はどうするか。ファッション雑誌でも見てファッションを研究して、服でも買っていくか。常に冷静な和哉は恋愛に関してすら打算的であった。

こうと思ったら和哉は行動が早い。和哉はコンビニに立ち寄ってファッション雑誌を開いてみた。何やらたくさん読者のモデルがそれぞれのお気に入りであろう服装で並んでいるが、和哉には何がどう良いのかさっぱり分からない。「カワイイ」とか「オシャレ」とか、そんなものは作り出した者の権威にすがっているだけではないのか。しかしそれを言えば音楽も同じようなものか。

（まあ見ているうちにセンスも磨かれてくるさ）

和哉は雑誌を選んで、一冊購入した。

その後和哉は原宿に行った。服を見に行っただのである。原宿でなくともよさそうなものだが、原宿なら何か洒落たものが売っているのだ、という田舎者の感覚である。

原宿に着くと、猛暑の中、大勢の人でごった返していた。和哉が想像していたより若者が多いわけではなかったが、その活況から十分に最先端の街なのだと感じられた。和哉には特にあてもなかったもので、しばらく街を歩いた。見るからに高級なブランドのショップが軒を連ねているが、あまり高すぎるものは買えないだろう。というより敷居が高くて店に入ることすらできなさそうである。程よい価格帯と思われる店を見つけて、和哉は入って行った。ここなら手も足も出ないことはあるまい。和哉は店内に陳列されている服を眺めた。どれが自分に似合うのかは分からないが、大体どれも無難で、和哉にも着られないことはなさそうであった。和哉はその中の一着を手に取り、軽く羽織ってみた。鏡に映る自分の姿を見る。

（似合わないな）

似合わないというより、着ている人間が良くない。痩せていてひ弱な感じがして、服に着られているような印象がある。これでは何を着ても似合わないだろう。店員が和哉のほうへすり寄ってくる。

「ちょうどそのアイテムが人気で品薄でしてね、ええ。お客様、よくお似合いですよ」

和哉は口車に乗ることはせず、店を後にした。

やはり上辺だけ着飾っても駄目なようだ。どうすればいいか。まず体作りをすることが先決か。和哉は中学生の頃、運動部にいたが、その頃ですらまともに体作りなどしたことはなかった。和哉は興味の無いことはとことん何もしない主義である。だが今は違う。それが自分にとって必要と思われる。そうになると和哉は強い。どこまでも努力を惜しまないだろう。

（確か大学の施設にスポーツジムがあったな）

和哉はそう考えるが早いのか、大学に足を向けた。

第十二章

大学にはほとんど来ない和哉だが、大学の構内を歩くことが、和哉は好きだった。大学の構内は緑豊かで、風通しがいい。散歩にはもってこいである。和哉は歩きながら、スポーツジムのある場所を探した。それは校舎の地下にあった。割と新しい、洗練された感じのジムである。受付に聞くと、この施設は学生証を提示するだけで自由に使うことができるらしい。

（ここに通うことにしよう）

それ以来、和哉は週に二、三回、ジムに通うことになる。それが始めてみるとだんだんと楽しくなっていく、和哉はトレーニングの方法や栄養学なども研究するようになった。どうすれば健康で、かつ良いプロポーションを維持できるのか調べ、それを実践したのである。ついにながら、和哉は大学の図書館にも足繁く通うことになる。文学のことなど和哉には全く分からなかったが、とりあえず読みやすそうなものから手にとって読むようになった。こちらでも、和哉はどんどんその深みにはまっていき、時間のある時はいつも本を読むようになった。

和哉は大学で勉強こそしなかったものの、様々な施設をフル活用して、確実に人間の幅を広げていった。目的の分からない学科の勉強などよりも、自分の「学問」のほうがよくほど実用的なことのようには思えた。お陰で和哉は充実した日々を送った。午前中はスポーツジムで汗を流し、午後はギターの練習か読書の時間というスケジュールで毎日を過ごした。アルバイトで稼いだ給料は殆ど服に使った。ファッションの研究にも余念がない。自分の立てた目標のために、自分の意思で行動するのは気持ちがいいものである。

夏の暑さが和らぎ、涼しい日々が続くようになった頃、雄一と飯を食いに行った時のことである。

「そういえばお前、最近垢ぬけたな」

雄一が思い出したように言う。

「そうか？俺はそんなことないと思うけど」

和哉は恋をしていることなど、誰にも悟られたくない。

「よく言う大学デビューってやつか？」

なんていやらしい言い方だ。しかしその通りかもしれない、と和哉は思う。

「デビューなんて大げさなもんじゃない。俺はたいして変わってないよ」

「またまた、素直になんなよ」

雄一は下品な笑いを浮かべる。

「人をからかうもんじゃない」

和哉はこうは言ったが、努力の成果を他人に気づいてもらえるのは、決して悪い気分ではない。おそらく和哉はこんなほめられ方をしたのは初めてだ。何だかくすぐったいような気分である。だが一方で、おだてられて舞い上がっている場合ではない。自分の目標はあくまで二宮に認めてもらうことだ。そして自分の気持ちをいつかは伝えなければならぬ。どのタイミングでどのように伝えればいいのか分からないが、とにかく伝えなければならない。それは誰にでも訪れる瞬間かも知れないし、誰にでもできることかもしれない。しかし自分にとってその瞬間は乾坤一擲の大勝負になるだろうと、和哉は予感していた。

第十三章

とあるバンドの練習の日のことである。北川がバンド全員の前でこう切り出した。

「今度このバンドで、ライブに出ようと思う」

栗田が一人でテンションを上げている。

「よっしゃー！」

意味もなくドラムのフィルが入る。その後、北川が続ける。

「今度知り合いのバンドがライブやるんで、その対バンで出演させてもらう形だ」

対バンとは、複数のバンドが一つのライブにおいて共演することである。

「対バンでやるからには、他のバンドと比べられても恥をかかないライブにすることが大前提だ。あわよくば他バンドのファンもこちらに引き込むぐらいの気持ちが必要だよ。まあ演奏はいつもの練習通りやってくれれば問題ないだろうが、一層気合を入れてやってくれ。それともう一つ、ステージに上がるにはそれ相応のカッコをしなきゃならない。本番だけ気をつけようとしてもなかなかうまくはいかんから、普段から見てくださいに気をつけてくれよ」

「なんだそりゃ、まるで俺らが見てくださいに気を使ってないみたいじゃないか」

と、スヌーピーのTシャツを着た栗田が返す。

「栗田、お前はいつもジーパンにTシャツじゃないか。少しは平野を見習え」

名指しされて和哉は戸惑った。

「平野、お前はほんとに成長したよ。ギターももちろんだが、見た目も最初に会った時より気を遣うようになったみたいだし、人間にも奥行きが出てきたような気がするな」

こうもいきなり褒められると、和哉は言葉が出ない。

「ありがとうございます」

お決まりの言葉しか出なかったが、和哉は自分の努力を見てくれる人がいることをありがたく思った。雄一が茶化すように言った。「こいつは単なる大学デビューですよ」

その場にどっと笑いがおこった。

「大学デビューでも何でも結構だ。河野、そういやお前最近ちょっと太ったんじゃないのか？ ロックをやるやつは太っちゃだめだぞ」北川がたしなめると、雄一は悪びれずに照れ笑いをした。

和哉の努力を、周りが少しずつ認め始めている。その実感はある。しかし肝心の二宮は特に態度に違いを見せない。そればかりか、妙にそっけない態度である。和哉が何を話しかけても「あっそう」とか「本当に？」で終わってしまう。元々自己主張の少ない人なのだろうが、会話が殆ど単発で終わってしまうため、全く歩み寄ることができない。ある練習の前の会話である。

「二宮さんは普段どんな本を読まれているんですか？」

「いろいろかな」

「例えばどんな本ですか？」

「んゝ多分言ってもわかんないと思うよ」

「外国の作家の小説とかですか？」

「うん、まあそんな感じ」

何とも抑揚のない、無機質な会話である。とにかく自分のことに関しては全く情報を公開しない人なのである。あまりにも関係性に進展がないため、和哉はさすがに焦りが出てくる。また、こんなやり取りもある。

「二宮さん、僕、二宮さんの知識を少しでも吸収したいんです。もしよければ、エフェクターの使い方なんかを教えてもらえませんか？」

「教えたら私の仕事無くなっちゃうでしょ？細かいことは私が全部やるからいいの。平野君はギターの練習してて」

取り付く島もない。他人行儀な言い方である。一体どうしたら二人

の間にある壁を破ることができるだろうか。和哉は悩んだが、すぐに妙案を思い付く。

（物理的に一緒にいる時間を増やせばいいのだ。そうすれば嫌でも会話をせざるを得ないだろう）

思い立ったら即行動の和哉である。少し勇気が必要だったが、和哉は二宮にこう切り出した。

「二宮さん、実は僕、新しいギターを買おうかと思ってるんです。

二宮さんの技術との相性もあるかもしれないので、一緒に楽器屋に付いてきてもらえませんか？」

和哉がギターを買う予定であるのは、本当である。それをうまく二宮が付いてくる必要性に繋げた。これはさすがに二宮も断り切れなかったのだろう。面倒くさそうではあったものの、ついに二宮は了解の返事をした。

約束の日、新宿駅で二宮と待ち合わせた。渋々付き合わされた二宮は明らかに乗り気でない顔つきだったが、和哉は気づかぬふりをして笑顔を作る。

（ちょっと強引すぎたかな）

和哉は少し反省したが、それにしても今日は二人きりでいられる数少ない機会なのだ。喜ばしいことではないか。

だが二人が歩き出してから暫くしても、一向に二人の間には会話がなない。二宮は浮かない顔をしているばかりで、口を開こうとはしないし、和哉も焦れば焦るほど、話題が出てこない。楽器屋を訪れたときには二、三言必要最低限の話をしたものの、それから二人は別れ際までついに一言も話をする事がなかった。別れ際に和哉は言った。

「今日はありがとうございました。お礼に何か御馳走しますから、お茶でも飲みませんか？」

「いいよいいよ。じゃあね」

二宮はこう返すと、くるりと踵を返し、足早に人混みの向こうに消えていってしまった。黒くしなやかに揺れる後ろ髪を見つめながら、

和哉は立ちつくした。和哉はこの時ほど寂しい思いをしたことはない。まさかこのような展開になってしまうとは、思ってもいなかった。和哉は家に帰る道すがら、二宮を少しだけ憎んだ。

（なんて冷たい人なんだろう）

しかし、すぐに思い直した。

（付いてきてくれたことに、まず感謝をしなきゃいけない。恨むなんてお門違いだ）

こんなことを考えながらも、和哉には焦りや不安が募るようになっていた。

季節は秋、冷たい風が落ち葉をさらって吹くようになると、和哉にも一つの決心が生まれていた。

第十四章

和哉には眠れない夜が続いた。和哉は長い夜を煩悶と共に過ごした。
（いつその想いを伝えてしまおう。例え振られたって、その方が
気分がいいさ）

そう決心したものの、和哉は恐怖で押しつぶされそうであった。殆ど振られる事が前提である。その事は和哉もよくわかっている。だがそれだけに、恋を失った自分がどうなるのか、バンドの活動に支障が出ないか、気が気でなかった。それに和哉は口下手で、自分の気持ちを上手く伝える自信もない。気持ちを伝えた後の相手の反応も読めない。

（どうなることやら）

不安ではある。だからといってこの想いを胸にしまって、なかったことにするなどという選択肢はありえない。それも想いを伝える時期は今しかない。これ以上この気持ちを抱えて生きる事には耐えられない。気持ちは不安定だが、決心は固い。恋を失うかも知れない。それどころかバンド活動に支障が出れば、音楽まで失うかも知れない。今の自分からその二つを取り除いたら、一体何が残るだろうか。全てを失った自分を、和哉は想像すら出来ない。しかし、それも運命だと、割り切る事も潔くていい。そうなったらまたゼロからやり直せばいい。ピンチはチャンスでもある。躊躇している場合ではない。踏み出す事でしか人生は切り拓けない。と、ベッドの上で悶々としながら和哉は少しでも前向きになるよう努めた。夜空には満月、雲がかかって朧月夜である。ベッドから立ち上がって、月明かりをたよりに冷蔵庫から水を取り出し、一口飲んだ。

（なんて事はないさ）

和哉は自分に言い聞かせると、ベッドに横になった。希望とは何だろう。それはこんなにも恐ろしいものか。

第十五章

結局、和哉は一睡もできずに朝を迎えた。美しい朝日である。橙色の光が、どんよりと疲れた目に沁みる。部屋に差し込む朝日を浴びると、溜め息が出た。が、もう今更眠る気も起きない。

（とりあえず外に出よう）

部屋の空気が、何だかとても淀んでいる気がしたのである。人気のない静かな街を、和哉は歩いた。朝はもう大分冷え込んできている。肌寒い。そういう寒さも手伝ってか、和哉は何か急に人恋しいような気がした。

（大学にでも行ってみるか）

和哉は大学へと足を向けた。

大学の構内はまだ殆ど誰も来ておらず、グラウンドで運動部の学生が朝練をしているくらいである。もうすぐ学園祭の季節らしい。催し物のビラがあちこちに貼られている。

（学園祭の日は大学には来られないな）

どの団体にも所属していない和哉には、何の催し物も関係のない事であった。それに和哉は怖かった。大勢の人で賑わう喧噪の中で一人感じる孤独。それが和哉にはとてつもなく恐ろしいものを感じられたのである。

（久しぶりに講義にでも出てみるか）

といっても一限目の講義が始まるまで、まだ時間がある。和哉はベンチに座り、持ってきた本を読んでいた。

しばらくすると、ちらほらと学生が歩くようになる。知った顔は一人もない。この大学に知人は雄一くらいしかないのだから、当然である。和哉は見知らぬ学生達の顔を、一人一人観察していた。そして改めて、自分が二宮にしか興味がない事に気づかされた。どの顔も皆同じに見えて、興味が湧くどころか、案山子の顔を見るように表情すら認識できないのである。彼らは和哉にとって形以上の

存在ではあり得なかった。どこかでカラスの鳴く声が聞こえる。

（気味が悪い）

和哉は立ち上がって、缶コーヒーを買いに自販機に向かった。ホットを選んだつもりだったが、出てきたのは冷たい缶コーヒーだった。
（なんだこりゃ）

和哉は仕方なくそれを飲んだが、体が冷える上にちっとも旨くない。
（ずっと講義をさぼってたから、大学に拒絶されてるのかもな）

そんな仕様のないことを考えながら、和哉は寒くなって校舎に入った。あまりにも久しぶりの講義だったため、和哉は講義の行われる教室を忘れていた。しばらく迷いながらも、微かな記憶をたよりに何とか教室にたどり着いた。

しばらく待っていると、学生がぞろぞろと集まってきた。和哉が思っていたより出席人数は多い。が、それでも教室の席には点々と真面目そうな学生が座っているくらいのものであった。ちなみに雄一の姿は見当たらない。どうせ奴も講義には出ていないクチだろう。
（どうやら俺達は揃って落ちこぼらしいな）

講義が始まった。案の定、教授が何を話しているのかさっぱり分からない。他の学生達はみんな理解できているのだろうか。意味の分からない話を黙って聞いているのは、苦痛以外の何物でもない。和哉は眠気と格闘していたが、ついに耐えきれなくなって、命からがら教室から退出してきた。しかし退出してきたはいいものの、和哉にはどこへ行く当てもない。

知人は一人も存在しない。存在するのはのっぺらぼうの集団。そして彼らが催す騒音のような学園祭のビラ。意味の分からない事を延々と話し続ける教授。和哉は悟った。

（ここに俺の居場所はない）

居場所はバンドだけだった。バンドとそれにまつわる恋。この二つを失う事を、和哉は再び恐れた。吹き荒ぶ風を受けて、落ち葉が舞い上がる。講義を終えた学生がぞろぞろと校舎から出てきた時、和哉の姿はもうそこにはなかった。家に帰って、和哉は深く眠りに落

ち
た。

第十六章

和哉には、お守りがある。それをいつも肌身離さず持ち歩いている。それは最初のバンド練習の時、二宮が張り替えた古い弦である。六本の弦が、錆び付いてはいるものの、恐ろしいほどの器用さで纏められ、小さな紙の袋に入っている。これを和哉は鞆のサイドポケットに入れて持ち歩いている。するとそれが時折何かの拍子に鞆の奥から姿を見せる。それが和哉の原動力となり、今日まで和哉はギターの練習やら、見てくれを良くする事やら、その他様々な努力を続けてくる事が出来た。他の人間が見たら、気味が悪いと感じるかも知れない。しかし、気味が悪いほどに二宮を想う自分を、和哉は誇りに思っていた。自分に酔っていたと言っているだろうか。そういうナルシズムとは他人の目を気にする事なく行動を起こす際に、絶大な原動力となる。他人の目など気にしていたら、一つの恋にここまで懸命になる事は出来なかったに違いない。ギターだの見てくれだのと、他人が見ればおおよそ遊びのような事に打ち込めたのは、正にそのお守りとそれが醸し出すナルシズムの成果であろう。そのナルシズム、独り善がりの象徴である和哉のお守り。それを和哉は捨てた。真夜中、橋の欄干から、川に放り投げた。

「もう独り善がりには終わりだ」

和哉はそう呟くと、今まで自分が積み重ねてきた努力を思い返した。（やれるだけの事はやった。後は結果を待つのみだ）

オリンピックの選手が競技を終えて判定を待つ時のような台詞である。もっとも、和哉はまだ競技を終えていない。が、この場合競技そのものが重要なのではなく、それ以前の過ごし方が問題であるから、もう結果を待つのみなのである。

冷えきった空気の中、和哉は風を切って歩き出す。

（後に何も残らないにしても、死ぬ訳じゃない。生きてさえいれば十分だ）

和哉はそう覚悟を決めていた。

第十七章

バンド練習の日、メンバー全員がスタジオに集まった。皆それぞれ秋のファッションに身を包んでいる。夏よりも着るものが多いせいか、それともこの間の北川の説教が効いたのか、みんなそれなりに洒落た格好をしているように見える。

北川が威勢良く、練習の始まりを告げた。

「よし、それじゃあライブで演奏する曲順で、全部通しでやってみよう。二宮、時間を計るの頼む」

「了解」

二宮は椅子に座って足を組み、膝に頬杖を付く体勢で頷いた。

「行きます！ 1、2、3、4」

栗田が例の軽率なカウントを出す。

演奏はメンバー自身が酔いしれるほどに精巧なものに仕上がっていた。北川の歌やフロントマンシップ、和哉の時に呻くような、時に泣くようなギター、雄一の動脈を打つようなベース、栗田の雷のようなドラム。これらが合わさって、過激に、そして繊細に演奏は完成していた。

全ての演奏が終わった時、二宮が言った。

「三十八分二十秒」

「よし！ 持ち時間の四十分にはほぼぴったりだな」

北川がガッツポーズで楽器隊を振り返り、視線を送る。視線の先には、楽器隊それぞれの満足げな表情があった。

「アンコールが来た時の為に、もう一曲練習しようよ」

栗田が調子に乗って提案した。

「僕、レッチリがやりたいです」

雄一がその提案に乗った。この二人は共に軽率な性格なので、相性がいよいよだ。鉄壁のリズム隊である。

「おいおい、今は余計な事を考えるな。メインのステージに集中す

るんだ。万が一アンコールが来たら、同じ曲を二度やったっていいんだから」

北川が持ち上がった提案を一蹴した。

「平野、お前ずっと黙ってるけど、どう思った？」

北川が和哉に声をかけた。

「はあ、良かったと思います」

「なんだ、気のない返事だな。まあお前は本当によくやってるよ。普段大人しいお前のギターが、ここまで表現力豊かだとは驚きだ」

「はあ、ありがとうございます」

和哉は相変わらず気持ちのこもらない返事をしている。それもそのはずである。和哉はこの練習が終わった後、二宮に気持ちを伝える決心をしているからである。刻一刻と迫ってくる「その時」に、和哉は内心、胃が千切れるような思いであった。あれほどの決心をしたにもかかわらず、和哉は土壇場を前にして怯えていた。

（この練習がずっと続けばいいのに）

しかしそうはいかない。どんな濃度があるにせよ、時間は平等に流れる。そしてついに最後の演奏を終えたとき、北川が告げた。

「よし、今日の練習はこのくらいにしよう。本番は近いから、腕が落ちないように練習だけはしておくように」

その瞬間、和哉の鼓動が一層高鳴った。足がすくんでいる。歯を食いしばるも、汗が止まらない。拳を握るも、力が入らない。腹の底が痛んで、声が出なさそうである。それでも、機材を一つずつ片付けている二宮に、和哉は声を振り絞るようにして話しかけた。

「あの、すいません」

「ん？」

二宮は振り返った。

「ちょっとお話ししたい事があるので、この後ちょっとお時間を頂いてもいいですか」

「うん、分かった」

二宮は意外にもあっさりと和哉の誘いを受け入れた。他のメンバー

もこのやり取りを見て何かを察したのか、誰も触れてこようとはしない。和哉は自分の機材を片付けた。背中に気まずい空気を感じながらも、それを気にしているような余裕は、和哉にはなかった。

スタジオを出るとき、まるで地雷をよけて歩くような緊張感の中で、北川が言った。

「じゃあ、俺らはそこら辺で飲んでるから。お前らも話が終わったら来いよ」

「はい。すみません。遅れて行きますんで」

和哉は自分でも驚くような冷静さで返事をした。何事もない様な表情を作る事で、この期に及んでまだメンバーには自分の恋を悟られなくなかったのである。一体どんな精神状態で居酒屋に行く事になるのか、和哉には想像もできなかったが、後の事などどうでもよい。「じゃあ、行きますか」

和哉は近くにある公園の方向に歩き出した。後から二宮が後から付いてくる。双方とも一言も発しない。気まずい空気ではある。だが、ここまで来てしまえばもう流れに任せるだけだと、和哉は先ほどよりも安定した気持ちでいた。

「じゃあ、この辺で」

和哉は公園の明かりの下にあるベンチを選んで腰掛けた。二宮も無言で隣に座る。

「ライブ、うまくいくと良いですね」

和哉は唐突にこんな事を話しだした。

「そうね、バンドの初ライブだもんね」

二宮は落ち着いた様子である。何のためにここに連れてこられたか、大方予想がついているのだろう。和哉は覚悟を決め、まずは単刀直入に気持ちを伝える事にした。

「二宮さん、実はですね…、僕、前から、その…二宮さんが好きだったんです」

ついにこの時が来た。和哉はこの瞬間を夢にまで見た。この時の事を思っ、何度眠れぬ夜を過ごした事か。だが、肝心の後の言葉が

続かない。自分は彼女に何をしてほしいのか。付き合っしてほしい？いや、この間のようなお互い口もきかないようなデートはまっぴらだ。セックスをしてほしい？いや、断じてそういう事ではない。そもそも自分は彼女のどこが好きなのか？それもはっきりしない。第一、自分は彼女の事を殆ど知らない。好きになった理由だって、全くと言っていいほど分からない。人を好きになる事に理由はなさそうである。つまり、自分は彼女のどこが好きで、その彼女に何をしたいのか、さっぱり分からない。分からないけれども、強烈に好きである事だけは確かなのである。この気持ちをどう表現したら良いのか、和哉にはいくら夜を費やして考えても答えが出なかった。だから和哉は正直に、率直に想いを伝える事しか出来なかった。

「どうやって伝えたらいいのか分からないんですけど…。とにかく好きなんです。その気持ちを、ただ伝えたくて…。すみません、突然こんな事言われても、困ると思うんですけど…」

言ってしまった。拙い言葉だったが、とにかく自分は想いを伝えたのだ。もう結果などどうでも良い。これで自分の想いが、彼女の脳裏に刻まれる事だろう。それで十分だった。

「ありがとう」

二宮は口を開いた。

「気持ちはずごく嬉しい。でもね、私は平野君を恋愛の対象としては見られないなあ」

やはり駄目だった。だが案外、和哉の心は落ち着いていた。

「そうですか」

「うん、それにね、私、前から平野君の気持ちには気付いてたんだ。これは和哉にとって予想外だった。

「そうなんですか？どうして？」

「それは分かるよ。日頃の平野君の態度を見てればね」

そうなのか、自分はそんなに分かりやすい態度を取っていたのか。和哉には特に思い当たる節がなかったが、今更思い出して恥ずかしいが必要もない。

「そうなんですか」

「うん、でもその気持ちに伝えられないって分かってたから…」
だから和哉にはわざと冷たく接していたのだろう。

「それにね、皆には言っていないんだけど、私、来年の春からドイツに留学するの」

「えっ」

和哉には、振られた事よりもこちらの方がショックだった。

「ごめんね。こんな時に言う事ではないかも知れないけど、前に海外の文学を研究してるって言ってたでしょ。その関係でね。一年くらいだとは思うんだけど、とりあえずその期間はバンドの活動にも参加できないと思うし、平野君とも、バンドの皆とも会えないのよね」

「でも、僕は二宮さんの技術がなきゃ、ギターとしてやっていけませんよ」

「そこは心配しないで。これから残された時間で、私が平野君に必要な事を全部教えるから。平野君は大変かも知れないけど、マスターしたらどこへ行っても通用するギタリストになれるよ」

「はあ、そんなに簡単にマスターできるものでしょうか…」

「そこは頑張り所よ、平野君。やってみましょ。私も頑張るからね」

そう言うと二宮は微笑を浮かべた涼やかな表情になった。和哉は二宮に初めて心惹かれた時の事を思い出した。

（これだ。この表情だ。これに触れたかったんだ）

和哉の心に明かりが灯った。この光を、誰も消す事は出来ないだろう。どんな事があっても、この人を好きになってよかったと胸を張ろう。その気持ちを信じて努力した自分に誇りを持とう。そんな気持ちで和哉の心を一杯にした。

（ありがとう、二宮さん…）

「じゃあ、そろそろ行こうか。皆が待ってるし」

「はい」

二人は並んで歩き出した。冷たい風が、時折二人の間を通り抜けたが、二人の表情は今や穏やかで、一つの恋が終わった後だというのに、何か一つの幸せを共有しているような、そんな表情にも見えた。

第十八章

その夜、和哉は飲み過ぎた。メンバー達は二宮との出来事に付いて何も触れてこなかった。彼らは遅れてきた和哉と二宮を暖かく迎えて、笑顔で酒を勧めてくれた。メンバー達の優しさが、和哉の心に沁みた。傷ついている証拠だろう。その傷を潤すように、和哉は飲み慣れない酒を飲んだ。和哉の顔はたちまち真っ赤になり、鬼のような形相になったが、誰も止める者はいなかった。和哉にはその日どのようにして自宅に帰ったか殆ど記憶がないが、心臓の鼓動が激しく脈打つ音を聞きながら、俯せで眠りに落ちたことははっきりと覚えている。

目を覚ますと、和哉はベッドからゆっくりと這い出た。頭が重い。少し気分も悪い。和哉は溜め息をついてから立ち上がると、ふらつく足元で洗面所へ向かった。鏡の中、ひどく疲れきった表情の自分が見える。和哉は鏡の中の自分に言いつけるように言った。

「まだまだ、これからだ」

これから自分をもっと努力しよう。これから自分は一流のギタリストになって、もっと魅力的な人間になって、もっと……。二宮が留学先から帰ってきた時には、自信を持って再会できるようにしたい。和哉はそう思っていた。

その後、バンドのライブが開催された。バンドの演奏は好評を博し、大成功を収めた。特に和哉のギターは多数のバンドマン達の目に留まり、和哉はその日、何人もの人から名前を聞かれたりした。こんな経験は和哉には初めてであり、他人から興味の対象として視線を受けることに、大いに戸惑った。戸惑ったのには、不慣れであるという事の他にも理由がある。自分の演奏が、完全に自分だけの作品ではないこと。すなわち、二宮の後ろ盾があったからこそ成し得たものだという後ろめたさがあったからである。

（これをあと何ヶ月かの間に自分のものにしなければ）

和哉にはその自負心が強く、ライブが成功したとは言え、勝って兜の緒を締める状態であった。

ライブの後は、お決まりの打ち上げである。この時ばかりは和哉もメンバーと共に羽目を外した。といっても和哉という人間は、どれだけ酔っていても、仲間と騒いでいるように見えても、どこかに冷静な自分を残していて、完全に我を忘れるという事がない。ひとしきりメンバーとライブの成功を祝った後、和哉は一人静かに飲んでいる二宮のそばに行った。振られた後だというのに、不思議と気まずさはない。

「今日は、ありがとうございました。皆僕の演奏を誉めてくれましたけど、二宮さんのお陰です」

「そんなことないよ。平野君が良い演奏をしたからじゃない。もっと自信持ちなさいよ」

「実を言うと僕、あまり自信がないんです。僕一人の実力じゃないのに、皆それを勘違いして僕の事を買い被って。皆が思ってるような実力に早く追いつかなきゃって考えたら、何だか焦ってきてしまっ

とて」

和哉はそう言いながら思った。

（俺は二宮さんに慰めてほしいのか？）
弱いところをさらけ出して、慰めてもらえるのを待っている子犬のような存在。恋は終わったのに、未練たらたらである。女はこんな情けない男を見てどう思うのだろう。そんな葛藤をよそに、二宮は和哉がおおよそ期待した通りの返答をした。

「なーに、そんな大した事してないから、大丈夫だよ。心配なんかするより、楽しんでやりなよ」

そう言うと、二宮は手元のグラスを傾けて一気に飲み干した。見た目は清楚な雰囲気であるのに、心身ともに強い人であるらしい。そういう強さに和哉は憧れ、溺れた。現に今、母親の腕の中で眠る赤子のように、和哉は安らかな心地がしている。この腕から、もう逃れる事は出来ないのか。和哉は自分の溺れて行く姿を想像しながら、

どうする事も出来ずに、ただ幸福と憂鬱に浸っている。

突然、北川が話に割り込んでくる。

「二宮、今日はお疲れさんだったな。お前がいてこそこのこのバンドだよ」

北川はいつになく真剣な眼差しで言った。

「ふふ。それはどうもね」

二宮は髪をかきあげながら、笑顔で言った。これが彼女の照れ笑いなのだろうか。

「冗談で言ってるんじゃないぞ。お前がいなけりゃ、今のサウンドは出来てないんだからな。サウンドだけじゃない。俺はお前がいなくなったら、正直寂しい。音楽的にも人間的にも、お前はバンドにいなきゃならない存在なんだ」

どうやら二宮の留学の件は、既に和哉以外のメンバーにも伝わっているらしい。それにしても、北川は何と自分の気持ちを素直に伝えられる男だろう。酒に酔っているせいもあるだろうが、自分もこれほどに気軽に自分の好意を人に伝えられたら、と和哉は思う。

「なによ、まるでもう一生会えないみたいじゃない。たった一年だよ」

二宮はそう言うものの、少し伏し目がちである。

「一年のブランクは大きいさ。ましてやっとバンドが軌道に乗ってきたところだからな。でもお前が自分のやりたい事をやりに行くなら、俺たちに止める権利はない。せめてお前が戻ってきたら、また一緒にバンドをやっていききたい。勝手な願望だけだな」

北川はそう言うのと、ぐいっとビールをあおり、口を拭いながらこういった。

「まあ、異国の地で色々大変だろうけど、頑張れ。たまには連絡よこせよな」

「うん、ありがとう」

そう言った二宮の目には、微かにではあったが、光るものが見えた。美しい涙。和哉は心打たれたが、一方でたまらなく悔しかった。自

分が渾身の力で語っても引き出せなかった涙。それを北川はいとも簡単に誘い出した。いや、北川は何も泣かせるつもりで言ったのではないだろう。あくまで自然に、思うところを述べたにすぎない。それでも心に響くような背景が、この二人にはあるのだろう。和哉はそれを羨ましく思った。だからという訳ではないが、和哉は次第に黙っていられなくなった。

「二宮さん、必ず戻ってきてください。僕らがそれまで何とか繋ぎますから」

言い終わった途端、ぷつと二人が吹き出した。和哉は真面目に言ったつもりだったが、どうやら雰囲気をぶち壊したらしい。どうせ自分分は北川のようにはいかないのだ。笑いが取れただけ幸運だっただろう。苦笑いをしている和哉に、泣き笑いの二宮は言った。

「じゃあ、約束だよ」

約束。約束は守らなければならない。二宮が戻るまで、自分は何とか二宮の分も補ってバンドを存続させていかなければならない。それが重荷である事に変わりはないが、とは言え「やれるだろうか」から「やらなければならない」に変わったのは大きな違いである。

第十九章

年末、和哉は輪島の実家に帰った。久しぶりに会う家族。電話では連絡を取っていたが、直に会うとより暖かさが身にしみて伝わってきた。代わり映えない街の景観、長年住んだ家に染み付いた匂い、母親の料理の味。和哉の部屋は、和哉が家を出て以来そのままにしてあった。さほど時間が経った訳でもないが、懐かしい気がした。飼い猫は相変わらず和哉に懐かなかったが、和哉を見て逃げる訳でもなく、どうやら和哉の顔を覚えていたらしい。地元に住んでいる友人達とも会った。友人達はひとしきりそれぞれの近況を語り終えると、早速和哉から東京の土産話を聞こうと、和哉を質問攻めにした。和哉は特別目新しい話を持っている訳ではなかったが、友人達の期待に応えようと、つい大げさに話をしてしまい、お陰で和哉はその間中羨望の的になっていた。

（東京にいるからと言って、何か特別な事が出来る訳じゃないんだけどな）

心中、和哉はそう思うのだが、

（バンドを組む事が出来たのは東京に行ったお陰か）
と、思い直した。

（それに恋も出来たし…）

無論その恋は失敗に終わった訳だが、あのような女性と地元ではなかなか巡り会えそうもない。そう思うと、それなりに上京した甲斐はあったのではないかと、和哉には思えてきた。

和哉には、昔から大好きな場所がある。日本海に沈む夕日を見る事が出来る浜辺である。輪島はこの地方にしては珍しく、大して雪が降らない。そのためこの季節でも足場を気にせずに浜辺を歩く事が出来た。潮騒の音を聞きながら夕焼けに染まる空の下を、和哉は歩いた。足元の砂が「キュッキュッ」と鳴く。水平線の上でぼんやりと紅い光を帯びる夕日と、それを受けて波立つたびにきらきらと

輝く海。見慣れた景色とは言え、世の中にこれほどまでに美しいものがあるだろうかという気が、和哉はしてくる。しばらく感傷に浸ってそれを眺めていると、ある想いが脳裏をよぎった。

（二宮さんをここに連れてきたかったな）

東京育ちの二宮がこの景色を見て、どう思うだろうか。もしかすると和哉の思うほど感傷的な想いは得られないかも知れないが、とは言え過去に幾度も自分を励ましたこの景色が、何よりも誠実に自分というものを語ってくれるような気が、和哉はしていた。元々愛郷心の薄い和哉は、珍しくそんな事を考えていた。

年を越してすぐに、和哉は東京へ帰る事にした。東京に帰って、一刻も早く二宮との約束を守るための準備をしなければならないと考えたためである。家族にその旨を伝えたと、その晩はいつになく豪華な食事が食卓を埋め尽くした。最後の日くらい旨いものを食わせようと、家族が用意したのだろう。そんな家族の元を離れるのが、和哉は少し名残惜しくもあったが、こればかりは仕方がない。和哉は家族との団らんの中で、最大限に家族の温もりを感じていた。

次の日、和哉は家族に見送られ、実家を後にした。途中、何度も振り返って家族に手を振ったが、やがて家族が見えなくなると、気持ちは瞬時に東京で自分がなすべき事に向かった。

（二宮さんから一つでも多くのことを学ぼう。そしてそれ以降のバンドの活動に備えよう）

思えば、和哉は実家にいる間中そのことで頭がいっぱいだった。心だけ東京においてきたような気分でここ何日かを過ごしたせいか、気持ちに焦りがあったのかも知れない。

第二十章

和哉は東京に帰り、まだ正月だと言うのに二宮に連絡をして、ギターの機材に関する技術を教えてもらえるように頼んだ。それから自分でスタジオを予約し、場所と時間を二宮に伝えた。そこに二宮を呼び、教えを請おうと考えたのである。

指定した日に、和哉がスタジオで待っていると、二宮が大きな荷物を持って現れた。

「お待たせ、今日は初レッスンね」

初、と言うことは、これから何度となくレッスンが続くのだろう。わかってはいたものの、それを二宮の口から聞くと和哉は心が躍るような感覚であった。

「すみません、正月早々に。早く技術を覚えたかったですから」
「いいのいいの。正月なんてどうせ暇だし。元はと言えば私のせい
でこうなったんだから」

そう言うのと二宮は荷物を下ろし、何やらたくさんの機械や配線、それに色とりどりの書籍を取り出した。

「まずこの本は全部平野君にあげるね。機材の種類、取り扱い方の本から、その仕組みを理解するための本、電子音響工学の本まであるから、参考にしてみて」

電子音響工学、と言われても和哉はそのような学問を聞いたことすらない。そもそもギターなどという一種の娯楽を扱う機材に、そんな偉そうな名前の学問が必要なのか。和哉は戸惑いを隠せなかった。文系の和哉には、そのような学問を一から学ぶ自信など全くない。

「あはは、そんなに構えなくても大丈夫。これを全部覚えろっていうわけじゃないから。実際に必要な事は限られてるし、それはちゃんと口頭で説明するから。」

「よかった。一瞬もう駄目じゃないかと思いましたよ」

和哉は胸を撫で下ろしたが、同時に思う。

（二宮さんはこんなものを読んで音作りをしていたのか）

見るとかなり古めかしい本もある。父親からのお下がりかも知れない。これだけの量の本を読破するとなると、相当の時間がかかるだろう。となると、二宮は幼少、少なくとも十代の前半頃からこういった本に親しんでいたのではないかと、和哉は想像する。そんな二宮の音に近づくために、自分は一体何年かかるのだろうか、和哉は気が遠くなる思いである。それを今自分は三ヶ月で形にしようとしている。

（まあ、やるしかないか）

覚悟は既に出来ている。出来る限りの努力をするしかないのだ。

それから、和哉は二宮から様々な知識を教わった。元々独学でしか音楽的素養を身につけた事のない和哉には、教えてもらう行為そのものが新鮮であった。話を聞いて、ノートを取ったりもした。普段大学の講義に出ていない和哉には、それ自体がかなり久しぶりの行為である。それだけ二宮から学ぶ事は多かったし、また、学ぶ動機がはっきりしているので、熱心に学ぶ事が出来たのである。

しかし、機材を並べながら熱心に説明する二宮の横顔を見ながら、和哉は思う。

（皮肉なものだ）

恋が終わった後にこうして二人でいる時間が増えるというのは、和哉にとってこれ以上ない皮肉である。それも目の前にいる二宮は、和哉が思い焦がれていた時の二宮とは別人のように明るくて、優しかった。よほど和哉が冷たくされていたのか、それとも機材の説明をする時には別人のようになるのか、恐らく両方あるのだろう。

「ちよっと、聞いている？」

「あ、聞いてますよ」

和哉は慌ててノートを取る振りをする。

「うそ、今違う事考えてたでしょ」

そう言うと、二宮はくすくすと上品に笑い、立ち上がって壁にもたれかかった。

「まあ、そんなにいつぺんに言われても頭に入らないか」

防音室の真っ白な壁を背景にすると、黒く長い髪がくっきりと映える。服装もいつものようにモノトーンであったので、全身が芸術作品のように美しかった。白い壁が似合う女性というのも、そうそうお目にかかれるものではない。

「いや…」

和哉は口ごもった。

（これは先が思いやられるな）

それから三ヶ月、和哉は二宮の猛特訓を受けた。それは和哉にとつて至福の時間であった。レッスンは終わり、二宮との別れ際になると、和哉はいつも言葉にならない寂寥感に襲われた。

（後何日こうしてられるだろう）

二宮は、四月の初旬には日本を発つらしい。その時が近づくに連れて、和哉は時間の流れを恨めしく思った。こんな気持ちになったのは、子供の頃夏休みの終わりが間近に迫った時以来だ。

バンドの全体練習も平行して行われたが、この期間は和哉の勉強期間という事で、ライブ等への出演はなかった。メンバー達はライブに出たくてうずうずしている。今後すぐにライブに出演できるかどうかは和哉の成長次第であるため、メンバーの和哉に掛ける期待は大きかった。

「平野、音作りの方、ちゃんと勉強してるか？」

雄一が説教がましく聞いてくる。

「そりゃしてるさ。皆の足を引っ張りたくないからな」

「そうか。あんな立派な先生もいるしな。いいな。俺も誰かにベースを教わってみたい」

そう言うと、雄一は溜め息をついて壁にもたれかかった。奇しくも以前、二宮が垣間見せたシチュエーションと同じであったが、雄一がやっても何の感動もない。北川が横から口を挟んだ。

「ベースなら俺が教えてやるぜ」

北川は元々ベースボーカルである。ベースにもよほど自信があるの

だろう。が、雄一はぬけぬけと答えた。

「いや、女の人がいいです」

一瞬、この言葉に本心を見透かされたような気がして、和哉はぎくりとした。

「馬鹿。お前にはもう教えてやらん」

北川が言うと、その場にどっと笑いが起こり、和哉はつられて苦笑いをした。

和哉は事実、必死で二宮から教わった知識を頭に詰め込んでいた。覚えた知識を活用し、実際に自分で音を作ってみたりもした。その努力の甲斐あってか、和哉の作る音も大分様になってきたようであった。和哉の音が、少しずつ二宮のものに近づき始めた頃、東京には再び桜の花がほころび、和哉は大学二年生になっていた。

そして最も和哉が恐れていたその日も、この穏やかな季節とともに訪れる。

第二十一章

その日、和哉は二宮を見送るため、空港に足を運んだ。和哉は空港に着くと、辺りを見回した。二宮はまだ来ていない。和哉は空港のロビーで一人、二宮を待つ。空港の館内は、色とりどりのキャリーケースを引いて颯爽と歩く人々が行き交い、家族連れが賑やかに旅行の計画などを話し合っている。活況を帯びた館内で、和哉はベンチに腰掛け、うなだれていた。船出の日としてはこれ以上ないほどに、今日は快晴である。窓の外には滑走路に滑り込んでくる真っ白なジャンボ機が見え、その向こうに青く東京湾が広がっている。

（良い眺めだな）

それでも和哉の心は晴れない。見送る立場というのは、何と寂しいものだろう。見送る相手と別れの直前まで一緒にいたいという気持ちだが、もうすぐ別れなければならないという事実を一層リアルにする。笑顔で見送りたいと思っではいてもどこか表情が曇ってしまうのは、そういう事実に向き合っていれば仕方のない事かも知れない。和哉がぼんやりと外を眺めていると、二宮が急に隣に座った。

「お疲れ」

和哉ははっとして振り向く。見ると二宮は眩しいほどの笑顔である。こんなときでさえ、二宮は美しい。

「わざわざ来てくれてありがとう。でも他のメンバーはいないのね」
「ははは、まあ僕が一番お世話になった訳ですからね。メンバー代表という事で」

無理に笑顔を作って、和哉は言った。和哉が見送りにきたのは、和哉が自分から見送りたいと二宮に申し出た経緯があった。そのために場所と時間を二宮から聞いたが、それを他のメンバーに伝える事はしなかった。一人で見送れたかったから、というのもあるが、それ以上にその気持ちを看透かされて、

「いいから、お前一人で行ってこいよ」

とメンバーから言われるのが怖かったのである。

「しかし、今日はいい天気ね」

「そうですね。きっと二宮さんの前途も洋々ですよ」

和哉は気の利いた事を言ったつもりだったが、会話がそこで途切れてしまった。そう言った和哉の表情が心持ち暗いことに、二宮は気が付いたのかも知れない。そのせいか、それまで表情の明るかった二宮も、少し表情を曇らせた。

「あの」

和哉は思い切ったように言った。

「今まで、本当にありがとうございました」

和哉は音楽を、青春を、努力の意味を、自分の持ち得る全てを、二宮から教わった。今の自分は、二宮の存在なくしてあり得ないと、和哉は考えていた。和哉の「ありがとうございました」には、そういう意味が込められていた。

「ううん、私は何もしてないよ。平野君こそ、よく頑張ったよ」

「僕は」

「寂しいです」

とは、和哉は言わない。その気持ちは胸にしまって、和哉はこう言った。

「きっと約束を守りますから」

二宮が戻るまでバンドを存続させる約束である。それを守る事が、二宮への恩返しとして唯一自分に出来る事だと思ったのだ。

「そうね。私もきつと、帰国したらバンドに戻る。私だってバンドの事は忘れられないもの」

音楽が好きな二宮。彼女は演奏こそしないけれども、バンドは自分が音楽を作り出す事に参加できる唯一の場所だった。そのバンドを一時的にせよ抜ける事は、彼女にとって苦渋の選択だったに違いない。

「さてと、そろそろ行かなくちゃ」

二宮は立ち上がると、大きく伸びをした。

「じゃあ、元気でね」

「ええ、お気を付けて」

二宮はキャリーケースを引っ張り、搭乗口の方へ歩いていった。手荷物検査を終えると、二宮は和哉の方を見て手を振り、搭乗口に入って見えなくなった。和哉はすぐさま展望デッキへ上り、二宮が乗ったであろうジャンボ機を見つけた。柔らかな日差しを浴びて、和哉はフェンスの網目越しにそれを見守った。そしてついに、ジャンボ機が動き出した。ゆっくりと旋回したジャンボ機は、滑走路で助走を付け、その勢いでふわりと浮き上がった。ジャンボ機の姿が段々と小さくなるのを、和哉は見つめていた。

（二宮さん…）

エンジンの轟音が聞こえなくなる頃には、二宮の乗ったジャンボ機は海と空の彼方に消えていた。

（行ってしまった…）

和哉は館内に戻り、エスカレーターを下りていった。どうしようもない寂しさが喉元にこみ上げてくる。和哉はふと館内のレストランに目をやった。

（ビールでも飲んで気を紛らわすか）

和哉は最近、二十歳になっていた。今は堂々と酒を飲む事が出来る。酒の味も大分覚えた。

（いや、辞めておこう）

昼間から赤い顔をして歩くのはみっともない。それ以前に、そのような気分ではない。

外に出ると、相変わらず空は目眩がするほどの青さであった。和哉の喪失感を表現したかのようなのである。二宮との思い出を一つずつ思い出しながら、和哉は帰宅した。しかし、和哉が二宮と会ったのは、これが最後であった。

第二十二章

和哉にとって、二宮がいなくなった生活は空虚そのものであった。心にぽっかりと穴が空いたようで、その穴を埋めてくれるものは何一つとしてなかった。勿論予想していたことではあったが、実際に身に起こってみると、自分を抜け殻としか形容できないほどにその打撃は強力であった。特にバンド練習の時などは、今までいた二宮がいなくなったことが目に見えて、その気持ちが増幅した。二宮が物理的にいなくなったこと以外にも、喪失感を催す要因があった。それはギターの音である。和哉が懸命に音作りを学んだにもかかわらず、どこことなく二宮の音とは違うのである。バンド全体で音を合わせると、それが更に顕著になる。迫力がなく、存在感に欠ける様な音なのである。といって音量を闇雲に上げると、他の楽器とのバランスが悪く、一人だけ浮き立ってしまう。

（やはり二宮さんがいなければ駄目なのではないか）

それを否定しようと必死に工夫を凝らしてみるが、二宮の音に近づけようとすればするほど、かえって遠ざかっていくような気がするのである。次第に良くなっている、とメンバーは励ましてくれるが、和哉には全くそんな気がしない。むしろ次第に頼りない、弱気な音になっていき、和哉自身の気持ちまでもが萎えてくるのである。またそういう心理を反映してか、今まで問題のなかったギターを弾くことですら、段々と覚束なくなっていく。さすがに見るに見かねたのであろう。北川が重大発表をする。

「来月、また例のバンドと対バンでライブに出ようと思う」

北川にしてみれば、和哉のモチベーションを少しでも上げようとしたのに違いない。しかし、和哉にとってこれほどの重荷はなかった。今の自分に、果たして他人に聞かせられるような演奏が出来るだろうか。と思わずにはいられなかった。もっとも、このまま何の手段も講じずにいれば、ますます弱気になっていくだけであることは目

に見えているし、それ以前に、ライブに出たくない、などと言うことは和哉の自尊心が許さなかった。

（やってみるしかない）

と思いながらも、和哉のギターを持つ手は小刻みに震えていた。

ライブまでの一ヶ月間、和哉は恐らく気持ちだけは以前のライブよりも切迫感を持って練習に励んだ事には相違ない。しかし、その気持ちとは裏腹に、和哉の手はギターから遠のいた。練習するほどに納得のいかないプレイになっていくのと、反対にプレッシャーだけが日に日に増幅していくのである。和哉は、ついにギターに触る事すら出来なくなった。勿論和哉も逃げてばかりいた訳ではない。二宮との約束を思い出し、時折がむしゃらにギターを練習してみる。しかしそれと同時に二宮の作った音も思い出し、それを自分の出す音と比べてみると、嫌気がさすほどに雲泥の差があることに気が付いてしまうのである。二宮に音作りを教わった日々を、和哉は思い出した。懸命に自分の知識を伝授する二宮。その熱意に、自分は応える事が出来ないのか。と、和哉は自分を情けなく思った。しかし人間とは実に狡猾に出来ているものである。必ず自分が傷つかないような逃げ道を考えつくのである。

（そもそも、俺の音作りが完璧に出来てしまったら、帰ってきた二宮さんはもう必要ない事になりはしないか）

勿論、その前にバンドが存続できなければ元も子もないことは、和哉もよく理解している。しかし、何も完璧な演奏をしなくても、バンドは存続するだろう。完璧を求める必要などないのだ。そういう考え方が、幾分か和哉の気持ちを楽にした。そして気持ちが楽になった分、和哉は練習を怠るようになった。

（練習をしたところで、深みにはまって腕が落ちていくだけだ。こういう時は休息も必要に違いない）

和哉は自分の腕が落ちていくのは、あくまで精神的な問題であり、少し間を置けば気分も落ち着き、また元のプレイが出来るようになる考えたのである。そうして和哉は自分に言い訳をしつつ、徐々

にギターから離れていった。

そして一ヶ月後、ライブ本番を迎えた。二度目のライブという事もあり、和哉は前回ほど緊張をしていなかった。それどころか、気分はいつになくリラックスしていた。

（前回もあれだけ演奏出来たんだから、今回だって大丈夫さ）

和哉は心中、そう何度もつぶやく事で自分を励ました。もっとも、そう励ます必要があったという事は、やはり一抹の自信のなさがあったのだろう。それをかき消すようにして、和哉は大丈夫だ、と何度も気持ちを立て直した。

リハーサルも問題なく終わった。後は本番を待つのみである。そして和哉のバンドの出番が目の前に迫った時、和哉が舞台裏の控え室から観客席を覗くと、ある事に気が付いた。観客席の最前列には、前回のライブ終了後に、和哉の名前を聞いてきたり、ヘルプを頼んできた人たちが顔を揃えていたのである。和哉の演奏を心待ちにしているのだろう。自分にもファンがいたのか、という嬉しさと、彼らの期待を裏切ってはいけないという重圧が、同時に和哉の心を揺さぶった。ギターを持つ手が震えてきた。

（落ち着け。前と同じようにやれば良いのだ）

そう自分に言い聞かせるごとに、和哉の表情は固くなっていった。そうしてついに本番が始まった。演奏は滞りなく進んだ。和哉も出せる力を出し切った。つもりだった。が、観客席を見ると、最前列に座っていた人たちは、殆どが既に席を立っていた。残っている観客はまばらで、それも退屈そうに携帯電話をいじっていたりする。和哉がその事に気付いたのは、バンドの演奏も終盤に差し掛かった時の事である。それまでは、自分の演奏に必死になっていて、全く気が付かなかった。つまりそれだけ余裕がなかったということだろう。演奏が悪かったのか、あるいは和哉の必死で演奏をしている「守りに入った姿勢」が、おおよそロックのイメージとかけ離れていたのか、とにかく観客が和哉に失望して去っていったのは確かであった。

ライブ終了後、和哉は誰からも声をかけられなかった。唯一北川が和哉の肩をぽんと叩き、

「お疲れ」

とだけ言い残して、控え室に消えていった。北川の背中とは、いつになく寂しげであった。その時、和哉は確信した。

（やはり俺は駄目なのだ）

この日以降、和哉は自分の才能を疑う事になる。それは和哉が長年培ってきた価値観が、音もたてずに崩壊していく瞬間だった。

第二十三章

和哉は考えた。

（俺には音楽の才能が、どうやらないみたいだ。今まで、音楽が俺の全てだった。今まで何をやってもうまくいかなかった。勉強もそこそこだったし、運動も苦手、人間関係はもっと苦手で、友達は少なかったし、恋愛などもってのほかだった。でも俺はそんな事はちっとも気にしなかった。音楽だけは人よりも出来たからだ。合唱コンクールでピアノの伴奏をすれば伴奏者賞を取ったし、ギターは誰よりも上手く弾ける自信があった。俺は音楽をやるために生まれてきたのだ。そう考えるだけで、他の何事も気にはならなかった。だが東京に出てみたら、いかに自分が井の中の蛙だったか思い知らされたって訳だ。確かに、二宮さんがいれば、俺はそれなりにやっていけるかも知れない。だがいなくなってみたらこのざまだ。それでは決して一人前とは言えない。遅かれ早かれ実力のなさが露呈する事だろう。先が知れている。かといって、音楽を捨てたらどうなる？俺には他にやる事もない。今から大学の授業を真面目に受けるか？既に手遅れだろう。第一真面目に受けてどうなる？何の役にも立ちしなさそうだ。じゃあ役に立ちそうな資格の勉強でもするか？何の興味もないような勉強が続けられるのか？とてもじゃないが無理だ。就職はできるだろう。このまま単位さえ取っていれば、大学を卒業できない事はない。だが何の仕事に就くんだ？俺には何も出ない。無理して興味も能力もない人間が仕事をしたって、自分のためにも社会のためにもならないだろう。やはり俺には音楽しかないのだ。しかし待てよ。そもそも何故音楽じゃなきゃならなかったんだ？小さい頃からピアノを習ってたから？それじゃあ俺は自分に才能があるのかどうかよく確かめもせずに、たまたまそれが与えられたから、自分には音楽しかないなんて思い込んでたって事か？そもそも俺は本当に音楽が好きなのか？ただ他がうまく行かないから、

音楽に逃げ込んでいただけじゃないのか？人生大逆転なんて言う恥ずかしい発想で、脚光を浴びる事を夢見ていただけじゃないのか？要するに、現実から逃げ込む口実が出来て、その上夢なんて言う美名の下に自己顕示欲を満たす事の出来るもの。それがたまたま音楽だったというだけかも知れない。音楽じゃなくても良かったのだ。音楽そのものが好きだった訳じゃないのだ。大体、音楽の非力さを、俺は良く知っている。音楽に何が出来る？ジョン・レノンが『イマジン』を歌っても戦争はなくなる。音楽界随一の勝者が争う事を否定するなんて、滑稽な話だ。「ナンバーワンにならなくても良い」と歌っている歌がチャートでナンバーワンになった時には、音楽の発するメッセージなど全て嘘っぱちだと知るべきなのだ。ロックンローラーの破天荒なイメージも同じだ。彼らがステージ上で飲むウイスキーの瓶には、紅茶が入っているのだ。ただのイメージ戦略だ。音楽は何の思想も、力も持たない。あるのはビジネスだけだ。一発当ててやろうと目論む野心家たちが、猿真似のような事をして芸能界でやっていこうとする、その手段でしかない。音楽はなければならぬものなんかじゃない。その事実、大分前から俺は気付いていたはずだ。それなのに、それに気付かぬふりをして、現実から逃げたいがために、音楽は自分の全て、なんて自己暗示をかけていたのだ。なんて馬鹿らしい！)

和哉の信じていたものは、ずっと大切にしてきたものは、全て偽物だった。それを気付いていながら、気付かぬ振りをして自分の都合のいいように解釈し、それがあたかも本物であるかのように振る舞ってきた。その事に、和哉はこのような瀬戸際に立たされるまで、気付いていなかった。言わば自分で自分を騙し続けてきたのである。ようやくその自己欺瞞に気付いた和哉が、この次を取る行動と云えば、それは一つしかない。和哉は北川にメールを打った。今まで意識はしていなかったが、やはりあのバンドのリーダーは北川だろう。「突然ですが、一身上の都合により、バンドを辞めさせていただきます」と思います。誠に勝手ではありますが、どうかご了承ください」

メールを送信する直前、ボタンを押す和哉の指が、一瞬止まった。ほんの一瞬だけ、二宮の事を思い出したのである。

（二宮さん、約束、どうやら守れそうにありません…）

和哉はメールを送信した。

（これで終わったのだ。俺は明日から、新しい何かを探さなきゃいけない）

人生の迷宮に迷い込んだような状態の和哉。しかしその心は、驚くほど爽やかだった。新しい何かがまた始まる、という予感であろう。春は希望の季節。和哉が初めてバンドのメンバーと会った日から、丁度一年が経っていた。

第二十四章

次の日、和哉は北川に呼び出された。場所はいつもバンド練習をしていたスタジオにほど近いカフェである。和哉はそこに行くとき、北川は難しい表情をして下を向き、腕を組んだまま席に座っていた。その表情の意味するところが和哉には分かるため、近づくのに躊躇しているとき、向こうからこちらに気付いた。

「おう、まあ座れや」

「はい」

和哉は席に着くと、店員にアイスコーヒーを注文し、上着を脱いで椅子にかけた。あくまで平静を装う和哉であったが、それでもその膝は震えていた。

「メール見たぞ。あれはどういうつもりなんだ？」

和哉は冷静を装った表情で、手を膝の上に置いた。北川の顔を直視できないまま話した。

「ええ、思うところがありまして、バンドを、というよりも音楽自体を辞めようと思うんです」

「その思うところってのは何なんだ？まさかライブでたった一回失敗したくらいで、そこまで思い詰めるという事もないだろう？」

「そんな事ではありません。確かにライブで失敗したのはそれなりに落ち込みましたけど、それは単なるきっかけに過ぎません。それからずっと考えてたんですけど、僕はどうかやら音楽が好きじゃなかったみたいなんです」

「そんな訳ないだろ。音楽が好きだから、お前は見ず知らずの俺たちのところに来てまでバンドをやりたいって思ったんだろ？今まで努力できたのも音楽が好きだからじゃないのか？」

「音楽が好きなのはなかったんです。好きでもないのに、僕はミュージシャンになって一発当ててやろうなんて甘い事を考えていたんです。音楽よりも、そういう地位や名声の方が好きだったんで

す」

「それの何がいけないんだ？バンドやってる奴なんて皆似たような気持ちでやってるぞ？」

「皆はそれで良いのかも知れませんが、僕は嫌なんです。音楽がそんなものだって考えたら、音楽が急につまらないものに思えてきたんです。第一、僕にそうなるだけの才能があればまだ良いですけど、僕にそこまでの才能はありません」

和哉はいつになく断定的な口調で言った。ここまで切り返してくる和哉を、北川は初めて見ただろう。

「そこまで思い詰めてるのか…。平野、お前ギターを始めたのはいつだ？」

「中学一年生の時です」

「そうか、じゃ中一の頃からずっと音楽が好きだった訳だよな？少なくともそう思ってた訳だよな？それを今になって急に嫌になれるのか？それで後悔しないって言えるか？」

「後悔しないかどうか、はっきりとは分かりません。でもとりあえず今は嫌いです。今嫌いなものをこれから好きになる自信はありません」

「そうか、しかし俺らもこれからって時だからな。これはこっち側の都合だが、お前に辞められるとバンドは非常に困るんだ。俺らの気持ちを、汲んでみてくれたりはしないか？」

和哉は心が痛んだ。北川は、バンドはこんなにも自分が必要としてくれている。その気持ちがどれほど和哉の後ろ髪を引いた事か。しかし、和哉の返答はこうだった。

「すみません、バンドのメンバーには本当に申し訳ない気持ちで一杯です。しかし僕は、他人のために生きている訳ではありませんので…」

この一言は決定的だった。和哉の頑なな気持ちが、もうこれ以上動かない事を、北川は確信したのだろう。

「わかった。そこまで言うなら、もう止めないさ。お前がこれから

何をしようとしているのかわからんが、頑張ってくれよ」

北川は諦めたようにそう言うと、苦みばしった表情でコーヒを一
口飲んだ。

「すみません。本当にすみません」

和哉は必死で頭を下げた。それは本心だった。謝っても謝りきれない
思いでそう言った。

「それと」

北川はバッグの中から何か取り出した。手帳であった。北川はその
ページを開いて、和哉に見せた。何やら住所と電話番号がいくつか
書いてある。

「これは俺と栗田、それに二宮の連絡先だ。バンドを抜けたからつ
て、個人的な付き合いまで終わった訳じゃない。会いたくなったら、
いつでも連絡をくれ」

そう言うと、北川は手帳からそのページを破って、和哉に手渡した。
北川はこうなる事を予想して、予めこれを用意していたのだろう。

「ありがとうございます」

受け取った和哉は、それを眺めながら思った。

（もう会う事もないだろうな）

その後、和哉は北川と別れ、そのまま帰宅した。放心故か、その
道のりは通い慣れた道とは思えぬ程一々和哉の感傷に触れた。家に
着き、和哉が部屋を見回すと、隅っこでギターが寂しそうに横たわ
っていた。

（もう鳴らす事もないだろう）

高校時代、和哉は部屋で一人、無心にこのギターを弾いていた。い
つかバンドでそれを弾く事を夢見て。

（まさかこんな事になるとはな）

二宮から譲り受けた書籍が、本棚に並んでいる。大きな荷物を持っ
た二宮が思い出される。

（これももう必要ない）

和哉はもう、それ以上何も考えないように努めた。目頭に熱いもの

を感じたからである。が、思い出とはアルバムのようなもので、ひとたびそれを開けると、次々とページをめくるように思い出が連鎖するのである。心のアルバムを閉じる事が出来なくなり、ついに和哉の目からは涙がこぼれ落ちた。

（俺はこれからどう生きれば良いんだ？まるで見当がつかない）
思い出に別れを告げることは、どうやらこれ以上なく思い出を呼び起こしてしまうものらしい。

第二十五章

数日後、今度は雄一に呼び出された。和哉は頭を掻きながら、待ち合わせた大学の食堂に向かう。

（もう何も話す事はないんだが）

必要な事は北川に全部話した。これ以上同じ事を説明するのも、たいていそう気疲れのする事だ。と、和哉は内心辟易していた。

食堂に着くと、和哉は雄一を探し当てた。

「よう、待たせたな」

和哉は何事もなかったように挨拶し、席に座った。

「平野、北川さんから聞いたぞ」

「ああ、そうか。まあそういう事だから」

和哉は素っ気なく答えた。

「俺はな、正直よく分からないんだ。お前が何故そんな気持ちになったのか」

「ああ、俺にもよく分からない。北川さんに話した事しか、俺は言えないよ。それが全てだ」

「お前がいなくなったら、バンドはどうなるんだ？分かってるのか？」

と、いつになく真剣な目で、雄一は言った。

「新しいギタリストを見つければ良い。きっとそこら中にいるはずだ」

和哉はあくまで冷静に返す。

「俺はな、お前と音楽がやりたかったんだよ。俺だけじゃない。他のメンバーだってそうだ」

雄一は段々と熱を帯びた口調になってきた。

「悪いが、それだけは諦めてくれ」

和哉がこう返すと、雄一はいきなり立ち上がり、上気した表情で言った。

「お前がいなくなったバンドでやっていく自信なんて、俺にはないんだよ！」

そんな事はないだろう。と、和哉は思ったが、雄一の意外な純情さに少し同情した。その同情を振り払うように、和哉はこう答えた。

「じゃあ、お前も辞めれば良い」

雄一は返す言葉を失い、啞然とした表情になった。

「また飯でも食おう」

和哉はそう言い残すと、その場を去った。その表情に迷いはなかった。ただ、一年前に雄一と初めて会った時の事を思い出して、鼻で溜め息をついていた。

（親友まで失ったか）

和哉はこの大学に雄一しか友人がいなかった。が、雄一と会えなくなった和哉が全くの孤独かと言えば、そうでもない。和哉は二年生になってから、会計学のゼミに入っていた。自分の成績でも入門を許可してくれるゼミがあるとは、和哉には意外だった。まだ日が浅いため、友人と言えるような人間関係は出来ていなかったが、これから作っていけば良い。もっとも、和哉は友人が欲しいなどとは少しも考えていなかった。

（俺は一人が好きなんだ）

音楽がなくなった今、和哉は元の自分に戻りつつあった。一人が好きで、無口で無気力な自分に。一応ゼミに入りはしたが、勉強を真面目にする気もなかった。ゼミに入ったのは、周りに流された、というのと、和哉の根底にほんの少しだけ根付いている帰属意識からくるものだった。つまり何の目的意識もなく、何となくゼミに入っただけなのである。

ゼミの教授は、山本教授と言って、若い、いかにも知的な雰囲気、の漂う教授であった。和哉はその教授の講義に殆ど出席した事はなく、勿論彼の専門分野に興味がある訳でもなかった。しかし成績の芳しくない和哉を拾ってくれたのは、この山本教授のゼミだけだったのである。もっとも、和哉は山本教授の誠実で優しそうな風貌に

好感を持つてはいた。加えて最初の授業で集まった時に分かった事だが、このゼミは全体で十人程度のごく少数のゼミだった。あまり大人数でがやがやと騒ぐような雰囲気でもない。集団行動の苦手な和哉だったが、ここでなら何とかやっていけるかも知れないと思ったのである。ところが、ゼミが始まって一ヶ月も経たないうちに、それが全くの錯覚であったと、和哉は思い知るのである。

第二十六章

まず、話に全く付いていけない。ゼミの活動は、主にグループでの研究、及びそのプレゼンテーションだった。グループ単位での議論に参加する事が出来ないのである。下地となる知識がないので、当然である。常に和哉の周りでは、聞いた事のない専門用語が飛び交っているような状態であった。加えてグループのプレゼンテーションになると、一応準備はしていくものの、和哉の発表はしどろもどろであったし、第一自分でも何を話しているのか殆ど分からないという有様だった。ましてや発表の途中で質問でも飛んでこようものなら、他のゼミ生に目配せをして、助けを求めるしかなかった。それでも最初は騙し騙しやっていた。何とか他のゼミ生に知識面で追いつこうと、勉強もした。しかしゼミが始まって半年と経たないうち、和哉の知識が全くゼミ活動に貢献できないものである事を知った他のゼミ生達は、露骨に和哉を馬鹿にし始めた。プレゼンテーションの最中、話し手のゼミ生が聞き手である和哉に、

「平野君、ここ分かりますか？」

などとわざわざ名指しで聞いてくるのである。

「ええ、分かりますよ」

と、分かりもしないのに和哉が答えると、

「じゃあ説明してもらっても良いですか？」

などと、なおも食い下がる。もっとも、和哉もそのような嫌がらせに慣れてくると、

「説明するのはそちらの役目でしょ？」

といった様に、涼しい顔をして切り返す事が出来るようになっていたのだが、内心ではやはり不愉快であった。とはいえ、自分がこのような扱いを受ける事を、仕方のない事だと和哉は思っていた。ゼミの活動に貢献できないばかりか、その質を下げているのであるから、自分がここに在籍していることを申し訳ないとすら思っていた。

そういう申し訳なさが故か、和哉は柄にもなく、人一倍明るいキャラクターで通した。勉強はできないけれども、誰に嘲笑されようとも決して笑顔を絶やさない、言わば道化のようなキャラクターである。そうまでしないと、自分の存在価値がなくなりそうだったからである。和哉は内心、道化を演じてまでゼミに居続ける理由が分からなかったが、とにかく必死で自分の居場所を守ろうとしたのである。しかし、そのことが、思わぬ副産物をもたらした。そういう明るさが幸いしてか、和哉は女子学生から絶大な支持を受けたのである。ゼミが終わると、必ず誰かしらの女子学生が和哉の周りに寄り付き、話しかけてきたし、中には必要もないのに毎日のようにメールをよこし、デートの約束を取り付けようとしてくる者までいた。これは和哉にとって予想外の事であったが、その心境は複雑であった。和哉に寄り付く女子学生の中で、誰一人として和哉が本気で好きになれそうな人はいなかったし、それどころか、この期に及んでまだ二宮の事を時々思い出してしまうのである。そう言った未練が心の奥に根付いている事を和哉は自覚していたため、いくら誘われたところで特定の誰かと懇意になる事はなかった。

ともかく、勉強は出来なくても、女子学生からは人気者という今までの和哉らしからぬキャラクターで、しばらくはゼミを続けていく事になった。しかし、そのような事をいつまでも続けていくわけにはいかない事を和哉は知悉していた。あくまでもゼミの活動目的は勉強であり、勉強のできない和哉は、相変わらず肩身の狭い思いをしていたからである。和哉は必死で勉強を続けたが、一年間のブランクは大きい。なかなか求められているレベルに追いつく事が出来ない。ブランクは何も一年間だけではない。和哉の所属するゼミには、付属の中学、高校から内部進学で大学に進学してきた学生が多かった。彼らは進学のための受験勉強が不要であるため、大学に来る前から会計学を勉強している学生が多い。つまり、和哉が中学、高校時代に必死で受験勉強をしている時期に、他のゼミ生は既に会計学を勉強していたのである。そうした長年のブランクを埋める事

は、容易な事ではなかった。そのため和哉はゼミの時間、冗談を飛ばしながら、自分の弱みを敢えてさらす事で、予防線を張り続けた。例えばこうである。

「平野君、今君が説明してくれた持分プーリング法とパーチェス法の部分なんだけど、そもそもその違いって何だい？」

と、山本教授に聞かれたとき、和哉は

「ええ、私も常々そこが気になっていたところがあります」

と答えた。そういう日頃の態度が祟って、ついに和哉は山本教授の研究室に呼び出された。

「平野君、君はゼミをこれからも続けていく気はあるのかい？」

と、和哉は山本教授に詰め寄られた。

「はい、できれば続けさせて頂きたいと考えております」

と、さすがに和哉は弱気になって答えた。すると山本教授は、丁寧だが語気を強めた口調でこう言った。

「ならば今の態度は改めた方がよい。学問を志す人間として、君は考え方を誤っている。少なくとも、さらし者になっている君の姿は見るに耐えない」

普段穏やかな山本教授がここまで言うのだから、よほど日頃の和哉の態度に閉口していたに違いない。しかし和哉は思うのである。

（さらし者とは何だ）

確かに自分はゼミの質を下げてきたかも知れない。だが「さらし者」と言われるほど恥ずべき事をしただろうか。いや、山本教授にしてみれば、したに違いない。しかし自分は求められるレベルに追いつこうと努力をしている。「態度を改めろ」と言われたところで、他に何が出来るわけでもない。と、和哉は思うのである。

「どうも済みませんでした」

と言って研究室を出た後、和哉は

（それじゃあこっちから辞めてやるさ）

と、踏ん切りをつけた。

翌日、和哉は山本教授にメールを打った。

「昨日のお話について、色々と考えてみましたが、やはりこれ以上ゼミの皆様にご迷惑をおかけし続けることはあつてはならないと思いますので、ゼミを辞めさせて頂きたいと思います。大変申し訳ありませんが、そのようお願いいたします」

山本教授からは即座に次のようなメールが返ってきた。

「了解いたしました。今後の益々のご活躍をお祈りしています」

何とも厭味な文章である。前日にあのような話をしておきながら、「益々のご活躍」とは慇懃無礼も甚だしい。再び居場所を失った和哉は、やりきれぬ怒りと共に、決心を固めた。

（少し勉強が出来るくらいの話で人を見下しやがって。こうなったら独学で勉強して、すぐに追いついてやるさ）

ちなみに、その後和哉にはたくさん女子学生から、

「どうして辞めたの？」

「今度会って話そうよ」

等のメールが届いたが、いい加減な返事をして全てかわした。これが、和哉が大学三年生に上がる直前の事である。

第二十七章

元来、和哉は努力家である。ゼミを追い出された悔しさも手伝って、すぐに独学で日商簿記二級を取得する事が出来た。これで勢いづいた和哉は、この調子で公認会計士か税理士の資格も取得してやろうかと思案していた。

（俺にできる仕事は何もない。せめて専門性を身につけないとな）
もっとも、これは両親に反対されてすぐに頓挫した。大学三年生ともなれば、もうじき就職活動が控えており、それに差し支える事があってはならない、というのが両親が反対した理由だった。和哉にしてみれば、働き口を見つけるために勉強をするのではないのか、と反論したくなる理由であったが、とはいえ両親の気持ちも分からないでもない。新卒至上主義の日本の労働市場において、大学生のうちに企業から内定を貰っておかないと後々大変に不利な立場に追い込まれる事は、和哉も重々分かっていたからだ。

（今就職活動をしないと、その機会損失は大きいのだろう）
いくら勉強をしたところで、就職という利益を逸しては本末転倒なのである。

（全く、勉強するために大学に来ているのに、勉強すると就職できなくなるとは皮肉な話だ。いよいよ何のための大学か分からなくなってきた）

和哉は大いに違和感を覚えながら、就職活動に励む事になる。和哉はしばらく、大学の催すセミナーやら説明会、その他の就職支援の集まりに参加した。特に役に立つとは思えない内容だったが、何もしないよりは良いだろうと考えての施策であった。ちなみにそういった集まりにおいて、和哉はついぞ雄一の姿を見なかった。

（あいつはどうするつもりなんだ？）

失った親友の事が、和哉には幾分か気がかりであった。が、今は自分の事で精一杯であったため、その懸念はすぐにかき消された。

（しかし…）

和哉は思う。

（企業は個性的な人材を求めていると言いながら、面接対策では判で押したような模範解答ばかり覚えさせられるのはどうした事だろう？）

和哉はまだ知らない。日本型雇用という地獄を。そして和哉の様な精神力の持ち主であっても、死の瀬戸際まで追いつめられる悪夢を。

第二十八章

和哉の就職活動は難航した。勿論、和哉の口下手が災いしたというのも大きな原因の一つである。面接ではいつも説明が上手くまとまらずに支離滅裂になってしまい、上手く話す事が出来ない。が、その原因は口下手というよりも、もっと他のところにある様な気がしていた。それは一言で言えば、話す事がない、という事である。面接とは言うまでもなく自己のアピールの場であるが、和哉にはアピールするほど誇れるものが何もないのである。それを埋めるために、和哉は自分の中から何とか長所と言えそうなものを引っ張り出してアピールを試してみた。しかしそれがどうも自分の事を説明しているとは思えぬ実感のなさで、自分で聞いていて歯が浮く様な台詞ばかりである。ましてや、それを仕事上のメリットに繋げなければならぬとなれば、これは上手く話せるはずもない。加えて、面接官の高圧的な態度も、和哉を萎縮させた。圧迫面接、という言い方をするらしいのだが、どうやらそれはストレス耐性を試す上でポピュラーな手法らしかった。

「君の様な能力の人間など五万といえるんだよ」

「成績が悪すぎる。君は今まで何をして生きてきたんだい？」

等の人格否定ともとれる発言を面接官が嘲笑まじりに繰り返すものだから、和哉もつい言葉を失ってしまうのである。もっとも、和哉はこうした一連の現象について、至極当然の事と考えていた。

（俺には何の専門性もない。会社で役に立つ事などないだろう。役に立たない人間を金を出して買うのだから、必然的に買い手が有利になるという事だろう）

要するに、話す事が何もない事も、面接官が横柄なもの、自分にこれと言って売りが無い事に由来している、と考えたのである。和哉のこの推測は当たっている。恐らく、本来であれば労働市場において売り手と買い手は対等であり、売り手は自分の提供できる価値を、

買い手はそれに対して支払う事の出来る対価を提示すれば情報としては十分であるはずだが、和哉の場合、売り手は価値を提供できず、買い手もそれを前提とした対価など示せるはずもなく、結果として面接では「どれだけ耐え忍ぶ事が出来るか」という、唯一その場で試す事の出来る指標を暴力的な手段を用いて計ることしか出来ないのである。

（やはり専門性を磨いておいた方が良かったのではないか）

と、和哉は事あるごとに思わざるを得なかった。

もつとも、圧迫面接に関して言えば、和哉が考えていた理由以外にも更に重要な理由がある。殊、日本企業においてはこの「どれだけ耐え忍ぶ事が出来るか」という指標が売り手、買い手双方にとって最も重要であるという理由である。それは後に和哉が身を以て体験してくれる事になるのだが。

和哉は次第に、この就職活動という大いなる茶番に疲弊してきた。恐らく他の就職活動をしている学生も同じ思いであった事だろう。着慣れないスーツを着込み、面接会場に行くと、同じように似合わないスーツを着させられた学生が集まっている。この時点で、和哉は社会の小さな歯車になるのだという実感に襲われ、何だか人格を失った様な気持ちになる。そして面接で罵倒され、激しく落ち込む。それで合格していればまだ良いが、落とされている場合が殆どである。加えて、面接官に媚を売る他の学生に妙に腹が立ったし、それと変わらぬ事をしている自分には自己嫌悪すら覚えた。

（何と馬鹿げた話だ）

と思いつつも、自分にはそれしか生きる術がない事に、言いようのない閉塞感を覚えた。

奇しくも、時はITバブルの頃であった。若手のIT長者達がメディアで頻繁に顔を出すようになり、時代の寵児となりつつあった。彼らはいつも一貫してサラリーマンとしての生き方を否定し、そういう生き方がいかに非効率で、報われない生き方であるかを説いていた。彼らの言い分が論理的に正しい事は分かってはいるものの、

和哉は内心、それが不愉快であった。

（俺はこんな苦勞してサラリーマンになろうとしているのに：）
と、日々徒勞感に襲われた。そうした疲勞が蓄積しての事であろう。
和哉はもはや職種など選ばなくなった。和哉には何の専門性もない
ものの、紛いなりにも会計學を勉強してきたという自負があったた
め、就職活動を始めた頃にはそうした分野の知識を多少なりとも活
かせる分野を選んでいたのだが、ここまで来るとそんな贅沢を言っ
ていられなくなってきたのである。職種などどうでも良い。とにかく
内定が欲しい。そしてこの就職活動という不毛な争いから一刻も
早く退きたい。と考えるようになった。しかし、そうまでしても和
哉は内定を得られず、ついにそのまま和哉は大學四年生になった。

第二十九章

よく分らない場所に来てしまったと、和哉は感じ始めていた。

夢を追いかけて、恋をした青春時代、それはあまりに短く、儚い結末であった。それが夢のように過ぎ去ってしまうと、終わりのない砂漠を放浪する様な日々が、和哉には続いた。そうして彷徨っているうちに、和哉はサラリーマンという得体の知れない場所にたどり着いた。ところがこの得体の知れない場所こそ、最も多くの人間が集う場所だと言う。和哉はその場その場を、目標に向かって懸命に生きてきたつもりだった。出会いや別れを繰り返し、様々な場所を歩いてきたつもりだった。ところが最後にはこの場所にたどり着く事が最初から決まっていたのだ。どんな人生を歩もうとも、終着駅は最初から決まっている。それは他でもなく「死」を連想させるものであった。個人の人格、個性など、この終着駅では殺されてしまうのだ。葬り去られた過去は誰にも顧みられる事はなく、ただ無意味に記憶の中を漂っていて、時折悲しげにその断片を浮かび上がらせるのみである。

（一体何のために俺は生まれてきたのだろう）

こういった問いを、和哉はこの時から何度となく繰り返すようになった。その問いは、恐らくどの時代のどの国の人間でも抱いたであろう、人間にとって最も根源的な問いであろうが、それを否定するかのような現実を、恐ろしく非人間的なものと和哉が感じたことは想像に難くない。

和哉がやっとのことで内定を勝ち得たのは、大学四年生の夏であった。あるシステムメーカーの営業の仕事である。営業など和哉の最も苦手とする分野であろう事は、当の和哉自身がよく分かっていた。けれども先に述べたように、和哉はとにかく内定が欲しく、早く就職活動を終わらせたかったのである。そのため自分の向き不向きなど考えずに、そこに就職先を決めた。が、和哉はここで判断を

誤ったと言っている。この選択が後々になって和哉を大いに悩ませる事になるからである。もっとも、ここでもし和哉が就職活動が続けていたとしても、結果がどうなっていたか分からないのであるから、一概に誤りだったとは言いきれないのだが。

その後、和哉は残り少ない大学生活を気ままに過ごした。いつでもその内心はそう穏やかなものではなく、来るべき死刑執行を待つ死刑囚の様な、言わば最後の安息を楽しむ人間の暗さを帯びていた。

第三十章

和哉が大学を無事卒業し、会社の独身寮に移るために引っ越しの準備などをしている頃、たまに足を運ぶ大学内の桜は満開だった。

和哉は初めてこの地を踏んだ時の事を思い出していた。はしゃいだ気持ちで駆け抜けた桜並木の道。夢と希望に満ちあふれたあの若者は、もうどこにもいない。

（夢も希望も、ただの幻想だったのだ）

春は希望の季節。しかしその希望が幻想であると知ると、宙を舞う桜の花びらも、はらはらとこぼれ落ちる涙の様な哀愁を帯びて見える。こうして桜の花が舞い散るたびに、何か大切なものを失っていく様に、和哉には思われるのである。

卒業式の日、和哉は久しぶりに雄一に会った。雄一は留年したらしい。それでも和哉の卒業を祝いに来てくれた。

「バンドはどうだ？」

和哉は雄一にずっと気になっていた事を聞いてみた。

「ああ、やってるよ。あの後松本さん経由で新しいギタリストを見つけてな。まあギターはうまい人だけど、何となく器用なプレイが耳につく様な感じだよ。俺はお前の不器用なプレイの方が好きだったな」

「そうか」

和哉は苦笑いしたが、雄一が自分のプレイをまだ覚えてくれている事、それをまだ必要としてくれている事に幾分かの感傷を覚えた。就職活動で社会から拒絶されてばかりいた和哉の心に沁みただのである。

「二宮さんは帰ってきたか？」

言うまでもなく、和哉の最も聞きたかった事はこれである。もうとっくに二宮は留学先から帰ってきているであろうが、和哉は一度も顔を合わせていない。

「ああ、帰ってきたよ。けどな、新しいギタリストってのが妙に自分の音に拘りを持ってる奴で、二宮さんとあんまりうまくいかなかったんだ。それで二宮さんは自分の技術を必要としているところに行くって言って、バンドを出て行っただよ」

「そうか」

和哉がバンドに残っていれば、そのような事にはならなかっただろう。自分が約束を守らなかったせいで、二宮までバンドを去る事になってしまった。と、和哉は今更ながら自責の念に駆られた。そしてそこまでの犠牲を払ってバンドを辞め、迷ったあげくに掴んだものは、サラリーマンというかつて夢見たものとはほど遠いものであることに、和哉は今更ながら啞然とさせられた。勿論、和哉は音楽に失望してバンドを辞めた訳だから、その選択自体が間違っていたとは思わないが、かといってサラリーマンになりたくてバンドを辞めた訳ではない。それが何か大きな力に押し流される様な形で結局は今の様な状態になった。ここに大きな違和感を和哉は感じているのである。

「そう言えば、他のメンバーはどうしてる？」

和哉は急に自分の身の上を誰かと比較したくなって、そう聞いた。

「ああ、北川さんも栗田さんも、特に就職せずにバンド一本でやってるよ。フリーターってやつだ」

「ふうん」

和哉はあろう事か、ある種の優越感を感じた。社会に守られている者の優越感。こうやって人は望まぬ生き方を選んでいくのだろう。結局、俗にいう「幸福」などと言うものは他人との比較において成り立つものらしい。人が人を差別したがる理由はこれだろう。差別する事で初めて自己の幸福を認識できるのである。和哉は優越感とそれに対する自己嫌悪を同時に感じて、表情を失った。

「平野、たまには俺たちのライブにも顔出してくれよ。みんなお前に会いたがってるよ」

「ああ、誘ってくれれば行くよ」

心にもない事を、和哉は答えた。

「そろそろ行かなきゃ。河野、今日はありがとうな」

「いや、頑張れよ、社会人」

かつての盟友と満開の桜に見送られて、和哉は大学を後にした。

第三十一章

四月に入って早々、和哉の就職した会社では新入社員研修があった。一ヶ月ほどホテルに缶詰になって、毎日研修を受けるのである。これは和哉にそれほどの苦痛を与えなかった。毎朝決まった時間に起き、社是を暗唱したり、グループでディスカッションをしたりする。食事も同期と共に摂る。久々の集団生活に、和哉は何か新鮮なものを感じていた。

一通りその研修が終わると、新入社員はそれぞれの配属先につく。会社の支店は全国各地にあるのだが、和哉の配属先は東京であった。大学が東京だったから、土地に慣れているだろうと考えられたのかも知れない。和哉の住む独身寮は、埼玉にあった。独身寮といっても借り上げの寮であり、実際は普通のアパートである。駅から遠いのが難点だったが、程よい広さのいい物件だと、和哉はこの住処が気に入った。和哉はそこに引越し、新生活を始めたのである。

当初の予定通り営業部に配属された和哉は、初出社の日、会社のあらゆる人たちに挨拶して回った。ぎこちない卑屈な自己紹介などをしていたが、会社の同僚達は暖かく和哉を迎え入れてくれた。加えてその日、彼らは和哉の歓迎会を開いてくれた。同じ部署に新入社員は和哉一人であったから、始終和哉は色々な人たちに話しかけられ、ぺこぺこしながら彼らと話をした。十二時を過ぎ、ようやく和哉が解放された時には、和哉にもすっかり愛想笑いが尽きていた。
(社会人とは疲れるものだな)

自分の歓迎会とは言え、正直に言ってこれほど社会人の飲み会が疲れるとは思ってもみなかった。常に気を遣いっぱなしで、肩が凝る。酒の弱い和哉は、飲みなれない酒に赤い顔をしながら地下鉄に乗り込み、覚束ない足取りで帰路についた。

それから半年間、和哉の社会人生活は順調に進んでいた。少なくとも傍から見れば、である。しかし当の和哉自身は、

（俺は何故働いているのだろうか？）

という問いを絶えず頭の中で反芻させていた。無論生きるために働いているのであるが、では何故生きているのか、という所まで来ると、とんと答えが出てこなかった。働くために生き、生きるために働くというサイクルに乗る事が出来たら、それは幸せかも知れない。しかしそのためには働くという行為が人生においてよほどの意味を持たなければならぬ。和哉は今の仕事にそれほどの意味があるとは思えなかった。元々内定欲しさに手当り次第に探して得た仕事である。やりがいを感じられないのは当然だろう。そう考えると、やりがいのある仕事に就ける人間などほんの一握りではないかと、和哉は思う。就職活動の際に苦戦した人間など、殆どが自分と同じように不本意な仕事をしているに違いない。よしんば就職活動がうまくいったとしても、その職が自分にとって生き甲斐足り得るものかどうか、それは実際にやってみなければ分からないのである。国民の大半が不本意な生き方をしている様な国が、果たして幸福な国家と言えるのかどうか、和哉がそれを疑問に思わない日はなかった。

夏の暑い朝にスーツを着込み、照りつける日差しに汗だくになりながら駅に向かう。駅の階段を上ってホームに着くと、上り列車のホームは東京で働くサラリーマン達でごった返しており、地獄絵図の様な景観であった。汗と埃にまみれて淀んだ空気の中に、駅の構内放送がごちゃごちゃと鳴り響き、吐き気と頭痛で思わずふらつく。滑り込んできた電車は既に超満員であり、更に乗り込もうとするサラリーマン達は駅員に無理矢理押し込まれる。いつか写真で見たアウシュビッツへ向かうユダヤ人のようである。和哉の会社まで四十分、その状態で我慢し続け、ようやく着いた会社ではつまらない仕事と嫌な上司が待っている。そこから辺りが暗くなるまで仕事をし続け、ようやく仕事が終わると、今度は夜の付き合いだである。上司や先輩に媚び諂いながら、空いたグラスに酒を注ぎ続ける。もっともそういう作法が和哉には身に付かなかった。例えば和哉にはグラスが空いた状態、というのが分からなかった。酒がどこまでなくな

ったら注ぎ足してよいのか分からないのである。それで結局は酒が全てなくなるまで待っているのだが、そうなる前に他の誰かが継ぎ足してしまうのである。その度に和哉は、

「気の利かない奴だ」

等と言われ、先輩に小突かれる。そう言った先輩の御機嫌取り合戦に、和哉は悪戦苦闘していた。先輩の話す話題と言えば、殆どが会社の愚痴や他人の悪口など、取るに足らない事ばかりである。これを長時間聞かされると、ほんと人間が嫌いになる。そこからやっとな解放された時には大抵終電間近か、あるいはそれすら終わっている時は、埼玉までタクシーで帰らねばならない時もある。これが毎日である。ある夜、和哉は駅のホームで酔いつぶれて倒れている若いサラリーマンを見かけた。声をかけたいが、自分にもそのような体力は残っていない。戦友の屍を乗り越えるようにして、和哉はその場を立ち去った。また別の日には、和哉は駅の構内でうずくまっていた。肉体的、精神的に衰弱しきっていたのだ。ふと見ると、和哉の目の前にホームレスが大の字になって眠っている。人は言うだろう。

「ああなったらおしまいだ」

「あの人は可哀想な人なのだ」

しかし今の自分とこのホームレスを比べてどちらが幸福なのか、和哉にはすぐに答えられる自信はなかった。

第三十二章

それでも入社して半年間はまだ良かった。それ以降は、和哉にも個人のノルマというものが課せられた。営業という仕事の、言わば宿命である。ところがこのノルマが、和哉を大いに苦しめる事となる。和哉はこの仕事を本格的に始めて、すぐに気付いた事がある。

（俺にはコミュニケーション能力というものが無いみたいだ）

すなわち、こちら側から一方的にまくしたてる事はある程度出来ても、相手の話を聞き、主旨を理解してから、それに沿う形で適切に返答をするという事が出来ないのである。言葉のキャッチボールがスムーズに続かない、と言うべきか。そう言えば和哉は元来無口な性格であったから、終始会話の主導権を相手に委ねて自分は相槌を打っている事が多かった。自分が何か話す時でも、大抵は単発で終わる。そのような性格の和哉が営業など出来るはずもない。事実、和哉の営業成績は芳しくなかった。

「立て板に水式のトークばかりが営業じゃない」

とはよく言うが、それは最低限のコミュニケーションが成立した上で、「相手の話も聞きましようね」と付け加える言葉に過ぎない。その最低限のコミュニケーションが出来ない和哉には何の意味も成さないのである。そういう和哉には、営業の仕事は苦痛でしかなかった。そればかりか、人と対面して話すのが次第に怖くなっていき、しまいには社内の人間と話す事にさえ相当の勇気を要するようになった。

そうするうちに、和哉は孤立した。社内においてである。営業成績が良くないのと、社内の人間とうまくコミュニケーションがとれない事が原因だろう。組織というものは元来、その組織の中に「共通の敵」を作る性質を持っている。「共通の敵」を持つ事ほど、組織の団結力を高める事はないからである。子供の場合はそれがいいじめになり、国家の場合は差別になる。和哉は自分が社内ですういっ

たものの標的になった事を自覚した。そうすると、立場としては辛いものがある。和哉は単純な事務手続きや荷物の発送など、何の実績にもならない仕事を次々と押し付けられるようになった。それを立場の弱さから、断る事が出来ないのである。恐ろしい事に、実績を上げられない人間ほど、更に実績を上げにくい状況に追い込まれるのが社会のルールであるようだ。

部内の会議などでは、和哉の話す時にはどこからか失笑が漏れるようになり、中には露骨に和哉の営業成績の悪さや口下手をネタにしてはやし立てる者までいた。上司は敢えて部員が見ている前で和哉を怒鳴りつけ、口元を歪めた嫌な笑いを浮かべてこう言った。

「お前はもう辞めた方がいいんじゃないのか？」

それを言われる度、至って冷静に和哉は思う。

（辞めた方が良いならなぜ解雇しないんだ？）

和哉の思う通り、このような状況に陥ったにもかかわらず、和哉は解雇される事がなかった。外資系企業などではこうはいかないだろう。結果を出せない人材など即刻解雇されるに違いない。その意味では和哉のいる会社は日本的な、優しい会社と言う事もできる。しかし和哉は思う。

（解雇された方が良いかも知れない）

解雇される事によって再チャレンジが可能になるのであれば、その方が良いと思うのである。しかし現実には再チャレンジなど不可能だろう。転職市場が活況を帯びているとは言え、まだまだその数は限られているし、第一何のスキルも実績もない和哉の様な人材を欲しがる企業など皆無である事は火を見るより明らかである。すなわち、一度入社した会社には、例えどんな仕打ちを受けようとしてもしがみつかなければならないのである。もし嫌がらせに腹を立てて自己都合退職などしようものなら、未来など闇に葬られてしまう。

辞める事が出来ない。これが日本型雇用の生んだ最大の悲劇と言うべきだろう。

和哉の先輩はそのような境遇の和哉を救ってはくれなかった。そ

ればかりか夜の酒の席で、

「怒られているうちが華だ。目をかけてもらっている証拠だ」

「いじられキャラは得だ。それは愛情表現なんだ」

「期待しているから面倒くさい業務を任せるんだ」

などと説教じみた励まし方で和哉の背中をしきりに叩き、相変わらず夜遅くまで和哉を付き合わせた。勿論、和哉はこのような説教に同意する事は出来なかった。

（愛情があれば何をして良いのか？それではストーカーや強姦魔は許されるのか？パワハラやいじめで自殺した人間に「愛情でした」と申し開きする事が出来るのか？いじめを苦にして自殺した小学生の担任教師は「からかいやすかった。」などと言ったらしいが、それでもそのような性格が得なのか？そもそも本人が望まないことが得であるはずがない。いくら目をかけてもらったところで、それが原因で腐ってしまっただけは何の意味もない。雑務を押し付ける事について一緒だ。お為ごかしを言うんじゃない。単なる上司の好き嫌いで実績にならない仕事割り振られるなら、評価制度に問題があるではないか）

和哉は心中、こんな事を叫び続けたが、その声は誰に届く事もなかった。

第三十三章

和哉は次第に、酒に溺れるようになっていた。都内に雰囲気のいいバーを見つけたのだ。そこでもう飲めなくなるまでウイスキーを呷る事が習慣になっていた。店のバーテンダーともよく話した。和哉は口下手だったが、向こうも商売である。愛想良く接してくれる相手とは、和哉も自然に話をする事が出来た。ともかく和哉にとって、バーにいる時だけが、心休まる時間だったのである。

バーを出て、真っ赤な顔で地下鉄に乗る時、青白い無機質な蛍光灯の明かりの下、現実に戻された様な気がして、和哉はひどく憂鬱になった。地下鉄の窓には、疲れきったサラリーマンが映っている。表情には精気のかけらもなく、肩は下がり、腹の脂肪がだらしなくベルトの上に乗っている。痩せているくせに腹が出ている醜い豚である。和哉は自分の姿に現実を見た気がして、一層足取りが重くなった。

一方和哉の営業成績の方は、相変わらず振るわなかった。振るわないばかりか、自信のない話し方が災いして、相手に罵倒されることも多くなった。

「お前、そんな話し方じゃ女の一人も口説けないぞ」と嘲笑混じりに言われた時には、和哉は我を振り返った。

（言われてみれば女を口説いた試しなど全くないな。好意を伝えるだけで精一杯だった。やはり俺は何も出来ない人間なのだ）

そのようにして、和哉は自分の職業的能力だけでなく、人間自体からも自信を失っていった。自分の存在価値が、いよいよ疑わしくなってきたのである。

そんな和哉も、ついに初受注を取る事が出来た。口下手でも誠実な和哉の性格が好かれたのか、それとも単に運が良かっただけかは分からないが、とにかく受注を勝ち取ったのである。

（俺もやれば出来るんだ）

和哉は喜んだ。田舎の両親に久々に電話をかけ、その事を伝えた。もっとも、その和哉の喜びはすぐにかき消されてしまう事になる。先輩の持っているノルマの方が多いから、という全くもってよく分からない理由で、売り上げの全額を召し上げられてしまったのである。横取りと言っている。

「抗議をすれば良いじゃないか」

と思うかも知れないが、何せ和哉は社内で四面楚歌である。そのような事が言える環境ではなかったのである。

和哉は就職活動時に、面接応答の模範を覚えさせられたこと、圧迫面接を受けた事を思い出した。その理由がようやく分かったのである。企業が欲しがるのは、上役の言う事に従順で、それに文句も言わず耐え忍ぶ事が出来る人材だったのだ。なるほど、そういった人材を確保するためであれば、あの面接にも一定の効果はあるだろうと、和哉は考えた。

（と言う事は、どの企業に行っても実態は大して変わらないのだらう）

転職など元々出来はしないが、もしチャンスがあったとしても、しない方が良く、和哉は確信した。

入社当初、和哉は先輩社員の趣味であるフットサルに付き合わせられたり、会社の自己啓発セミナーに参加させられたりで、休日がつぶれる事が多かったが、そのようなものに参加する事が阿呆らしくなり、次第に足が遠のいていった。

「来ないと明日からだじゃおかないからな」

と、わざわざ和哉の携帯に電話をかけて脅す先輩社員もいた。が、どうせ今でもひどい目にあっているのであるから、行ったところで同じである。代わりに和哉は休日、家で映画などを見て過ごす事が多くなった。昼間からウイスキーを片手にレンタルショップで借りてきたDVDを見るのである。

その中で、和哉は『ショーシャンクの空に』という映画を見た。無実の罪を着せられ投獄された男が、十九年かけて壁に穴を掘り続

け、脱獄するという話である。そして最後には「希望」の素晴らしさを語るのである。

（俺も脱獄したいものだ）

と、和哉は思うのだが、同時に、

（この話は単に運がよかった、というだけの話だろう）

とも思うのである。主人公がそのような策を思いつくほど頭の良い人間だったということ、十九年もの間壁の穴が看守に見つからなかったこと、そもそも壁際の牢屋に投獄された事、脱獄に何の障害もなかったことなど、挙げれば切りがない。要するに、そのような偶然の幸運に恵まれた人間のいう「希望」など何の信憑性もないということである。その他大勢の人間にとって、「希望」は危険なのである。和哉はこのような名作を見ても、希望を得られなかった。ましてや、和哉の場合「脱獄」の意味するところが分からない。会社を辞める事は簡単だ。だが、それでは路頭に迷うだけである。そうではなくこの閉塞状態から抜け出す「脱獄」とは一体何であるのか、和哉は考えねばならなかった。そうして和哉は一つの結論にたどり着いた。

（それは死ぬ事ではないのか）

生きるために働く。その生きる事を辞めれば、働く必要はない。と言っても、働くこと自体が嫌で死ぬ訳ではない。働く事で自分の存在価値のなさをあらゆる角度から証明されてしまうのが辛いのである。そしてその自己否定から抜け出す事が出来ない。自分の存在価値のなさを痛感させられる度に、和哉は記憶を辿って過去に思いを馳せる。

（そう言えば俺は小さい頃から何一つ出来ない奴だった。音楽だけしか取り柄がなかったのだ。友達も少なく、いつも一人だった。人と共感できた試しなど殆どない。この歳になってまともに恋愛の一つも経験していない。仕事もできない。人と会話も出来ない）

こういう自己否定のループに入ると、際限がない。ただその思考の隙間隙間に、

（俺は世の中に必要ない人間なのだ）

という結論が繰り返し織り込まれる。

時は派遣法改正などの影響により、世の中に「派遣切り」の嵐が吹き荒れていた頃である。会社に居続けたら地獄だが、辞めたら更なる地獄を見る事だろう。こうした自己否定も、更に強まるに違いない。残っても地獄、辞めても地獄。これが和哉の出した「死ぬしかないのでは」という結論の背景である。そしてそれ以降、この気持ちちが和哉の中で日増しに増長していった。

ついに和哉は精神に異常を来した。道を歩いている途中、突如として足が一步も前へ出なくなったのである。

（歩けない…）

結局その場に佇んだまま、和哉は一時間近くを過ごした。都会の喧噪の中一人、ネオンが滲む様な朦朧とした思考で立ち尽くしていたのである。

和哉は精神科に行った。結果、すぐに鬱病と診断された。飲み薬を処方され、しばらく和哉はそれを服用していた。が、すぐに中断した。

（薬を飲んで気分が良くなったところで、それが何だと言うのだ？何ら根本的な解決にはなっていないではないか）
こうして和哉の精神状態は悪化の一途を辿った。

会社での和哉は魂の抜けた様な状態であった。仕事が手につかないのである。そうした和哉の様子を見て苛立ったのか、先輩社員は夜な夜な和哉を飲み会の席に連れ出し、日頃の勤務態度の悪さについて説教をするようになった。時には殴る蹴る等の暴行を加えられる事もあった。無論ここまで来ると犯罪行為であるが、和哉にはどうする事も出来なかった。因みにこういった場合にやってしまいがちな誤った対処法として、人事部に相談するというものがあるが、これは自殺行為である。人事部とは元々こういった問題に対処する能力を有していない事が殆どで、その場合持ちかけられた相談をそのまま相談者の上司に返してしまう事になる。それによって相談者

は更に不利な立場に追い込まれるという事となるのである。実際、和哉の一つ上の先輩で、それをやってしまった社員がいた。彼はその後部署の異動を言い渡されたが、配属先の部署というのが、何と彼一人しか部員がいない、彼のために新設された部署であった。彼はそこで何の仕事も与えられず、結局は自己都合退職で辞めていった。そうした前例があったため、和哉は誰にも相談する事が出来なかったのである。

（弱い人間は何をされても文句が言えないのだ）

ここまで聞くと、「なんてひどい会社だ」と言う人がいるに違いないが、これはこの国の企業においてごくありふれた日常である。つまりこれが現在多くの若者の直面する惨状であり、自殺者が年間三万人を超えるこの豊かな国の正体である。

第三十四章

年末、和哉は輪島の実家に帰った。和哉は両親に、自分の置かれている状況について話をした。そしてついに、自分が会社を辞める覚悟である事を伝えたのである。

「しばらく厄介になるかも知れないけど、どうか許してくれ」

和哉は頭を下げた。ところがである。両親は和哉に同情はするものの、退職については否定的であった。世の中は就職難であり、新卒の学生であっても内定が得られない、所謂第二の就職氷河期が訪れていた。恐らく、そういう世相も手伝っての事だろう。

「今は正社員になりたくてもなれない人がたくさんいるんだ」

「そうよ、正社員というだけで恵まれている方じゃないの」

と、両親はあくまでも正社員であり続ける事の重要性を説いた。

「そんな事は分かっているんだ。だけどこれ以上続けても、遅かれ早かれ続かなくなるのは目に見えているんだ。それなら決断は早い方が良い」

和哉はなおも食い下がった。が、両親はこう言った。

「和哉、お前にはこらえ性がない。バンドもゼミも途中で辞めたんだろ。会社を辞めるのはそれとは次元の違う話だぞ。続けてさえいれば、きっと報われる日が来るさ」

「報われる日なんて来ない。出世も無理だし、営業なんてどう努力しても出来るようになってならない。会社にも迷惑をかけるし、俺が居続けても誰一人として得をしないよ」

と、和哉は必死に説得をした。しかし父親は言った。

「会社の事なんか考えなくても良い。正社員で居続ける事だけ考えろ。安心しろ。どんな状況に陥ったところで、クビになんかならない。自分から辞めると言いださなければ済む話だ」

そのとき、和哉は気付いた。両親は自分を正社員にするために自分を生み、育ててきたのだと。今までの両親の愛情は、全て自分を正

社員にするためのものだという事も。そして同じようにこの国も、子供を正社員にするために教育し、そのための価値観を植え付けてきたのだ。和哉の苦手だった集団行動、均質な価値観などは全てサラリーマンになるための訓練であり、それに向いていなかったと言う事はサラリーマンに向いていない、つまり生きる事、人間であることに向いていないという事なのだ。国の為に自己を捨てて兵隊になる事。それこそが自分の生まれた意味であったのだ。そしてそれが出来ない自分は「非国民」だったのだ。新卒至上主義とは国家総動員法に由来しているらしいが、時代は変わってもやっている事は戦時中と何ら変わらないということだ。そしてその事に、誰一人として疑問を抱いていないかの様に振る舞っている。それが世の中においてよく生きると言う事、すなわち「善」であるからだ。

（俺は「悪」だったのだ）

和哉は、浜辺で日本海に沈む夕日を見ていた。美しい世界。「善人」だらけのこの世で、自分は「悪」に生まれたのだ。やっと分かった。生きづらかった理由が。「善」が「悪」を排除しようとするのは当然の事だ。自分を育んできたこの夕日も、「悪」である自分には一日の始まりを告げる残酷な朝日となるのだ。寄せては返すこの波の様に、自分は無になりたい。和哉がそう考えた時、夕日に染まる波が潮風を連れてきて、それが和哉の耳元でそっと何か囁いた。和哉は決心した。

（死んでやるさ）

それしか方法がない。

翌日、和哉は東京に帰った。両親は別れ際、

「何かあったらいつでも連絡をしろさ」

と、和哉を心配した。ただ、会社を辞めていいとは最後まで言わなかった。きっと和哉が死んだら、それなら辞めれば良かったのに、と言うに違いない。全く後悔は先に立たない。

（父さん、母さん、今までありがとう。こんな駄目な人間を生んで、さぞ苦労しただろう。最後まで俺は親不孝者だったね）

和哉は両親に感謝の念を覚えたが、口に出す事はなかった。
（もう来る事もないだろう）
和哉は故郷を後にした。

第三十五章

和哉は東京に戻って早々、近所のホームセンターにロープを買いにいった。一メートル百二十円であった。

（たったこれだけのもので全てが終わるのだ）

和哉は帰宅の道すがら、空腹を覚えた。朝から何も食べていなかったのである。

（何か食うか）

和哉は思ったが、

（いや、死ぬ奴は食事など要らないか）

しかし死ぬ前にしても、空腹は堪え難い。

（最後だから、旨いものを食って死のう）

和哉はその夜、奮発して牛タンなどを食べた。

そして、和哉は帰宅し、買ってきたロープを結んで輪を作り、いつ死のうかと思案していた。今すぐに死んでも良さそうなものであったが、何か踏ん切りがつかない。和哉は仕方なくテレビを付けて、ぼんやりとそれを眺めていた。

テレビではドラマが放送されていた。若い恋人同士のうち、彼女が不治の病で余命半年と分かり、残り少ない人生を恋人と共に送る、という切なくも美しいラブストーリーであるらしかった。

（俺には美しい思い出など何もなかったな）

と、和哉は我が身を振り返った。このドラマの主人公と、恋の一つも出来なかった自分と、果たしてどちらが可哀想か、考えてみた。もうすぐ死ぬと分かっている彼女を愛する事は確かに切ない事だろう。だが彼らの恋に「終わり」があったものの、「始まり」があった。自分にはその「始まり」すらなかった。最初から何もない虚しさ。それを抱えて生きる事は容易ではない。その辛さを、誰にも分かってもらえないからである。人に話したところで、「単にモテない奴」と一蹴されてしまうだろう。その孤独さは、このドラマの主

人公にはない。自分は時に「奥手」「草食系」などと差別される事すらあるが、それは病床に就く彼女の涙を拭う彼を指差して笑う事よりも遥かに残酷な事だ。と、自己憐憫に浸っているうち、やはり自分は死ぬしかないのだという思いが濃厚になった。恐らく和哉が今何を見てもその結論に辿り着くのだろう。

死ぬにしても、何か良いタイミングはないかと考えているうち、そもそも自分の死の原因とは何か、和哉は思いを巡らせた。

（不思議だ。俺の人生はそれほど悪くない。大学を卒業して就職し、生活するのには充分過ぎるほどの収入を得ている。周りに嫌な奴は沢山いたが、かといって人間一人を死に追いつめるほどの悪人は誰一人いなかった。自分は何故死ぬのか。自分の敵とは一体何なのか。）

そう思うと、和哉は自分の死の原因を整理し、はっきりと形に残したいという衝動に駆られた。部屋の隅にある引き出しから便箋を取り出し、黒のボールペンで、和哉は感じるままに書き始めた。

第三十六章

遺書

私は、「悪」だったのです。「悪」である私には生きる権利はありません。それはとても小さな形で、長年に渡って証明されてきました。私は他の人間に共感を覚えた事が殆どありません。例えば、スポーツ選手や芸能人を応援する気持ちが分かりませんでした。自分よりも成功している者を応援する意味が、私にはどうしても理解できないのです。同じ理屈で、私は人を尊敬した事ありません。もつとも、私はかつて音楽好きでしたから、アーティストのCDなどは大いに買いました。しかしそれは自分の音楽性を高めるためであり、アーティストを応援する気持ちなど微塵もありませんでした。他にも、些細な事ですが、私は雨の日に傘をさす人の気持ちが分かりませんでした。雨に濡れる事がそれほど気持ちの悪い事でしょうか？機械類が濡れるのが心配？服が濡れるのが嫌？そんな事はないと思います。濡れる事はそれほど気持ちの悪い事ではありませんし、機械類はポケットや鞆に入れておけば濡れる事は殆どありません。服も一時間足らずですぐに乾きます。私にはどうしても、「雨に濡れてはいけない」という先入観から人々が傘をさしているようにしか思えないのです。まだあります。私は友人と一緒にいて楽しいと思った事がありません。そもそも友人とは何でしょうか？他人の中でもとりわけ共通項が多く、共に過ごす時間が長い人の事かと思えます。そうだとしたら、親しい友人であればあるほど、一緒にいて退屈な人間ではないでしょうか？彼らから学ぶ事はそれだけ少ないのですから。

このように、私は他の人たちとは感性がズレているようで、それが私にはとても孤独に感じられるのですが、残念な事にそれを分か

ってもらえた事はありません。こうした些細なズレ一つ一つが、言わば私の「悪」というものです。「善」は「悪」を容赦なく排斥します。いじめっ子が大抵人気者なのは何故でしょうか？ヤクザ、暴走族、不良を主人公に据えた物語が多いのは何故でしょうか？大量殺戮を行った歴史上の人物に一定の支持があるのは何故でしょうか？彼らは「悪」ではなく「善」だからです。一見「悪」の顔をしていますが、実は多くの人の共感を得ているのです。そして「悪」とは彼らの犠牲になった人たちです。こうして見ると、一見「善」と「悪」の概念は「強」と「弱」の関係と似ていますが、それらは似て非なるものです。所謂「弱者」の中には、「弱者」である事を社会的に認知されている者もいます。あるいは単に努力をしていないだけの者もいます。「悪」とは、「弱者」である事が社会的に認知されておらず、また努力では如何ともし難い差があるのに、それを単なる「努力不足」「自己責任」という形で一蹴されてしまう人の事です。「悪」は何も特別な人の事ではありません。コミュニケーション能力のない人、頭が悪い人、運動神経の悪い人、容姿の悪い人、人の輪の中に入っていけない人、空気が読めない人、その他不器用な人。こういった人たちは常に排斥の危機に晒され、いじめや差別といった憂き目に遭います。しかもそれが「努力不足」と解されているために、こういった仕打ちに遭う事が当然とされています。これが「悪」である人間の宿命なのです。何が「悪」であるかはその時代によって変わるでしょうが、いつの時代も「悪」になるという事は恐ろしい事なのです。戦時中の「特攻隊」「玉砕」「志願兵」などの存在についても、あるいは「祖国のため」と思った人もいたでしょうが、それ以上に祖国のために死ぬ事が出来ない人間、すなわち「悪」になりたくなかったのではないかと、私には思われるのです。つまり彼らは「悪」になる事よりも死を選んだ訳で、「悪」になるという事はそれほど恐ろしいという事です。

そして最も困った事は、「悪」には競争が出来ないという事です。というより、元々競争が出来ないから「悪」になったのかもしれない。

せんが、一旦「悪」になると、他人の援助が得られなくなります。人は一人では生きていきませんから、そうなると増々「悪」は競争ができなくなります。もともと、私は競争を否定するつもりは毛頭ありません。競争をする事でしか良いもの、優れたものは生まれません。動物は何故自らの排泄物を食って生きられないのでしょうか？それは狩りをして獲物を捕まえてはならない、お金を稼がなければならぬ、言い換えれば競争をしなければならないからです。競争こそ生きとし生けるものの宿命なのです。競争をしなければ生きていけない。つまり、競争の出来ない「悪」に生きる術はないのです。

私には、かつて音楽の夢がありました。恐らくその頃から自分が「悪」である事感覚的には自覚していたのでしょう。「悪」である私にも、芸術の道であれば生きていけるのではないかと考えていたのです。芸術はその人自信ではなく、作り上げた作品で勝負できるからです。しかし、私はある時から気付いたのです。芸術の先にあるものは所詮ビジネスであり、競争であったと言う事です。もとより、私には音楽の才能などなかったのかも知れませんが、例え才能があつたとしても、社会と交わる事の出来ない「悪」にビジネスなど無理です。そしてそれ以上に、「善」の振りをしていればしているほど、芸術的感性は閉じてゆくという事です。商業的に成功している音楽がつまらないのは、それが理由だと私は考えます。「善」ではつまらない、「悪」ではビジネスに勝てない。芸術とはそういうものでした。従って私の夢は断たれました。

私は長い間、人を好きになつた事がありませんでした。周りの人がどうして恋愛をしたがるのか、私には分かりませんでした。今まで私に「恋愛をしろ」と言ってきた人たちは数知れませんが、それに従う気にもなれませんでした。何故したくもない恋愛を無理にしなければならぬのか、理解できなかったのです。しかし私は誤解していました。世の中の真意とは、恋愛をしなければならないというのではなく、恋愛をしないことで「悪」になつてはいけない、と

いうことだったのです。私は恋愛の持つ「善」のイメージを全く無視していたのです。私がその事に気付いたのは、初めて恋というものを知った時です。既に「悪」だった私は、どれだけ努力しようとも「善」のイメージに近づく事は出来ませんでした。もともと、私にも「善」を演じることで少しだけモテた時期があります。しかし化けの皮はすぐに剥がれる事でしょう。そんなものが長続きするはずありません。「悪」の私には、恋愛など許されていなかったのです。

いじめが原因で自殺する人たちも、恐らくそういった体験を通して自分が「悪」であることに気づいたのではないのでしょうか。秋葉原の無差別殺傷事件も同じです。モテなかったとか、非正規雇用だったとか、そんな事はきっかけに過ぎません。自分が「悪」であることに気がつき、どうしようもなくなったのでしょうか。卑近な例で言えば、食堂で一人で飯を食えない若者も同様です。周囲に自分が「悪」であることを露呈してしまうのが恐ろしいのです。

音楽に、恋に、学問に、仕事に、私は挫折しました。それらは形は違えど、原因は全て私が「悪」である事にあつたのです。「悪」には何一つ許されていません。これからもずっと一緒です。私はこれから「善」に排斥されつつ、彼らが卑下し、嘲笑を浴びせ、切り捨てたボロ雑巾の様な人生を生きていかなければならないのです。といって私は「善」になりたい訳ではありません。私の目から見れば、彼らはとても醜い存在です。自分も醜く、他人も醜い。このような世の中を生きる事が苦痛で仕様がななのです。どうすればよかったのか。と言われると、生まれてこなければよかったとしか言いようがありません。しかし今からそれを言っても手遅れですから、そうであれば、途中で人生を下りる事が最も賢明な選択ではないでしょうか。

レッド・ツェッペリンの名曲で『天国への階段』という曲があります。あんな風に美しく天国に行く事が出来たら、どんなに良いかと思います。私の場合は、さしずめ非常階段と言ったところでしょう。

うか。多少忙しく上っていく事になりそうですが、それでも天国に繋がっている事には変わりありません。ソクラテスが「死後の世界が無であるならば、それは熟睡している夜のように快適なはずだ」と言っています。それが本当なら、私の行く先は天国に違いありません。「悪」の苦痛から逃れられるのですから。

遺書にしては少し長くなりすぎましたね。「善人」の皆さん、どうぞお幸せに。「悪」は一人で消える事にします。人はそもそも生まれていなければ死んでいないのですから、どうか私など最初からいなかったつもりで、これからも生きてください。それでは。

平野 和哉

第三十七章

和哉は書き終えると、恐ろしいほどに冷静な自分に気付いた。

（死ぬ前の心境とはこのようなものか）

和哉は思う。

（言いたい事は全部吐き出した。しんと静まり返った部屋で一人、何も考えずにいられる時間。気持ち落ち着いている。それはそう
だ。この後、俺は「無」になるのだ。何も考える必要はない）

和哉は部屋に置いてあったウイスキーの瓶を引っ掴み、瓶ごと飲み
だした。暖かな感覚が腹に沁みてくる。とてもいい気分だ。和哉は
音楽をかけた。グスタフ・マーラーの『アダージェット』である。
ゆったりとした旋律が、人生の終わりを優雅に彩った。

（トマス・マンの『ヴェニスに死す』の主人公は、美しい少年を見
ながら死んでいった。そこで人工物は自然の美しさに勝てない事を
知るのだ。俺は美しいものを見ながら死ぬ事は出来ないだろう。だ
が醜いものを見ながら死ぬ事は出来る。自然の摂理という最も醜い
ものを。人間は醜さにおいても自然に勝つ事は出来ないのだ。それ
を噛み締めて死んでいくのも、真理を思い知りながら死ぬという点
では少しも遜色ないだろう）

和哉は美酒に酔いしれた。スーパーで買った安いウイスキーだった
が、これほどの美酒はない。無に帰す前の恍惚感。世界が闇の底に
消える醍醐味であろう。

生と死は原因と結果。死は生の敵ではない。生の一部に死がある
のだ。生活の一部に眠りがあるように。ならば眠りを愛するように
死を愛そう。夢を見るように無を泳ごう。そこには「善」も「悪」
もない。あるのは無であるという認識すら失った無だ。幸不幸の概
念もない。単数複数の概念もない。自他の概念もない。生死の概念
すらない。あるのはただ無だ。そこが天国だ。

和哉はいつしか眠りに落ちていた。そして朝、目を覚ますと、そ

こには絶望が待っていた。

＊

和哉は起き上がると、無表情にロープの輪を掴んだ。それをトイレのドアノブに引っ掛け、ドアを背にして輪から首を出した。足を伸ばし、手を腿の上に置いて、少しずつ体重をロープにかけていった。全体重がロープにかかる、予想以上に首がきつく絞まり、目玉が飛び出しそうなほどに顔がうっ血した。すると視界の中央から紫色の靄がかかり、次第に思考がなくなっていった。思い出が走馬灯の様に駆け巡る余裕などなかった。死の感覚が眼前に迫り、一瞬和哉は無を体験した。と、その瞬間、和哉は目を覚ました。気が付くと、和哉は嘔吐し、大便を漏らしていた。が、恐らく本能的にであろう。和哉の手が床を押さえつけ、体を持ち上げていた。死の寸前で自分を救ったらしい。和哉は首からロープを外し、その場にへたり込んだ。口の周りの嘔吐物を拭うと、和哉は嗚咽した。一人の部屋にむせび泣く声が響く。

（怖かった…）

和哉は、自分に死ぬ勇気などない事を思い知った。

第三十八章

翌日から、和哉は普段と変わらずに出勤した。自分の書いた遺書を鞆に入れてである。世界広しと言えど、遺書を持って出勤している人間がどこにいるだろう。だが、これには和哉なりの覚悟があったのである。

（俺は一度死んだのだ。もう何も怖がる事はない）

和哉はそういう覚悟を遺書とともに持っていた。遺書の他にもう一通、和哉が持っている書類があった。退職願である。和哉は今日、これを上司に渡すために出勤したと言っている。

会社に着くと、和哉は上司に時間を取ってもらい、会議室に入った。和哉は開口一番で言った。

「実は、会社を辞めたいと思っています」

上司はそれを聞いても、落ち着いた様子であった。ある程度予想は出来ていたのだろう。

「ほう、理由は？」

「私は会社に貢献できていませんし、これからも出来る自信がありません。それ以上に、この会社は大変に働きづらいと感じたからです」

「ほう、働きづらい？ どんどころが？」

「私の言いたい事はそれだけです。これをお渡しします」

和哉は退職願をその場に置き、立ち去ろうとした。すると上司はやつと慌てた表情を見せた。

「まあ待て、冷静に話し合えば他の道も見えてくるかも知れない。今の時代会社を辞めてどうする？ どこにも行くところなどないぞ」

「何も考えていません。とりあえず実家に帰ります」

「ならなおさら考え直した方がいい。この会社に住てもやれることはあるはずだ」

何と優しい言葉だろう。しかし和哉はこれを優しさとするべきか否

か判断がつかなかった。というのも、日本企業が人を一人雇うのに莫大なコストがかかる。投資した分の回収も出来ていない若手に辞められたら、上司がその責任を負う事は必至である。それゆえ上司の言葉が純粋な優しさか、保身から来るものか、何とも言えないのである。もつとも、今まで散々な目に遭わされてきた和哉である。そう易々と上司の言葉を信用するはずもない。

「では、少し時間をください。考えてみます」

和哉は食い下がる上司を振り払うようにして、会議室を出た。

こうして、和哉にはしばらく考える時間が与えられた。冷静に考えてみれば、結論を急いで良い事は何もない。時間をおいてみるだけで、何か見えてくる事があるかも知れない。和哉にはそう思われた。事実、気持ちを強く持つだけで、和哉には不思議と新しい生き方が見えつつあった。死を半ば体験した者の強さであろう。

（いいだろう。会社に居続けてやる）

もつとも、ただ居続けるだけでは今までと変わらない。和哉の真意はこうである。

（利用してやる。日本型雇用をな）

一週間後、和哉は上司にこう伝えた。

「自分なりに考えてみましたが、やはりこの会社に居続けても、自分には何の貢献も出来ないと思いました。しかし、気持ちとしては、何とかしてお世話になったこの会社に恩返しをしたいと思っています」

それを聞き、上司はほっとした様子で答えた。

「なるほど、そうか。よし、それじゃあお前に合った仕事が出来るようにするよ」

「はい、ありがとうございます」

上司も阿呆ではない。和哉の取って付けたような美辞麗句を額面通り受け取った訳ではないだろう。それでも快く和哉の気持ちを受け取ったのは、「とにかく辞めてほしくない」という気持ちの表れであろうが、その気持ちが優しさなのか保身なのかは、ついぞはつき

りしない。ただ一つ言える事は、上司がここまで前向きに動いてくれたのは和哉が辞意を表したからであり、そうでなければ「こらえ性のない奴」と一蹴されていた可能性が高い。この点で和哉は日本企業が人を雇用することの高コスト、つまり「辞めさせにくさ」を利用したのである。もともと和哉の考える「利用」とはこのことではない。

「そうすると、平野自身がどういう仕事がしたいのかによってその後の処置が変わってくるが、どういう仕事なら出来そうだ？」

「はい、私にはどうもコミュニケーションの能力が不足しているようで、なるべく人との接触がない仕事であれば、出来ると思います」「そうか、そうなるとうちの部署は営業部だからな。他の部署への異動を考えなければならんが、どこに行っても人とのコミュニケーションというものは必要だ。なかなか難しいな」

「はい、ですが、それが仕事の成果そのものに直結しない仕事が良いと思います」

「うん、わかった。まあそう言う仕事ならあるだろう。関係部署と調整を取りつつ進めるよ。それなりに時間はかかるだろうが、待っていてくれ」

「はい、よろしく願います」

和哉は礼を言って、その場を終えた。

（なるほど、これは良い会社に違いない）

和哉は日本企業の懐の深さに感謝すらしていた。

その日から、和哉は殆ど仕事をせず、周りの目を気にする事なく定時で退社し続けた。勿論余り目立っては困るので、文句を言わない程度には仕事をしていたが、それ以上の事は一切しなかった。成果を求める事なく、ルーチンワークのみをこなしていたのである。夜の付き合いにも顔を出さず、そればかりか自分がやる必要のない仕事は全て断り、出来た時間にはどんどん有給休暇を入れた。

（周りの目を気にする必要はない。どうせ解雇などされないのだから、嫌われたって痛くも痒くもない）

和哉の考えた「利用」とは、まさにこの事である。この策略の要は、「働かない」というところにある。和哉は出世などとうに諦めていたし、日本企業は解雇規制が強く、よほどの不祥事を起こさなければ解雇されない事も知っていた。つまりは居るだけで良いのである。居るだけで給料が払われ、福利厚生で守られ、社会から後ろ指を指される事もないのである。これほど恵まれた既得権はない。いつか和哉の父親が言っていた、

「居続ける事だけを考えろ」

というのは正にこれだったのだ。無論父親は自分に害が及ぶ事を恐れて言ったに過ぎないだろうが、結局はこれで良かったのだ。

（俺は今まで、多くを求めすぎていたのかも知れない）

優秀な社員でありたい、上司や先輩からよく思われたい、自己実現をしたい等、考えてみれば実現が難しく、それでいて生きる事に必要のない願望ばかり抱いていた。これらを全て切り捨て、純粹に生きる事だけを考えれば、これほど生きやすい環境もないのである。が、和哉の心境は複雑だった。

（死んだように生きる事は、死ぬよりも良い事なのか）

生きる事に不自由はしない。だがそもそも「生きる事に意味はあるのか？」という疑問符は依然として残されたままであった。

第三十九章

和哉は以前一度だけ行った精神科に、また通いだした。とりあえず鬱病であれば、薬は飲み続けよう。飲み続ければ、生きる事の意味など考えなくとも済むかも知れない、と考えたのである。

鬱病の治療には、通常保険が適用される。つまりここでも、和哉はサラリーマンである事の恩恵に与っているのである。

（サラリーマンである事は、命を保障されているという事なのだ）
言ってみれば、サラリーマンであることを前提に命の保障がされる訳で、そうでなくなった時には命の保障はないと言う事である。この一点を以てしても、国が国民に対して如何にサラリーマンになる事を強要しているかが分かる。

（この国では、ほんの一部の成功者以外は、サラリーマンになる以外生きる道はない）

と、和哉は痛感した。

和哉が暫く薬を飲み続けていても、一向に「生きる事に意味はあるのか？」の疑問は払拭されなかった。変化と言えば、次第に孤独を感じるようになってきたことである。鬱病が悪化したのか、それとも鬱病が改善して人恋しくなったのか、その原因は分からなかったが、ともかく人と話がしたくてしょうがないのである。とは言え、会社の人間などと話をする気になれないのは言うまでもない。暫くの間、和哉は行きつけのバーに通い続けた。そこでバーテンダーや偶然隣に座った客と話す事で、孤独を紛らわした。和哉にはそれくらい距離を置いた関係の方が居心地がいいらしい。馴れ合いになってお互いの欠点を曝け出す様な関係よりも、むしろ適度に距離を置いて緊張感を保った関係の方が、お互いの美点を分かり合える様な気がするのである。

思えば、コミュニケーションとはお互いが歩み寄ろうとする意志がなければ成立しない。べったりとくっついた状態では歩み寄る余

地がないし、逆にどちらか一方にでも歩み寄る意思が欠けているとこれまた成立しないのである。つまりコミュニケーションと呼ばれているものは本来、お互いが適度な距離を保ちつつ信用し合うという、実に難しい条件下でしか成立しないと言う事だろう。勿論、その上で個人の論理構築力や話題の豊富さが関係してくることは否定できないが、それ以前に前述の様な条件が必須である以上、コミュニケーションとは「能力」ではなく、「条件」に依拠するものと言える。どれだけ論理構築能力の高い、博識の者同士が議論をしても、立場が違えば話し合いは平行線を辿る。これは歩み寄る条件がないからである。逆に論理構築能力がさほどでもなく話題に乏しい人間でも、人を歩み寄らせる条件の揃った者、例えば地位や名声のある者、権力を持つ者、学歴の高い者、容姿の優れた者、見た目の怖い者等はコミュニケーションにおいて有利であると言える。勿論、それも含めて能力なのだと言われればそれまでだが、少なくとも「コミュニケーション能力」などと言うものが、おおよそ個人の努力でどうにかなるものではないと言う事が言えるであろう。全ては条件の産物なのである。和哉にはその事が経験的に理解できていたため、営業という仕事にきっぱりと見切りをつけたのである。そういう和哉がコミュニケーションを求める際に必要な事は、能力を伸ばす事よりも、それが可能な場所を見つける事であった。バーに行く事はその一環と言える。そしてその場所が、時に突拍子もないところに向かう事もあった。

和哉は繁華街を歩いた。キャッチセールスをかわし、向かった先はとある雑居ビルである。看板らしい看板も立っていない、何やら怪しいビルだ。エレベーターに乗り四階まで行くと、そこには蛍光灯の眩い明かりの下、笑顔で待ち受ける男性従業員の姿があった。

「いらっしやいませ。ご予約はされていらっしやいますか？」

「いや、してない」

「かしこまりました。今すぐ入れる娘ですと……」
そう言って従業員が和哉に数枚の写真を見せた。

「こんな感じになりますね」

「じゃ、この娘で」

和哉は気に入った女の写真を指差す。

「かしこまりました。お時間は？」

「六十分で」

「かしこまりました。そうしますと、指名料と合わせて二万二千円になります」

和哉は支払いを済ませた。そして従業員にホテルを案内され、そこへ向かった。

和哉が訪れたのは、とある風俗店である。恐らく、女を知ってみたいとか、性欲の処理という月並みな動機もあった事であろう。だがそういう理由の他にも、和哉がこのようなところに足を運んだ理由があった。それは一言で言えば、自信が欲しかったということである。人並みに女と話をして、何食わぬ顔で肌を合わせて、一人の人間として扱ってもらおう。そんな自分の儚い願いを、嘘でも良いから叶えてみたかった。和哉は思う。

（情けない話だな）

現実世界で認められなかった以上、こういう方法しか自分を慰める手立てが見当たらなかったのである。和哉は今まで風俗になど来た事がなかった。そのためここに来るまでに、和哉には相当の勇気が必要であった。来てみると、自分が犯罪者にでもなったような罪悪感があった。だがそういう和哉を踏み切るに至らしめたのは、「自分は一度死んでいる。もう何も怖くない」と自分に言い聞かせた事であった。こう言い聞かせると、自分には何の躊躇も必要なくなるのである。どれだけ人に嫌われようが、酒に溺れようが、浪費しようが、全く気にならなかった。その流れで、和哉は風俗店に足を運んだのである。

ホテルに着いて暫く待っていると、ドアをノックする音が聞こえた。和哉が恐る恐るドアを開けると、そこには全身を黒い服で纏った一人の女性がいた。店で見た写真と少し違う。が、まあまあ美人

と言えなくもない。髪の毛を後ろで一つに結わえており、額がきれいに出来ていた。体は少し太めだが、その点は和哉にはあまり気にならなかった。

「初めまして、いずみと言います」

いずみとは言うまでもなく、この女の源氏名である。

「ああ、初めまして」

和哉は部屋の中にいずみを通した。

「今日はほんとにいい天気でしたね」

「そうだね、少し汗ばむくらいだったよ」

「お客さん、うちの店初めてですか？」

「ああ、初めてだよ」

「でも、こういうお店は初めてじゃないでしょ？」

和哉は一瞬躊躇ったが、正直に言った。

「いや、初めてだよ。正直緊張してる」

「えー、ほんとですか？じゃあ今日は初風俗？」

「うん、全くの初めてだよ」

「そっか、じゃあ今は彼女さんはいないんだ？」

「ああ。いないよ。作った事もない」

「え？今まで一人も？嘘でしょ？」

「ほんとだよ。俺は風俗に来た事なければ女と付き合った事もない。おかしいだろ？」

「そんなことないけど。でもそういうお客さん珍しいかな。キスは？した事ある？」

「ない」

和哉がそう言うと、いずみはいたずらっぽい笑みを浮かべて笑った。
「うふ」

彼女は唇で軽く、和哉にキスをした。和哉の初キスはあっさりと奪われた。

「じゃあ、今日はサービスしてあげるから。よろしくね」
彼女はそう言うと、シャワールームに入っていた。

（俺は何をしに來たんだっけ？）

和哉は今更ながら疑問に思いながらも、心臓の鼓動が高鳴るのを抑えられなかった。シャワーを出しっぱなしにして、いずみはシャワールームから出てきた。

「じゃ、服脱いでください」

そう言うと、いずみは自ら服を脱ぎ始めた。和哉もそれに従って服を脱いだ。和哉が最後の一枚を脱ぎ終えたとき、いずみは既に全裸であり、和哉の目の前には初めて肉眼で見る女の裸があった。和哉は既に勃起していた。

シャワーで体を洗っているとき、いずみが和哉にこう聞いた。

「ねえ、お兄さんは何か趣味とかないの？」

「今はないな。前は音楽をやっていたけど、今はやってない」

「そうなんだ、じゃあいつも家で何してるの？」

「そうだな、映画見たりとか、あとはずっと考え事してるよ」

「へえ、考え事って、例えばどんな事？」

「うん、人はいつか必ず死ぬのに、生きる事に意味はあるのかな、とかね」

和哉は意表をついたつもりだった。が、いずみは事も無げにこう言った。

「あ、私もそういうことあるある。生きてる意味なんてほんと分かんないよ」

意表をつかれたのは和哉の方だった。いずみは表情一つ崩していない。

「はい、じゃあ先に上がって待っててね」

いずみが和哉にバスタオルを手渡したとき、和哉は気付いた。彼女の左手首には、リストカットの傷跡がいくつもあったのである。和哉はそれ以上何も言えず、シャワールームを出た。タオルを腰に巻き、ベッドに腰掛けて、和哉は考えた。

（彼女の不幸とは何だろう？）

無論、風俗嬢として体売って生活している事自体が不幸である事

には相違ない。だが、恐らくそうせざるを得ない理由があるはずである。それこそが彼女の不幸ではないだろうか。と、和哉は彼女の過去に思いを馳せた。借金か？男に貢ぐためか？あるいはそのような月並みな理由の他にも、何か風俗で働く理由があるのだろうか。

「お待たせ」

和哉が考えているところに、いずみが現れた。

「じゃあ、ベッドに横になってね」

言われるがまま、腰のタオルを外して和哉はベッドに仰向けになった。そこにいずみの体が覆い被さる。乳首の先が和哉の体にちよんと触れ、それが広がるように全身が密着した。柔らかな人肌の温もりが、和哉の心を締め付けた。和哉はいずみの背中に両腕を回し、汗ばんだ掌で抱きしめた。いずみの唇が和哉の唇に触れると、そのままお互いの舌が絡み付いた。ぬるっとした感触が、熱を帯びてほのかに甘い。彼女の舌は徐々に和哉の舌を離れると、和哉の首筋を這い、そのまま乳首、腹、下腹に、つと滑っていく。和哉はそのくすぐったい様な感覚に、思わず声を上げそうになった。思考は既に真っ白である。その後、すっかり硬くなった和哉の陰茎の先に、彼女は軽くキスをした。そして彼女の舌先が陰囊に触れる。冷たく縮こまった陰囊の皺が次第にほぐれていくと、そのまま舌先が裏筋を這い上がっていく。それが頂上までたどり着くと、彼女の唇が徐々に和哉の陰茎をくわえこんでいった。お互いの粘膜が触れ合う、そのとろける様な感触に加え、彼女の舌が口の奥で亀頭の周囲を舐め回し、つんとした快感が下半身を襲った。脳髓が痺れる様な快楽の渦に溺れ、和哉は歯を食いしばって悶絶した。そこから行為を終えるのに、そう時間はかからなかった。

余った時間、和哉は添い寝する彼女を腕の中に抱いて、話をした。
「俺さ、実は鬱病なんだ」

突拍子もなく和哉は言った。彼女は驚いたように目を見開いて、腕の中から和哉を見上げた。

「え？そうなの？全く普通に見えるけど」

「そうだよ。普通に見えるかも知れないけど、辛いんだよ。生きるのがさ。でも今はそれをちょっとだけ忘れてた」

「ふうん」

少しの間を置いて、いずみが言った。

「私もね、鬱病とは違うけど、統合失調症なんだ。今も薬飲んでるよ」

「統合失調症？」

またしても和哉は意表をつかれた。統合失調症について、聞き覚えはあるが、和哉にはその具体的な症状までは分からなかった。

「そう。幻聴がひどいの。薬飲んでれば少しは良いんだけど、もう一生治らないんだって」

「そうなんだ。いつからそうなったの？」

「一年くらい前かな。私この仕事する前ね、トリマーの仕事してたの。犬の美容師ね。それがね、すごく激務で、朝の五時から夜の十時まで働いてたんだ」

「五時から十時？」

和哉は耳を疑った。それは労働基準法違反ではないのか。

「そうだよ。休みも月一しかなかったし。朝の五時から夕方四時まではトリマーをやって、それから夜の十時まではペットシヨップの店員をやるの。後ね、先輩のいじめも酷くて、間違った技術を教えられたりしたんだ。それでも負けたくなかったからずっと頑張ってたんだけど、そうしたら幻聴が聴こえるようになってきてね。医者に行ったら、統合失調症だって言われたの」

そうか。それで働き口がなくなって今は風俗にいる訳だ。それはなかなか壮絶だ。和哉には今までの自分の悩みなどほんの小さな事に思われた。

「それは大変だったね。俺もまあ似たり寄ったりだけど、そこまで酷くないかな」

「そうなの？何があったの？」

「うん、まあ俺の場合は話すと長くなるからな。また今度会ったら

話すよ」

「えー、ずるいよ。私にも聞かせてよ」

「また今度。さ、シャワーを浴びよう。もう時間だ」

そうして和哉の初風俗は終わった。帰り道、別れ際にいずみが和哉にこんな事を聞いた。

「ねえ、私のこと、可哀想な女だと思ってるでしょ？」

少し寂しそうに俯き、そう言った彼女に、和哉は何と言ったら良いのか分からなかった。

「そんな事ないよ。頑張れよ」

和哉は自分の言葉が大分無責任に思われたが、他にかける言葉が見つからなかった。

笑顔のいずみに見送られ、和哉は手を振りつつ、その場を後にした。一人になると、言いようのない孤独感が再び和哉を襲った。

第四十章

和哉が部署異動を願い出てから、半年後、異動先の部署が決まった。異動先はシステムエンジニアの部署だった。要は開発技術職という今までとは全く毛色の違う職に就く訳である。和哉にはシステム開発の技術など何も知らなかったが、そこは異動先でしっかりと教育をするから問題ないと言う。和哉にしてみれば、新たな専門性をゼロから身につける事に多少の不安はあったものの、「コミュニケーション能力」なるものが直接成果として問われる訳ではないという事への安心感がそれを上回っていた。

（俺の希望は叶えられた訳だ）

それから和哉は担当顧客への挨拶や後任の紹介などの残務をこなして、新天地へ向かった。

勤務先は東京都内ではあるものの、以前とは違う事務所であった。新しい事務所は、西武池袋線沿線の東京と言っても埼玉に近いエリアにあった。以前の事務所は都心にあったため、寂れた田舎に来てしまった様な思いが、和哉にはあった。しかし元々和哉の住んでいる寮は埼玉にあるため、通勤は以前より格段に楽であった。通勤してみると、今までの通勤ラッシュが嘘のように快適この上なかったのである。そのため和哉はすぐにこの職場が気に入った。

（都心で働くと言う事はそれだけ大変な事なのだ。それなら無理してそこに居続ける必要はない）

和哉の新しい上司は南田と言って、非常に温厚な正確な人物であった。

「これから平野にうちの部署で働いてもらうにあたって、うちでしっかりと教育をしていこうと思っている。研修や勉強会を用意するつもりでいるから、大いに知識を吸収してくれ」
南田はこう言ってくれた。

「はい、ありがとうございます」

和哉は入社当初の新人研修以外、殆ど教育など受けた事がなかった。OJTの名の下に、放置されてきたのである。そういう和哉にとってこれほどありがたい事はなかった。まずは業務を行う上での、知識不足という心配は和らいだ。

上司の南田もそうだが、システム開発の部署の先輩は皆温厚で優しい人ばかりであった。どうやら営業と開発では携わる人間の人間性が違うらしい。コミュニケーションというのは、こうした条件が揃えば大して努力などしなくても円滑に行えるものである。社内でのコミュニケーションにおいて、和哉は特に苦労はしなかった。

（こっちの方が俺には合っているみたいだ）

配属された当初から、和哉はそう感じていた。そしてそういった環境で仕事をするうち、和哉の気持ちは次第に変化しつつあった。以前の「働かない」ことで日本型雇用を利用するという策略が、和哉の心から殆ど消えてしまったのである。

（ここですらやっていけそうだ）

人間とは努力が報われる事を確信できて初めて就労意欲を湧かす事が出来る。和哉の心境の変化は、こういった観点から見れば当然の事であろう。もっとも、和哉が出世など諦めている事は以前と変わりはしない。出世や報酬と言った目に見える見返りよりも、仕事をしている充実感や、自分が組織の役に立っているという自尊心などといった精神的充足の方が和哉にとっては重要だったのである。それが和哉の考えてきた「生きる意味」足り得るかどうか、和哉には分からなかったが、少なくともそれに近づく可能性を帯びているものであった事は確かである。

和哉は猛勉強した。最初はC#だのデルファイだのと、聞き慣れない専門用語に面食らったものの、理屈が分かってくれば意外と面白いのである。この仕事はコミュニケーションが必要ない分、一日パソコンにかじりついて作業を続けなければならない。が、和哉はそれにあまり苦痛を感じなかった。和哉は自分が何をやっても駄目な人間と思っていたが、ここですら少なからず価値を生み出せる様

な気がした。機械音痴と思っていた自分が、である。

（向き不向きなどやってみない事には分からないものだ）

和哉はこの職場で暫く頑張ってみよう、と思うようになった。

＊

ある晩の事である。仕事ですっかり遅くなった和哉は、久しぶりにバーに行った。特に理由はない。思いつきで、急に酒を飲みたくなったのである。

バーに着くと、和哉はいつものようにカウンターの席に腰掛け、バーテンダーにアードベックのロックを注文した。店の中央にある水槽には、アロワナがゆったりと泳いでいた。

「大分お久しぶりですね」

バーテンダーが驚いたように、話しかけてきた。和哉は既に顔なじみである。

「ええ、職場が変わったもので、ちょっとばたばたしてたんですよ。といっても都内ですから、これからもちよくちよく来ます」

「それはよかった」

そう言うとバーテンダーは他の客の注文を聞きにいったしまった。

（こうしてみると、酒の味が少し変わったな）

営業部にいた頃、和哉はよくこの店に通っていた。その頃の和哉は自信を喪失し、精神の疲労が甚だしい状態であった。しかし、その頃の酒の味は心の傷に沁みる様な味がして、人生の妙味を味わうかのごとく深い旨さがあった。それは一時ではあったが、和哉を救い続けた味であったのだ。今はそれほどの深みを感じない。酒は心で飲むものだと言う事を、和哉はこのとき知ったのである。

（俺にはもう、酒が必要なくなったのかも知れないな）

ふと見ると、薄暗いカウンターの隅で一人、ワイングラスを前にタバコをふかしている女がいた。まぎれもなく、それは風俗嬢のいずみであった。向こうは和哉に気付いていない。和哉は妙案を思い

つき、バーテンダーを呼んだ。

「ねえ、向こうの女性のお客さんに、何かカクテルを作ってあげてくださいよ。あちらのお客様からです、とか言う感じで」

「え、今時そんな事するんですか。私もこの商売長いですけど、未だかつて一度もそんな事ありませんでしたよ」

「いいからいいから」

バーテンダーは渋々和哉の言う通りにした。軽やかな手さばきでバーテンダーがカクテルを作った。鮮やかなオレンジ色のカクテルである。

「あ、あちらのお客様からです」

カクテルをいずみの前に差し出しながら、強ばった表情でバーテンダーが言った。酷く緊張しているようだ。

（お前が緊張してどうする）

和哉はそう思いつつも、自身も興奮を抑えきれなかった。いずみが和哉の方を向いた時、和哉は満面の笑みで言った。

「やあ、この間はどうも。奇遇だね、こんなところで会うなんて」

いずみははっと気が付いた様な顔をして、さっと顔を伏せた。プライベートで客に会うという事が、やましく思われたのかも知れない。

「良かったら一緒に飲まない？」

和哉の提案に、いずみは少し迷った様な顔をしながら首を縦に振った。

「…うん」

和哉はいずみの隣に座った。和哉の行動は、いずみにとっては迷惑な行為だったかも知れない。こうした場合、見て見ぬ振りをしてやり過ぎるのが常識、と言えば確かにそうだろう。が、和哉は元来そうした常識に乏しいところがあり、かつそうした常識に縛られる事を嫌う性格であった。偶然会ったのだから、これも何かの縁だろうと、和哉は考えたのである。

「今日は仕事あがりかい？」

「そうだけど」

プライベートのいずみは、和哉が以前会ったときとは打って変わってクールであった。それはそうである。和哉は今、客ではないのだ。

「そうか。ここにはよく来るの？」

「まあ、たまにね」

「酒が好きなんだね」

「そうでもないよ。ただ一人でゆっくりしたいだけ」

「そうなの？じゃあまっすぐ家に帰れば良いじゃないか」

「怖いよ。家に帰るのが」

和哉は先日のでいずみとの会話を思い出した。統合失調症による幻聴に悩むいずみ。そんないずみにとって一人の家は恐ろしい場所なのだろう。和哉にはその気持ちが痛いほどによく分かった。都心に勤めていた頃、和哉も家に帰るのが嫌で、毎日のように繁華街を放浪していた。家に帰ると一層憂鬱になるからである。今でこそ和哉は職場からまっすぐ家に帰る事が多いが、それは職場から家までの途中に寄り道をするような遊び場がないからである。もしそういった場所があれば、今でも寄り道をしていたに違いない。

「そうだよな。気持ち分かるよ」

和哉が言う。思い出したようにいずみが言いだした。

「そうだ。この間の話の続きをしてよ」

「話の続き？ああ、そう言えば今度会ったら話すっていったな」

「そうだよ。あ、名前聞いても大丈夫？」

「ああ、和哉だ」

「そう。じゃあ和哉の話をしてよ」

和哉は話した。音楽の夢を志して上京し、それに挫折したこと。学問に励もうと決心したが、就職活動によって断念したこと。就職して営業部に配属されたが、仕事が出来ず、働く意味も分からず、とうとう生きる意味を見失ったこと。鬱病になり、自殺未遂を起こしたこと。それぞれをかいつまんで、かつ赤裸々に語った。

一通り話を聞き終えると、いずみは新しいタバコに火をつけて言った。

「ふうん。ちゃんとした大学出て、会社に勤めてても大変なんだね。私は高卒だし、仕事って言ってもこんな仕事だから、知らなかったけどさ」

「閉塞状態から抜け出せないって言う意味では似た様なもんだよ。営業部にいた時は本当に逃げ道がなくなつて、八方ふさがりだった」

「私もトリマーの仕事してたときはそうだったよ。頑張つて続けたいつて言う気持ちもあったけど、それ以上に辞めたらまともな就職先なんてないって分かつてたから、辞められなかった」

「そうしてそのうちに病気になってしまったと。本当にそっくりだな、俺ら」

「ふふ。でも私はドロップアウトしちゃったから。今でもスーツ着て働いてる和哉とは雲泥の差だよ」

「俺は運がよかっただけだよ。一度会社に辞めるって言ったんだ。そしたら引き止められて、部署異動っていう形で居残る事になったんだ。お陰で今は順調だよ。だけど辞めてたら今頃どうなってたか分からない」

「そうなんだ。場所が変われば人間も変われるのかもね」

「そうなのだ、と和哉は思った。

（場所が変われば人間も本来の力を発揮できるのだ。例え「悪」だったとしても、生きる術はあるのだ。いずみだって他にできる仕事はあるはずだ。なのになぜこの国はこんなにもチャンスが少ないのだ？）

いずみが体を売って生活せざるを得ない理由。それは和哉を自殺に追い込んだものと同根であった。能力を発揮できる場所に移動する事ができず、浜辺に打ち上げられた鯨の様に身動きが取れないのである。この時から、和哉は考え始めたのである。

（いずみにそういう場所を提供してやりたいものだ）

風俗嬢一人に入れ込み過ぎ、という事は和哉も承知していたが、何せ境遇が自分と似通っていたため、どうしても同情せざるを得なかったのである。

バーを出て、別れ際に和哉はいずみに聞いた。

「なあ、そういえばまだそっちの名前を聞いてないんだけど。聞いても大丈夫？」

いずみは少し考えて、こう言った。

「うん、また今度会ったら教えるよ」

「そうか」

また今度があるのだろうか。根拠はないが、和哉にはあるように思われた。

「じゃ、またな」

いずみに手を振って和哉は別れた。いずみの背中が見えなくなるまで見送ってから、和哉は踵を返して歩き出した。歩いていると、一人の部屋に帰る寂寥感が湧いてきた。

同じく一人部屋に向かういずみを想像して、和哉は帰宅した。

第四十一章

和哉の鬱病は、すぐに職場に知れ渡った。和哉が自ら申告したのである。実を言うと、和哉が日頃服用している薬は副作用として強い眠気を伴うもので、和哉は仕事中に何度もとうとうと眠くなってしまう事が多かった。そればかりか、朝どうしても起きる事が出来ない事もあり、度々遅刻をするようになっていたのである。そのため和哉は上司の南田に、自分が鬱病の治療中であり、薬を服用しているために度々そういった形で迷惑をかける事があると、説明せざるを得なかったのである。和哉は今の職場が好きであり、何も悩みはなかったが、鬱病とはそうすぐに完治するものではなく、薬の服用を中断する訳にはいかなかったのである。南田は和哉にこう言った。

「平野の現状はよく分かった。うちの部署でも平野が働ける様にサポートをしていくつもりだ。何かあったら何でも相談してくれ」

和哉は申し訳なさとなりがたさで、始終頭を下げ、うなだれていた。そういう気持ちも手伝って、以前にも増して和哉は懸命に仕事をした。暫くはバーに行くのもやめ、まっすぐ家に帰り、業務知識習得のための勉強をした。そして夜は出来るだけ早く寝るように心がけ、とにかく職場に迷惑がかからない様にしたのである。

職場の方はそれで特に問題はなかった。鬱病患者という偏見などは特に受けず、それどころか周囲は和哉の負担が大きくなならない様にと気を遣ってくれたため、仕事がしやすかった。ただ、それでも時折いずみの事が気にかかった。

（いずみは今どうしているだろうか）

人の心配などをしていない事にはよく分かっていたが、それでも放っておけないほどに、和哉の心にはいずみの事が強く刻み込まれていたのである。と言っても恋に落ちたのとは違う（と和哉は思っている）。自分が苦しんだ分だけ、同じ要因で苦しんでいる

人を救いたいという気持ちが強かったのである。おせっかいかも知れない。だがあのリストカットの傷をあれ以上増やしてはいけない。と和哉は思った。

（俺に何が出来るだろう）

それを考えつつ、時間は過ぎていった。結局何も答えが出ないまま和哉が久しぶりにバーを訪れたのは、いずみに会ってから二ヶ月が過ぎたある休日の事である。

＊

バーに着くと、和哉はいつものバーテンダーに聞いた。

「この間僕がドリンクを渡した女性がいたでしょう。彼女あれから来店してませんか？」

バーテンダーはグラスを拭きながら答えた。

「ああ、たまにいらっしやいますよ。かなり不定期ですけど。それはそうと、ドリンク渡したのは僕じゃないですか」

「毎週何曜日の何時頃に来るとか、そういうのはないですか？」

「いや、特に曜日は決まってないですけどね。時間帯はかなり遅くに来てますね」

「そうですか」

その日、和哉は終電間際まで店に居座ったが、結局いずみは来なかった。

その日から、和哉は出来る限り足繁くバーに通った。といっても病状が悪化すると困るので、その日の体調が良い日に限られていたが、それでも幾度もバーに行き、その度いずみが姿を現さない事に落胆して帰宅するという日々が続いた。

（もう一度風俗に行っていずみを指名しようか）

という考えがふと和哉の脳裏を過ったが、それは和哉の本意ではなかった。客としてではなく、一個の人間として、対等な立場で話をしたかったのである。加えてバーテンダーが会うたびに、

「あ、昨日いらっしやいましたよ、彼女」

などと言うものだから、もうすぐ会えるのではないかという予感がして、「今日こそは」と期待してしまうのである。しかし和哉のいる間、いずみは一度も店に訪れなかった。

（どうもタイミングが合わないみたいだな）

和哉は自分の運のなさを呪った。

事態が好転したのは、ある金曜日の事である。和哉はいつもの様にバーを訪れ、いずみが来るのを待った。その日和哉は覚悟を決めていた。

（明日は仕事も休みだし、終電を気にせずに閉店までいる事にしよう）

そう腹を括って、和哉は飲み続けた。周りの客が段々といなくなり、店内に流れるジャズがはつきりと聴こえるほどに、辺りは静かになっていった。

和哉がウイスキーを呷り続けて酔いつぶれ、カウンターに顔を伏せて眠っていた午前二時頃の事である。横から聞き覚えのある声が聞こえる。

「あー、あつと仕事終わったよ。田中君、いつものちようだい」

和哉は一気に目覚め、声のする方を虚ろな目で注視した。見ると派手なファッションで身を包んだいずみがいた。

「あ！」

「あ」

お互いに顔を見合わせて、暫く沈黙した。

「おや、やっと会えましたね。平野さん」

バーテンダーが余計な一言を発した。

（どこまでも気の利かないバーテンだ）

和哉は思いながらも、飛び上がりたい衝動を抑えて、落ち着いた表情で第一声を発した。

「やあ、久しぶりだね」

和哉は出来るだけ平静を装った。

「ああ、どうも」

素っ気なく答えるいずみに、和哉は少しだけ時間の隔たりを感じた。

「今日も仕事上がり？」

「そうだよ。和哉も？」

いずみは名前を覚えてくれていた。和哉は安堵した表情で答えた。

「うん、仕事上がりだよ」

「それにしても今日は遅くまでいるのね」

「おお、明日は休日だからな。今日はとことん飲み明かそうと思っ
てさ」

「えー？ 一人で？」

「そう、一人で」

「それはそれは。じゃあ邪魔しちゃ悪いわね」

いずみは例のいたずらっぽい笑みを浮かべて、和哉から離れていこ
うとする。いずみの八重歯が口元からのぞくと、和哉も自然に笑顔
になる。

「いや、出来れば二人がいいな。一緒に飲んでくれ」

「そんな事言って、あんたこれ以上飲んだらヤバいって顔してるよ」
和哉の顔は既に真っ赤であり、殆ど呂律も回っていない。

「そっか。じゃあ一緒に外に行こう。どこか他のところに場所を移
そう」

「何言ってるのよ。私今来たばかりだから」

「そうか。じゃあ飲み終わるまで待ってる」

和哉はそう言っていると、ラフロイグのロックを頼んだ。

「そういえば、いずみちゃんの名前を聞いてなかったな」

和哉は思い出した様に言う。が、無論これが一番聞きたかった事だ
ある。

「ああ、そういや言っでなかったね」

そう言っていると、いずみは和哉の方に向き直り、恭しくお辞儀をしながら
言った。

「私、かおるって言います。よろしくお願いします」

「へえ、かおるちゃんか。良い名前じゃないか」

「え、どこが？ 私自分の名前嫌いなんだよね。ださいし、女か男か分かんないし」

「はは、まあでも俺は好きだな」

「意味分かんない」

そう言うのと、かおるはタバコに火を付けた。

「でもさ、客に名前教えたのなんて初めてだよ。大体さ、客にプライベートで遭遇するところからして初めてなんだよね。驚いちゃったよ。しかも二度までも遭遇するとはね。っていうかあんた、もしかして今日私の事待ってた？」

かおるは自分で話しているうちにようやく事の真相に気付いた。が、和哉はその時、既に座ったまま眠っていた。

（こいつ本気なの？）

かおるは自分が予想以上に気に入られている事に、複雑な思いを抱いた。かおるがタバコの煙をくゆらせる中、和哉のグラスの水が、時折カランと澄明な音をたてる。

第四十二章

「いいかげん起きなさいよ」

いずみ、いや、かおるの声がする。和哉はゆっくりと目を覚ました。

「大丈夫？酒弱いくせに強い酒飲み過ぎよ」

和哉はやっと現状を把握すると、かすれた声で話しだした。

「ああ、もうこんな時間か。もう飲み終わったか？」

「飲み終わったか、じゃないわよ。酔いつぶれてる人を置いて帰れないじゃないの」

「ああ、悪い悪い。じゃあ、場所を移すか」

和哉はすっかり良いがさめた様子である。酔いやすくさめやすい体質らしい。

「場所を移すって、こんな時間じゃどこも行くところなんてないわよ」

「大丈夫。探せばきっとあるさ」

「帰らなくて大丈夫なの？」

「今の時間電車なんてないよ」

「タクシーで帰りなよ」

「嫌だよ。俺さ、かおると一緒なんだよ。家に帰るのが怖いんだ。だからって訳じゃないけど、もう少し一緒にいてくれないか」

和哉は鬱病であり、一人で家にいるとその症状が悪化する。従ってこの発言は真実である。だが下心が全くなかったと言う事もない。かおると一緒にいたい。そういう思いがこの発言の背景のむしろ大半を占めていた。かおるも家に帰るのが怖いと言っていたし、自分もかおると一緒にいる事で救われる。それならばお互い一緒にいた方が良いではないか。というのがこの発言の正しい解釈である。そういう思いがかおるに伝わったかどうか分からないが、かおるは仕方なさそうに言った。

「あんた今までぐっすり寝ておいてよくそんな事言えるわね。わかったわよ。とりあえず外に出よ」

和哉を置いて帰らなかった事と言い、どうやらかおるは困っている人を放っておく事の出来ない性格らしい。

「ありがとう」

和哉は微笑むと、二人分の勘定を済ませた。

「ちよっと、自分の分くらい払うわよ」

「いいんだ。今日は払わせてくれよ」

「無理しちゃって」

二人は店を出た。バーテンダーは何故か満足そうに笑って、二人を見送った。

二人は店を出た後、とりあえず近くのカラオケボックスに入った。和哉は今までカラオケなど殆ど行かなかった事がない。中学の同窓会で一回行った記憶があるくらいである。何せそういう青春らしいところの一滴もない青春時代を送ってきた訳だし、そうでなくとも元バンドマンである和哉がカラオケに行くことがあるはずもない。

個室に入ると、かおるは和哉にマイクを勧めた。

「あんたが言いだしたんだから、トップバッターはやってくれるのよね？」

「しょうがないな、よく聞いとけ」

和哉は数少ないレパートリーの中から、一曲を選んで入力した。

和哉は音楽をやっていただけあって、歌も割とうまい。カラオケの経験が殆どない和哉は、自分でも驚くほど上手く歌う事が出来た。歌い終わると、かおるは拍手し、

「何だ、意外と上手いじゃないの。じゃ、私も入れる」

それからずっと、かおるは歌いっぱなしだった。歌い始めるとマイクを離さないタイプらしい。和哉はずっと聴き手に回って手拍子などを打っていた。

（カラオケがこんなに楽しいとはな）

和哉はずっとカラオケなど行きたいと思った事もなかったが、今はこれほど楽しいものがあるのか、とすら思う。いや、カラオケ自体ではなく、かおると一緒だから楽しいのであろう。無論和哉はその

事に気付いている。

（遅れて来た青春だろうか）

和哉は今、二十六歳である。この歳で、社会人になってからこのような青春が巡ってこようとは思ってもみなかった。今まで自分には青春などなかった。それどころか鬱病になり、自殺未遂を起こし、暗い人生を歩んで来た。しかしその事が、かえって今この瞬間の幸福度を高めている気さえするのである。全てはこの時のためにあったのだと、思わずにはいられなかった。かおるが熱唱する姿を見て、和哉は思う。

（かおるも同じ気持ちでいてくれればな）

こうしてかおるが幸せそうにしていれば、他に何も要らないと、和哉は思った。他人の幸福を願う事で、こんなにも幸福な気持ちになれる。そう和哉が気付いた瞬間だった。

「ねえ、和哉も歌いなよ。聴いてばっかじゃつまないでしょ」

そう言われるが早いのか、和哉は立ち上がり、かおるを抱きしめた。

「ありがとう」

和哉は涙が止まらなかった。自分にもこんなに人を想う気持ちがあったなんて、知らなかった。「悪」は人に共感できない、人を愛せない。そんな呪縛から解き放たれ、自分が一人の人間であることを認識できた喜び。これからも人間として生きていけるのだという心の光明。それは「生きていてよかった」と、和哉が初めて感じた瞬間であり、他でもなく希望というものの感触であった。

それ以上、かおるは何も言わずに和哉を受け入れた。季節は晩冬。春はすぐそこまで来ている。春は希望の季節である。都心のカラオケボックスの一部屋で、その萌芽が芽生えつつあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8279x/>

或る「悪人」の幸福

2011年12月1日21時52分発行